
THE CENTRAL REVIE
中央公論
第廿年第三号

近刊豫告

明治闇黒史は、表面の事實に耳を假さずして常に裏面の消息に注目せる明治年間の活歴史なり、權貴者と浪人、勢力者と無勢力者、強者と弱者とが感情と利害との衝突に依り暗鬪せる時代推移の眞相を描寫せる社會史なり

有磯逸郎著

明治闇黒史

三月下旬發賣

紙數約四百頁

上卷 には、明治新政府の創設に筆を着け、維新派と復古派の二大潮流を擧げて、公家と浪人、藩主と藩士との衝突を描き、横井平四郎の横殺、廣澤眞臣の慘殺より、愛宕事件を中心として、當時全國に彌蔓せる復古派の面目を發揮す。其の前後に、圓海坊の奧羽十七藩同盟の劃策あり、雲井龍雄の叛あり、大村益次郎の襲擊を前提として、長州騎兵隊の暴動あり、掉尾の運動として、丸山作樂の朝鮮計劃あり

中卷 には、征韓論破裂より筆を起こし、全國に磅礴せる士族の反抗運動に入りて、西南戰役の大破裂に筆を收めたり。其の間に江藤新平の叛あり、熊本の神風連の叛、前原一誠の叛あり、前原と連絡せる永岡久茂の思案橋事件は、其の後を承け、西南戰役に至りて、士族の黨爰に全敗す。然かも之を前にしては、芝增上寺の燒拂あり、岩倉具視の要擊あり、後には林有造等の政府顚覆運動あり、竹橋暴動あり

下卷 には、自由民權論を中心として、初めて我國に起りたる國民大運動を紹介す。立志社及嚶鳴社に依りて鼓吹せられたる自由民權論の勃興は、政黨の現出を促がし、然かも政黨の挫折に依りて、政界再び闇黒に陷り、秘密結社の類四方に起こる。福島事件を先驅として、群馬事件、加波山事件、秩父暴動、飯田事件、名古屋事件、靜岡事件等相繼いで起り、大井憲太郎等の大阪事件に至りて、僅に一段落を告ぐ。

昨今東京燒拂の暴動に驚ける世人は、本書に就て、動亂の來る因由を探れ、本書は、斯くの如き變調に對して靜かに警戒と教訓とを與へつゝあり

發行所 東京本郷區西片町 反省社

次號豫告

中央公論

陽春號

陽春四月花將さに開かんとするの時、花に先つて爛漫の美を恣にするものは我陽春號なり

▲「陽春號」は昨年十一月發行の「二百號」と全しく、紙數を增加し、材料を精選し、美裝して以て江湖の諸彥に見えんとす

▲「陽春號」に寄稿執筆を依賴したる諸大家の氏名左の如し

夏目漱石氏（小說）　川上眉山氏（小說）
內田魯庵氏（小說）　德田秋聲氏（小說）
和田垣謙三氏（蛇の說）　土井晩翠氏（長詩）
丘淺治郎氏（論文）　金子馬治氏（文藝論）
井上哲次郎氏（男女學生交際論）　佐々醒雪氏（文士生活と書肆）
安部磯雄氏（社會主義論）　戶水寬人氏（論文）
浮田和民氏（論文）　中村進午氏（論文）
藤代禎輔氏（俳優養成論）　上田萬年氏（論文）
福來友吉氏（現時宗教界心理觀）　蒲原有明氏（長詩）
竹越與三郎氏（論文）　與謝野晶子女史（短詩）
成瀨仁藏氏（男女學生交際論）　桑田熊藏氏（論文）

予の愛讀書（姉崎正治氏、登張竹風氏、與謝野晶子女史、山路愛山氏、佐々醒雪氏、川上眉山氏等）

等にして尙續々依賴しつゝあれば發行の上は恐らくは初めて丙午文壇をして九鼎大呂よりも重からしむべきを信ず

▲「陽春號」は四月一日發行、定價本號に限り三十錢（郵稅共）也

中央公論第二十一年第三號目次



此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

櫻冠

毎月一回初號二月十五日發行

櫻冠は中央公論第二百號の紀念として生る
櫻冠は男女學生の筆を揮ふべき唯一の壇場なり

「櫻冠」は巻頭必らず文壇諸大家の趣味ある文話を掲載す
「櫻冠」は賞を懸けて實力ある秀才の詞文を募り公平なる選評を加へて尤も卓絶したるものを掲載すべし
「櫻冠」は光榮ある花冠を捧げ嶄然世上同種類の雜誌に超越す

●内容● △論文△小説△小品文△新體詩(以上第一種)△和歌△俳句△川柳△へなぶり(以上第二種)

投稿規定 △第一種原稿紙(十行廿字詰)十枚以下△第二種一人二十句以下 ●期限● 毎月十日締切

懸賞 (第一種)特等、五圓。一等、三圓。二等、一圓。三等、七拾五錢。四等、五拾錢(第二種)特等、二圓。一等、一圓。二等、七拾五錢。三等、五拾錢。四等、三十錢。以上受賞者四拾人

△賞金の送附は最も確實にして且つ迅速なり△定價一ヶ月金拾一錢三ヶ月金卅二錢(郵税共)

○初號は二月十五日を以て發行せり
○二號は四月一日に發行すべし

發行所 東京市本郷區西片町十番地 反省社



第二十一年
第參號
(二百四號)

政黨の墮落

第二十二回帝國議會、殊に衆議院は、國民を代表して戰後經營の大事業に屬する諸種の題案を審議するものとして、當さに一世の視聽を集中せしむべき筈なりし也、而して事實は之に反す、是れ衆議院の主たるべき政黨墮落の反證に外ならず

總計十億圓を算する卅九年度豫算案は、假令逐條審議せずとも、其の不完全なるとは推知し得、現に此の豫算案を調製したるものは前内閣にして、當時閣臣の多數は既に辭職の決心を爲し、豫算案調製の意思幾んど無かりしも、一日其の職にあれば、一日の責を盡さざる可らずと做し、勉強して之を作製したるものなりと聞く、去れば其の陸海軍の如き現事尚ほ幾分か戰時狀態にあるものを除くの外は、自然心を籠めたる設計に非ざるとは之を推測するに難からず、而かも况んや各省とも多少の懸掛を計上すると、政府從來の習癖なるに於てをや、故に政黨等眞に國事を擔當して局に立つの誠心あらば、平生より財政整理の案は査定し置くべき筈なり、豫算案を見、其の説明書を讀み、數字を計算するに非ずんば之を奈何ともするとは能はずといふが如き、全く財政の伎倆と智識なき者の痴言のみ、况んや戰後經營の大問題に於てをや、其の廢すべきもの削るべきもの、及び新たに興すべきものの大要をすら豫め立案し算定し置かざるは、全く國事に不親切を極むるもの也、到底國事を擔當して其の局に立つの力量なきもの也、抑も問ふ。彼等の師表とする英國の政黨(殊に在野黨)なるもの果して斯の如しと爲す乎

今議會に於ける政府の死活問題と稱せらるゝもの

二、曰く國債整理基金法案、曰く非常特別税の繼續案是れ也、前者は確かに多數實業家の贊成する所なりしも、政黨は却つて多く之に反對したりき、彼の政友會が大同倶樂部と共に之を贊成したるは、心よりして然りしには非ず、猶ほ東京日々新聞に據りて曾て此の法案を痛擊したる加藤高明氏が外務大臣となるに及んで忽如前説を飜へしたると齊しく、政友會は單に政府黨となれるが故に之を贊したるに過ぎず、其の多數者を撿すれば、憲政本黨と同じく曾て反對論を懷けるもの也、而して是れ政黨が多數の民意、適切にいへば多數實業家の意向を代表せざるものにして、素より政黨の本分にあらず

　但し政事家なるもの必らずしも民心に從ふを要せず、時としては民心に逆ひ、民心を導びきて竟に我が方針（曾て民心と反對なりし方向）に從はしめざる可らず、民心に從つて其の國を過まりしもの、普漏西と開戰して大敗したるナポレオン三世に於て殊に適切なる例を見る、若し我が政黨の國債整理基金法案に反對せる、敢て民心に逆ふも之れを良導する精神に出づといはゞ、大に稱するに足るものあらん、然かし彼等平生實業家の意を迎えて殆んど媚從是れ事とす。今其の意に逆ふて彼の案に反對するは、出て以て政府を攻擊せんとするのみ、而して政友會の多數者が曾て憲政本黨と同説を唱へしも亦唯だ之を以て時の内閣（桂内閣）を非難せんとせしのみ、換言すれは、彼等政黨の能事は政府攻擊に在り、其の實利害を研究して民心を代表するが如きは素より關する所にあらず

　非常特別税中、不良の惡税あると何人も之を知らざるなし、但だ疾苦を忍んで之を負擔したるは戰時奈何ともす可らざりしが故のみ。然りと雖も彼の大戰役の後、國家の地位大に高まり、國家の事務益々繁雜を加ふ、隨つて政費の增加は勢ひの自然に出づ、國民の心あるもの皆增税の已む可らざるを覺悟す、唯々非常特別税中殊に不良なるものを改めて、他に適當なる新税又は增税を課するを要望するのみ、故に政黨等平生茲に調査する所あつて公平の税案を立つるを至當と

ず、然るに非常特別税を攻撃しながら、曾て之を改廢すべき成案を有せず、徒らに辯難駁撃するに止まる。政黨の經綸なき寧ろ驚ろくべし、斯の如くにして信を天下に得んとする難い哉

凡そ國民の多數を代表して議會に臨み、最も財政上に至大の權利を有する政黨にして、曾て實行すべき財政案を有せず、又必らずしも民意をも代表せず、唯だ徒らに口舌を弄して攻撃と破壞とに努むるのみ、歳計の紕謬を匡す能はず、租税の不良を改むる能はず。光輝あり活氣あるべき議會をして、衰殘老古の陋態を現せしむるは、政黨平生に於て理想を有せず活動する所なければ也、夫れ理想なく活動なきは幾んど生命なき也、嗚呼今の政黨豈啻だ墮落に止まらんや

私かに其の由て來る所を案ずるに、政黨が其の首領を信頼せず、首領の命令に由て活動せざるの罪也、彼等實に首領を戴くと雖も、畢竟神輿として舁上ぐるのみ、事々物々多數の合議を以て行はんとし、少く心に合はざれば直ちに不平、怨恨、次ぐに分離を以てす、故に其の首領なるもの多數の意を迎へんがため、時に無責任又は不得要領の大言壯語を爲すに止まり、多少の抱負あるも、之を黨員に命令して調査し立案し、能く之を遵奉し主張せしむる能はず、而して黨中の心あるもの亦大抵彼を憚かり此を恐れ、首領を輔佐して大に成すとある能はず、政黨の理想なく活動なく、幾んど生命なきが如き、何ぞ甚だ怪むに足らんや。彼等政黨何ぞ口に英國政黨を賛しながら、其の實際の組織を擧て英國流とせざるや、早く改むる所なくんば、或は恐る。其の期待する所の政黨内閣未だ成らずして、政黨自身却つて國民に嫌惡せられて先づ自滅するに至らんとを

近時崇拜さるゝ人格

時艱にして英雄出づ、日露戰役は我が國未曾有の大事なりし丈けに、多くの英雄を現出したり、就中其の名聲世界に高くして、我が國民多數の景仰を享くるも

の、何人も先づ指を東郷乃木の兩大將に屈すべし

曾て旺烈なりし黄金崇拜熱は、今や稍々冷却して英雄崇拜熱之に代れり、是れ寧ろ悦ぶべき傾向ならずんばあらず、前者は唯物主義なり物質的なり、後者は名譽主義なり精神的なれば也、兩者素より一に偏すべからずと雖も、貧富の懸隔甚だしくして人多く生活に苦む今の如き時代に方つては、前者（黄金崇拜）に偏せんよりも寧ろ後者（英雄崇拜）に偏するを可とすれば也

名譽必ずらしも富に伴はず、否多くの場合に於て名譽と富と相背むくを例とす、孔子は陳蔡の厄に苦み、顔淵は單瓢屢々空しかりき、失樂園（パラダイスロスト）の詩と共に千古に不朽なるミルトンは一個の海運見にして、十八世紀第一の文豪と稱せられしスヰフトは、煩惱して竟に狂者の如くなりき、然るに看よ、三井三菱は富能く天下に冠たるも、其の人の名の後に傳はること、却つて一枝の筆に終生呻吟する文士にすら如かざるべきことを、武功文勳の赫々として世界に不朽なる英雄に比すれば、彼の富人なるもの畢竟憫むべき醉生夢死者のみ、世の人若し能く此の理を辨知して、黄金よりも名譽の遙かに貴ぶべき所以を解せば。啻だ其の人の幸ひのみにあらず。又實に人生を眞善美ならしむるに與つて力あるべし、吾人が英雄崇拜の傾向を歡迎するは此の故也

且つ近時崇拜さるゝ英雄は、唯だ鐵木眞、豐太閤、ナポレオンの如きものに非ずして、其の人格の殊に傑出したるもの也、試みに現時崇拜熱の焦點に立つ東鄉乃木の兩大將を觀よ、其の智謀勇略よりいはゞ、兩大將に優さるもの素より多し、少くも之と比肩し得べき海陸軍將校二三に止まらず、然るも其の名聲此の兩大將に及ばず、一世の崇仰を享くるも遠く此の兩大將に如かざるは何ぞや

此の兩大將に通有する人格は、第一君國に忠誠の至情篤きことなり、乃木大將の如きは其兩令息を南山と二百三高地との難戰に殉ぜしめ、家嗣全く絕えたるも以て武人當然の職として惜むの色なし、幾んど一門の肝腦を王事に盡したる楠氏に類す、第二險素自から奉

ずるヿ也、東郷大將は平生僅かに大尉若くは少佐に相當する矮屋に住ひ、乃木大將は陣中士卒と其の食を同じくしたり、第三謙抑恬淡にして其の功に誇らざるヿ也、第四權貴に阿らず貧賤に驕らざるヿ也、第五厚き同情を有するヿ也。東郷大將は凱旋後先づ陣沒者の靈を祀りて懇切を極め、乃木大將は旅順の攻擊に多く部下を殞せるを慙ぢて歡迎を辭し、其の凱旋の途次、一老嫗出征の愛兒を喪へりと聽き、尙ほ一子を存するを知るに及んて始めて心を安んじたるが如き、同情極めて厚くして人を感奮せしむるヿ甚だ多し、第六職務に忠實なるヿ也、鬚髮半ば雪となれるも、曾て軍裝を解けるヿ少く、幾んど晏居の遑あらず、第七堅忍不拔の意志極めて盛なるヿ也、旅順口の封鎖攻擊兩つながら之を證して餘りあり、凡そ此の忠誠、險素、謙遜、公平、同情、忠實、堅忍の諸德は、兩大將通有の美德にして、他の諸將其の二三を有するも之を兼有するは稀れ也、兩大將の人格の殊に傑出して、一代に景仰せらるる乃ち此の故のみ

吾人は茲に於て多くの感慨なき能はず、世の曾て英雄と稱せるもの大抵征服者なりき、亞歷山大王を擧げ、該撒を擧げ、漢武鐵木眞を擧げ、豐太閤拿破崙を擧ぐる、英雄の大小は總て征服地域の大小を標準として、其の人格の良否高下の如き幾んど問ふ所にあらざりき、然るに近時英雄の標準を多く人格に置き彼の偉大なる征服者よりも、釋迦。孔子。基督。華盛頓を貴び、今や乃ち東郷乃木の兩大將を崇拜す、是れ思想界の著るしき進歩にして、吾人の深く悅ぶ所のもの也

世界はまた米國大統領ルーズヴェルト氏を稱して嘖々たり、彼れが万事明白を貴び、眞摯に是を是とし非を非とするを男らしと做して然る也、斯の如きはまた英雄の一資格として數へざる可らず、而して共に好資格也

男女學生交際論

寺田勇吉

男女學生の交際に對する吾輩の意見は一言にして盡く。即ち我國現下の狀態に於ては、丁年以上の男女學生の交際は利益よりも寧ろ弊害を伴ふこと多く、從てかゝることは成るべく奬勵せざるを可なりと信ずるなり。若し將來男女の教育にして進步し、男子が今日の如く女子を輕蔑せず、女子も亦男子の輕蔑を今日の如く甘んぜざるに至りたらば格別なれど、今日に於ては斷然男女學生の交際をやめたる方宜しからんと思ふ。

吾輩が貴問に應ふる所已に右に盡きたりと雖も、今之に密接の關係ある男女學生同學論を述べて御參考に供せんと欲す。若し貴問の範圍外なりとの御叱責あらば、斷然之を抹殺せらるゝも吾輩に於て些か異存なし。

扨男女を一つ校舍に入れ、一つ教室に於て授業するとの得失については歐洲に於ても隨分長き間の問題にして、彼の教育を以て世界の覇たる獨逸國の如きも今日に至るまで未だ可否を決定せざるなり。即ち教育者間に於ても定說なく所謂世界に於ける教育上の未決問題なりというて可なり。吾輩の如きも長き間教育に從事したるも男と女とを區別して教育すること果して一般の利益なるや否や未だ決定すること能はず、いはゞ五里霧中に彷徨しつゝあるものなり。佛國の如きは男女其學校を異にするを利益多しとなし、人口五百以上の町村にては小學校すら男と女と各々別の學校を設けざるべからずといふ嚴重なる制度を實行す。獨逸の如きは小學校に於ては男女を同一の學校若くは學級に收容して教育する所少からざるも、高等の學校に於ては多くは男女を區別したりしに拘らず、最近の獨乙教育新聞の報ずる所によれば、近頃伯林に於ける學校教員會の決議は gymnasium（高等學校）は今日まで男と女とを別置したるが今後男女を同一のギムナジユームに於て在學せしめ、教育せしむる方宜しといふにあるが如し、其意蓋し、男子と女子とを別々にする方針をとりて稀に之を接近せしめたればこそ却て男女間に種々

の弊害をも生じたれ、寧ろ小學校を始め、ギムナジユームに於て常に男女を接近せしむれば、互に珍らしからざるが故に弊害は少かるべし、物は稀に見れば珍らしく、従て接近し得なば如何に面白からんなどいふ好奇心より種々の誤りも起るなり、故に男女のギムナジユームを同一にする方遙かに利益多かるべしといふにあるが如し。然れどもギムナジユームの學科目は甚だ多く、且つ授業時間も長きを以て若し男女の學生を同一學級に置きて教育することゝなれば是非共授業時間と學科目とを減ぜざるべからずといふことも亦決議中の一なりきと傳ふ。(然らば男女共學の理想的ならざるを曝露したるに非るか。)北米合衆國の如きは男女共學のなか／＼盛んなることは今吾輩の説明を待たずして世人の知らるゝ所なり。現に北米合衆國に於て大學を參觀するに男女とも同一の教場に於て而かも同一の腰掛に列して講義を聽き居ると雖も、從來毫も品行上に於て不都合なることを聞かず、即ち所謂醜聞を世に流したることなし、同國に於ては歐洲より主として男子が移住したる結果として今日にても青年の女子は之を男子に比して至て少し、即ち結婚年齢に於ける男子の數が女子よりも餘程多し、故に需要供給の結果女子の勢力非常に強く、従て萬一にも大學等に於て男の學生が女學生に對して不都合なる行爲をなし、若くは手紙にてもやるといふことあらんか、其翌日之を受けたる女學生は直ちに何某は斯くの如き不都合なることをしたりといふことを學校の黒板に書きて一般に示すことになり居るを以て、かゝることをなしたる男學生は翌日より學校に出ること能はず。夫れ故に男學生にして女學生に不都合なることをなすもの甚だ稀なるなり。然れども同一學校に於て同一の教育をうけ、同一の講義を聞くとしても大體よりいへば男子の成績が女子に優れることは明かなる事實なり。而して亞米利加の如きは實に女子の權力が天然以外に優れるものにして、從て巨大の財産等を有する亞米利加婦人中には又不品行なるもの少からず、例へば桑港などにありては所謂男妾を有する女子澤山あり。甚だ恥かしき話なれ

ども我同胞の人にして往々亞米利加婦人の男妾となつて女子の玩弄物となり居るもの少からずと聞く。

翻て又歐洲を見るに女子は結婚すること近頃益々困難にして、金なきときは如何に容貌美なるも結婚すること出來なくなれり。獨乙の如きは軍人に嫁する婦人は皆多くの資産を有して結婚し、軍人は多く其俸給を以て衣食せずして細君のお蔭を以て美衣を着、美食を食ふ。獨乙の軍人の強きことゝ、軍人となることを好む男子多しといふ一大原因は、金のある婦人に愛せらるゝを望むにあるべしと信ず。

斯くの如く澤山の財産を持して來る婦人なれば從て日本の風習とは別段なる制度を有するも怪むに足らず。即ち夫の財産と妻の財産とは全く區別して裁判所に登記せらる。故に萬一不幸にして夫に死別るゝか、若くは離婚せらるゝといふ場合には妻は自己の財産を以て他人と結婚するを得といふ風なり。夫れ故に歐洲に於ては女の未だ娘なる間は卆て品行正しきものなるが、之は一度不品行なることをする時は（勿論中以上の人にて）一生到底結婚すること難きを以てなり。尤も下等社會の下女等に於ては往々不品行をするものあるも、先づ中以上の娘に至てはかゝることはあらざるなり。之に反して一度人の妻君となれば往々不品行の事を働くものあり、是れは我日本とは正反對なりと思はる。而して何故に細君に却て不都合の行爲をするもの多きかといふに、先づ第一に室の構造日本と異り、戸さへ閉づれば他の室には內部の事が洩れざること、第二、歐洲の習慣として妻君に來客あれば夫は其席を避くるといふ風習あること、第三、女子は前述の如く不幸にして夫と別るゝことあるも自己の財産を特に有するを以て再び他と結婚するといふことも法律の範圍內に於ては敢て難からざること等の原因を以て娘よりも却て細君に不品行者が多きにあらずやと思ふ。現に我輩は日本に於ても又獨乙に於ても斯くの如き實例を確かに見たり。日本にては今日までの所、家の財産は總て夫の財産なり、即ち夫が一家の經濟を引け請け、女子は只夫に從て夫のお蔭にて生活するといふ有樣なれ

ば、從て男子の勢力も强く、女子は男子の命令に從はざるべからざることは今日の狀態として實に止むを得ざることなり。故に若し亞米利加の如く男女を共學せしむるといふことゝならば、女子は男子に壓せられて終に不都合を生ずるに至るやも計られず、現に男女學生の間には同學せざるも毎日學校に行く通路にて接近するといふことよりして互に知り合ひて終に醜聞を流すといふやうなることは吾輩の住宅なる目白臺に於ても屢々見聞する所なり。吾輩は今模範的なる小學校を作り、自ら校長となつて敎育の責に任じつゝあるが、女子と男子とは尋常小學の中は別として、夫れ以上に至れば、男子と女子とは精神上及び體格上の發育大に異り、從て倫理等の問題についても、同一に之を敎育することと宜しかるまじと思ふ。尤もこれは今經驗中のことにして果して右に述べたるが如くなるや否やは明言し難きも、今日迄吾輩の研究したる所によれば高等の學校に於ては男女の學校を別にする方利益多しと考ふ。故に男女學生交際の問題に就ても今日の場合我輩は尚之を非なりとする論者なることを斷言す。（[illegible]）

右は寺田氏の談話を筆記せるもの文責は記者に在り。

男女學生交際論

青柳有美

最近四五年を以て、之を十數年前の昔に比すれば、東京男學生の娼樓に登りて女郎を買ふ者の、著く減少せるは、明かなる事實なり。是れ蓋し女義太夫の勃興と共に、男學生のドウスル連に入るもの、頗る多きを致すに至りたればなり。學生の娼樓に登るは、結局女子の肉體に接して快樂を得るに終るに相違なきも、その目的の大部分たるや、たゞ女子に親く接する快樂を味はんとするにあり。是に於てか、多額の費用を支拂はずして、女子に接し其容姿を見其の聲音を耳にする機會を得ば、男學生たるもの、素より其方法を採るべし。寄席の木戸錢と布團代と火鉢代とは、女郎屋の遊興費より安直なるなり。加ふるに、市中を去ること遠

さ吉原洲崎千住品川新宿等に、態々足を運び車を驅る面倒もなく、頗る輕便なるものあり。東京留學の男生が、女郎屋を離れて女義太夫の寄席に雲集するに至れる、まことに理ありといふべし。その女太夫が聽衆一同の共有にして、女郎に接する如く獨占して近かく接する能はざるものたるが如き、木戸錢の安さに免して忍ばれ得るに非ずや。

然るに、今や又ドウスル連の勢大に衰ひ、女義太夫の流行漸く其度を減ぜんとするものあり。是れ蓋し男女學生の交際稍々盛んなるに至れる爲めなり。男學生の女學生に交際して得らるゝ快樂は、女郎に接して得る快樂に毫も讓らざるのみならず、或は之に勝るものあり、而も登樓の如き多額の費用を要せず。是に於てか男學生の滔々として女學生交際に熱中し、或は登樓し或は女義太夫の尻を追ひ廻すものなきに至れる、誠に所因なしとせず。

されば、今の男女學生交際は、男學生の女郎買が、變じてドウスル熱となり、更に又一變せるものにして、之により、男學生の女子に接する形式は、進化の佳良なる位置に達せしといふを得べし。女郎は、元來賣春の爲にあるものなり。故に、之を買ふものは、素より多くの金錢を拂はざるべからざると共に、又何んとなく人品を野卑下劣にし、感情の作用をして頗る俗惡のものたらしむるに至る恐れあり。又、女義太夫の尻を追ひ廻すは、之を女郎買に比すれば、甚だ高尚にして、感情を文雅ならしむる等の功ありと雖ども、女子を獨占して之と親く接する能はざるが故に、到底、女郎買によりて得る如き男女交際の快味を得る能はざるなり。然るに、男學生と女學生との交際は、互に親く相接するを得るのみならず、別に差したる失費を醸すが如きことなく、又人品を墮落せしむる恐れもなく、初めより交際を標榜し交際を目的とするものなるが故に、感情の之によりて下劣となるが如きこと無きなり。而も、男學生のみならず、女學生も又その快樂を享くるを得るといふに至りては、豈に是れ一擧兩得に非ずや。

男子は、その始めて生れ落ちし日より死に至るまで到底女子の手より離るゝ能はざるものなり。先づ、幼にして母或は保姆に育せられ、成長しては妻に助けらる。女子も又此くの如く、一生男子の手より離るゝ能はざるものなり。幼にしては父に敎へられ、成長しては夫に賴らざるべからず。然るに、學生時代たるや、之れ男子は母を離れんとして未だ妻を得る能はず、女子は父を離れんとして未だ夫に依賴する能はざる時期なり。而して、男女は互に須臾も獨あるを得べからざるものなりとせば、玆に男女學生の、同氣相求めて互に相交際し相親まんとするものある、誠に自然ならずや、此くして、男學生が女子に接する最高の形式は、男女學生交際にあり、而も、男學生は女子に接することなくして、遂に止む能はざるものとせば、男女學生の交際は、是れ當に大に奬勵すべきものに非ずや。況んや、女子は女子として世界に存在する價値なきものにして、全然男子の爲にあるものなれば、その學生時代より、男子に對する手心を研究し置く必要あるに於てをや。

かのポーツマス談判に、日本使臣が外交の手腕に頗る拙なるものあるを傳へらるゝや、友人伊藤新四郞曰く、日本人の外交に拙なるは、男女交際の行れざる爲めにして、歐米の男子は、婦人との交際により幼にして先づ外交の術を案ずるべく餘儀なくせられ、外交家は積年この間に得たる消息を、國際問題に應用するが故に、華々しき功果を擧ぐるを得るなりと。然り、幼少時代に於ける男女交際は、互に異性の歡心を買ひ又競爭者を壓倒するために、種々の外交策を弄するに至らしむるものなり。その之に練熟するに從て男女共に外交の手腕に富むものあるに至るや、必せり。故に、學生の男女交際は、人の智能を啓發し、社會生活に慣れ、人をして生存競爭に處するの道を立つるに便ならしむる利あり。男女學生交際の功德も又大ならずや。

此くして、男女學生の交際は、大に奬勵すべきものなりとするも、世人の憂ふるところは、その結果、私通及私生兒の多きを致すなきやといふにあり。男女學

生交際は、たゞ交際するのみを目的とするものなるを以て、別に此る結果を生ずべからざる筈なれども、男女は素と生殖の爲めの區別にして、異性相接するの快樂は、その源を生殖慾に發して、更に進化せるものに過ぎざるを以て、時に男女學生交際により、私通及私生兒を出すは、理の當然なり。されど、私通及私生兒の、果して絶對に擯斥すべきものたるや否やは、暫く措て問はずとするも、その今日の社會に悦ばれざるものたるは、事實なるを以て、兎に角、男女學生交際より、此る現象の生ぜざらんことを力めざるべからず。その法たるや他なし。更に今日よりも男女學生交際を盛にするにあり。詳く言へば、今日の男女學生交際の如く、一人の男生と一人の女生とのみ交際せずして、一人の男生にして十數人の女生に交際し、一人の女生にして又同く十數人の男生に交際するに至らんことなり。

今日の男女學生交際の結果、若し私通あり私生兒ありとせば、是れ一人の男生一人の女生と交際し、その心力を悉く之に傾注し、互に滿腔の愛着心を一人者に集中せるが爲めなり。夫れ心力は量（クオンチテー）なり。故に、若し假りに一人の男生にして、十數人の女生と交際せりとせば、唯僅に一人の女生のみと交際する時の如く、全心を一人者に注ぐ能はず、心力を少しづゝ平等に、多數者の間に分配せざるべからざるを以て、到底、私通或は私生兒までの高度に達する能はずして終るべし。又、男女を問はず、多數の異性と交際する時は、たゞ僅に一人の異性と交際せる時と異り、異性に對する鑑識眼發達し、且つ種々批評を加へ得る餘猶を生ずるに至るを以て、輕卒に異性の肉體に接するが如きことを爲さず、隨て私通を見るが如きこと稀なるに至るべし。知らずや、普通處男處女の私通は、男子がその女子を妻にせんと思ひ、女子が其男子を夫にせんと念ぜる機會に於て、構成せらるゝものたるを。若し、男女學生共に其交際範圍廣大にして、多々益々辨ずるを得ば、如何ぞ此くの如き夫婦關係を容易に生ぜんや。又かく交際範圍廣くして、假令へば、一人の女學生に十數人

の男學生交際せば、玆にその男學生十數人の間に、一種のヤキモチ根性より競爭を生じ、互に他を警戒するを以て、その男學生中の或る一人が、その女學生と相共に隱れて私通し得るが如き機會を得ること頗る困難にして、絶えず角袖巡査に尾行せられつゝあるにも等し。殊に況んや、今日の當世教育を受けたる女子の本性は、成るべく多數の男子に悦ばれんことを欲するにあるを以て、決して或る一人者にのみ特別の恩典を與ふることなく、萬遍なく其十數人の男子に愛嬌を振りまくべきに於てをや。されぱとて、多數の男子に私通する如きは、淫婦に非ずんば、能はざるところなり。

之によりて之を觀れば、男女學生の交際は、決して阻遏すべきものに非ず、又尙早しとなすべきものにも非ずして、大に奬勵し大にその範圍を擴張すべきものなり。(禁轉載)

男女學生交際論は現下教育界の一大問題也本誌は每號大方諸大家の高論を紹介し、教育家及學生諸君の參考に資す。

▲二十年第九號(九月發行)……竹越與三郎氏
▲二十年第十號(十月發行)……三宅雄次郎氏
▲二十年第十一號(十一月發行二百號)……安部磯雄氏
▲二十年第十二號(十二月發行)……村上專精氏
▲第二十一年第一號(一月發行)……下田歌子女史
▲仝上……海老名彈正氏
▲第二十一年第二號(二月發行)……登張竹風氏

右は既に掲載せり、本號の寺田勇吉氏、青柳有美氏が所論と併せ讀まば更に得る處多かるべしと信ず。

眞理と人格の趣味

綱島梁川

眞理の人に及ぼす感化勢力は、眞理そのものよりも、寧ろ眞理詮表の形式、姿態に存すること多し。眞理若し礫の石塊の如く、赤裸々にして人生に散在するものならば、その人生と交涉する所、いと〳〵尠なかるべき也。それたゞ人の、是くの如き赤裸々の眞理を拾ひ來たりて、これに自家特殊の姿態ある表現を與ふるあり、是に於いてか眞理は一種の潤澤を帶び、光彩を著けて、强く深く人生と觸著す。眞理そのものは多くの

場合に於いて殆んど死物也、これをして血あり生命(いのち)あり言葉あらしむるものは人也。眞理は人に有せられて始めて力あり。人を動かす眞理の底には常に人あり。

福徳一致の眞理は、古希臘人の常識の概ね通有せる所、しかもそが長く人類思想史上の一光彩となれるは、畢竟ソークラテースが自家人格の實證に基づきたる特殊の詮表を之れに與へたるが故にあらずや。或は知徳一致といひ、知行合一といふ、此等はた未だ必ずしも珍らしき眞理なりとは見るべからず、唯だソークラテース又は王陽明などいふ偉人の出でて、之れに特殊の詮表形式を與ふるあるに及びて、そは則ち千載の確論たり。眞理は重んずべし、されど眞理が如何なる形、如何なる姿態に言ひ表はされたるかを見るは、更に一段の關心事なりといふべし。人を動かすの力は、眞理そのものよりも眞理詮表の形式如何に係ると、いと〳〵多ければ也。

何を斥(さ)してか眞理詮表の姿態といひ、形式とはいふ。曰はく、人格の趣味、是れのみ。譬へば眞理は果實の核の如く、之れが詮表形式たる人格の趣味は、核を包被してこれに甘き生命(いのち)の潤ひあらしむる肉皮の如き乎。されば眞理詮表の形式とはいふものから、そはやがて眞理に活力あらしめ生命あらしむる內容そのものに外ならざるなり。眞理てふ抽象普遍の內容を包むに、人格の趣味てふ具象特殊の詮表形式を以てして、其は始めて力あり、光輝ある全備の眞理たるなり。彼れも此れも同じ眞理を詮表せるものにてありながら、尙ほ其の人を動かすに、一家大なるあり、一國大なるあり、全世界大なるあり、或は又泯然無聞に歸するもありて、其の品第の萬殊相同じからざる所以は、主として其の眞理詮表の形式たる人格の趣味の、人さま〴〵なる差別に歸著すべし。

「己れの欲せざる所之れを人に施す勿れ」といひ、若しくは「己れ人に爲(せ)られんと欲ふとは、人にもその如くせよ」といふ如き所謂忠恕の眞理は、必ずしも孔子及び基督の二聖の創唱とのみ見るべからず、これと同樣の眞理を言ひ表はしたる一種の格言は、希臘、希伯

來の古文書にも之れ有、基督と殆んど並世にして出でたる猶太の賢者ヒルレルは「爾の惡む所は之れを人に施すこと勿れ」といふ　めは法律の總和なりと道破せりと傳へられ『トビアス書』には「爾みづからの不快とする所は之れを他人に施すこと勿れ」とあり、（ハルナックに據る）又『無字法門經』には「己れの欲せざる所を他に勸めざれ」との一戒律を以て菩薩の恪守すべきものと明言せるにあらずや。此等皆ひとしく同一眞理を略々同じ形に詮表せるものにてありながら、而かも尚ほ孔子が一代の心法たる忠恕の道と、基督が相愛の大義を詮表せる金則とのみ、惟り偉大なる感化勢力を世界の人類に及ぼして無窮に奕々たるは何が故ぞ。天地を父母とし、人類を同胞とするの思想、及び之れに近き思想は、『墨子』の一書にも見るべく、張子の『西銘』にも見るべく、『法華經』其の他の佛典の中にも見るべく、將た又我が德川時代の一派の儒者の思想にも見るべし。而かも竟に惟り耶蘇基督をして殆んどこの思想の專有者たるの觀あらしむるは何が故ぞ。啻だに宗教上、道德上の眞理のみにあらず、自然科學上の眞理といふとも、亦復た人格の趣味と相結びて詮表せらるるに及びて、そは始めて特殊の光彩を發するを見るなり。重力の眞理は、それみづからにて偉大なる科學上の眞理なれど、若し之れを、其の提唱者たるニュートンの敬虔にして謹嚴なる人格、及び其の詩的直觀とも謂ひつべき一種特殊の逸事等より全く抽離し去らば、其はおのづから幾分の光彩を薄うするの感あるべし。されば一切の人生的眞理は、吾人が撫摩、體察、沈浸、游泳の餘り、之れを一種の趣味として詮表するに及びて倍々大いなる活力を有し來たるものといふべし。是くの如き眞理にして、始めて能く自ら燭らすと共に、又能く他を燭らすべし。畢竟、是くの如き眞理は、人格の趣味てふ一種の圓光もて輝ける眞理なり、其が人を引著する一種不可言の秘力の源は、こゝに見るべきなり。されば吾人が是くの如き眞理に動かさるゝは、詰まるところ、主として人格の趣味其のもの（委しくは人格の趣味としての詮表其のもの）に動かさるゝなり。

人格の趣味たらざる、人格の趣味として詮表せられざる眞理は、力なき眞理也、空名の眞理也。

予輩が『福翁百話』に心折措かざる點ありとせば、そは其の包含せる眞理そのものゝ上にあるよりも、寧ろ其の眞理詮表の姿態（おもむき）が、福翁てふ特殊なる偉人格の趣味と相渾融して、『福翁百話』是れ福翁なる乎、福翁是れ『福翁百話』なる乎の概ある所にあり。福翁その人を離れて『福翁百話』はあらず。『福翁百話』の眞理は、毫も外より貼付せられ糊塗せられたる痕を著けず、直ちに福翁の人格そのものより生ひ出て茂り榮えたるの觀あるなり。福翁一代の心の味ひを言ひあらはしたるもの、やがて『福翁百話』の眞理也。こゝには、人と眞理と合して一たり。さればこの書の一句一節を斷ち離して見るも、尚ほ福翁の意氣聲容、颯として人に迫り來たるものあるにあらずや。直截にいへば、『福翁百話』の眞理は餘りに常識的なり、平凡なり、俗智的なり、而かも尚ほそが煙波限りなきの趣きを具へて人を引着する力あるは、畢竟其が福翁てふ特殊の人格を通して特殊の詮表を得たるが故にあらずや。そこには游泳あり、體達あり、自得あり、支配あり。『福翁百話』一篇、要するに是れ福翁人格の趣味の詮表にあらずや、結晶にあらずや。是くの如くにして平凡なる眞理も光彩を着け、舊き眞理も新らしき力を贏得す。文章運用の能事こゝに見るべく、眞理詮表の要訣畢竟亦ここにある乎。（舊稿）

學者の活動に就いて

文學博士　桑木嚴翼

左しも喧囂を極めたる大學問題も、表面上の結果によりて推察すれば、全然大學側の要求貫徹し、即ち大學派の勝利となりて落着せし如し。是れ啻に我帝國大學の爲に賀すべきことなるのみならず、又實に日本の學術界の爲にも大に祝すべき結果なりと言はざるべからず。左れど此問題の一部分は之にて落着し居るも、

所謂學問の獨立なるものが、果して之のみにて解決し得らるゝが否かは問題なるべしと思はる。而して此問題は實は大問題なるのみならず、或は今日の多くの學者によりて、終局まで解決せらるゝか否かは頗る疑はしきものあり、若し假りに偏狹なる國家萬能主義を信奉する者あらんか、所謂學問の獨立が說かるとするも、其獨立の範圍の頗る狹隘なるべきことは、優に想像し得らるゝところ、予は今敢て此問題を此處にて解決せんといふにあらざれば、唯所謂學問の獨立なる語の意義が、頗る研究の餘地あるものなるを暗示するに止めて、此事件に就きて感じたる他の事柄に就きて、少しく所見を陳ぶる所あらんと欲す。斯く言ふは他に非ず、即ち學者の活動なるものは、果して此大學問題の原因となりし如き運動、即ち當時の政府の政策に對する運動といふ如きことにのみ存するものなるか、特に政治に關係ある學者はいさ知らず、それ以外の學者の眞に活動すべき方面は何處に存するかに就きて一考せんと欲す。

元來專門學者の本分は、其專門學の薀奧を研究して、前人未發の眞理を發見するといふに存するならん、現に大學内の種々の專門敎授は、それ〲其專攻の科目に就いては、孜々汲々として眞理の探究に從事せられ、其結果は或は大學紀要となり、或は其他の著書等となりて、獨り日本の社會のみならず、歐米の學術界に對して、多少の貢獻を爲しつゝあるなり、假令、其の如き研究の結果の發表せられざる場合にても、吾人は決して其研究の盛に行はれつゝあるを疑はざるが、さはれ大學敎授に限らず、凡て專門學者は、單に研究のみによりて自己の生涯を終る必要もなく、又實際唯それのみにて滿足し得ざる場合あるべしと思ふ、即ち一面には自己の研究を發表して、其同輩と共に討論辯難すると共に、一面には自己以下の人々に對して、自己の研究の結果を說明すといふ如き役前を有し居るものなり。必しも研究家が其研究以外の役前を盡さざるべからずといふことはなきが、左れど研究の餘暇、所謂骨休めの爲にも、多少其如き事業に從事すること愉快な

るべく、又往々にして其義務を負ひ居るものならんと思はる。故に例へば、大學其他の學校にて學生に教授するは、即ち其研究以外の應用的方面にして、學者の恥とすべきことにあらざるのみならず、又熱心に從事すべき性質のものなり。左れど余はそれのみを以て學者の活動が盡きしものと信ずるを得ず、學者は往々にして少數の學生を薫陶する外に、廣く社會に對して活動せんといふ要求慾望を有することあり、特に官立の學校の如き、學生の範圍非常に制限せられ居る故、それ等の人々に對する講義の他に、餘力を以て社會的事業に從事し得る場合多かるべしと信ず。吾人が學者の活と稱するは、即ち此方面のことにして、研究、教育以外の餘力を以て社會的動をなすをいふなり。さて此活動の一種として、何人も直に心付くところは、政治上の活動其他、社會の各種の事業に關する活動之なり、或は時の政府の外交問題を批評するのみならず、當局者に勸告するとか、或は學制の改革等に關して意見を發表するとか、獨り意見を發表するに止らず、同志を糾合して一種の運動を試むるといふ如きものが、普通所謂活動と見なされをる事柄なり。世人も此の如き學者を見れば、元氣あり活動し居ると稱す。即ち其種の活動を概括していへば、要するに事業に關する活動といふものにて、一部分の學者若くは世間の多數は、此方面に向はざる學者は活動し居らず、即ち所謂生字引となりたるものなりと見做し居るが如し。勿論此方面の活動が全然學者に不似合といふの理にあらず、特に自己の專攻の學科を應用すれば、斯ゝる方面の活動となる場合にては益然るが、左れど其以外に活動の餘地全然無きが如く考ふるは、稍偏見といはざるべからず、特に自己の專攻の學科に密接の關係ある他の方面の活動ありとせば、學者は須く其方面に向はざるべからざるに非ずや。

然らば其所謂活動の方面とは何か、吾人は之を前の事業的活動に對して思想的活動といはんと欲す。人間社會の事件の中にて尤も注意すべき事柄は、無論其實際の効果を呈し居る方面なるが、左れど實際の効果が

表面に現れざる他の力によりて支配せられをるを、吾人は決して看過すべからざるなり。社會に種々の新思想が勃興せし場合に、其思想は表面上、當時の社會に影響を與へざるが如く見ゆとも、實は暗々裡に其社會を動かしつゝあることは、少しく深刻に歷史を研究するもの丶容易に認め得るところなり。勿論非常なる專門的の、微細なる科學的學說等が、一々人間社會上關係ありとは思はれざるも、左りとて之とても永遠の間には、人々の世界觀、人生觀に何等かの影響を及ぼして、終に事業に現るゝことなしと言ふ能はず。カントの哲學說等は、如何にも理義幽邃にて實際世間と何等の接觸するところなきが如く思ふものあらんも、其思想界に及ぼしたる大變動は、一切の諸學術を根底より革新し行きしのみならず、其倫理說の如きは大に人心を感動せしめたるが如し。コペルニクスの天動說、ダーウキンの進化說等が、獨り科學上の學說として認めらるべきものなるのみならず、人類社會に關する思想を一變し、併せて實際の事業等に大變動を與へしことは言ふまでもなし。其他科學上の微細なる發見あれば之により益宇宙の機械的說明完備し來るものにして、其發見のありし丈け從來の說明が破壞せられて、科學的世界觀が勝利を得るに至れるなり。而して此事は決して精神上に影響を及ぼさゞることなし。此等科學上の意見すら已に然りとせば、精神界に關する思想意見が大變動の原動力となることは敢て多言を要せずと信ず。而して此思想界の源頭に立ち居るものは、即ち學者なりとせば、學者の活動すべき領分は、自己の研究の結果を當時の思想界の問題に聯結して、或は自己研究の立脚地より、當時の思想問題の解決に多少貢獻をなし、或は思想界の木鐸となりて一世を風靡し、或は思想界の一批評家となりて一方の鎮となることは、是れ最も學者に似合しき活動の方法にはあるまじきか。若し眞に研究にのみ從事して、其他を顧るに遑あらずといふ學者ならば、それは何も社會の爲に盡さゞるべからざる義務なしと思へど、苟も活動すといふときには、其活動の方面を世の政治家等と類似のところにのみ求

めて、更に他の重要なるものあるを忘るゝは、吾人の頗る首肯し難きところなり。左れど斯ゝる風の行はるゝは、實は其源泉あることにて、即ち東洋古來の言論を輕視するの弊風に本くものといはざるべからず、東洋流、即ち殊に支那流にては、君子位に在りて事を行ふを理想としたるものなるが故に、やゝもすれば政治上の權力者となりて、その權力を利用し、自己の理想を成就せんといふことにのみ重きを置きて、其權力者として自己の理想を成就する場合に、是非顧慮せざるべからざる民心、即ち時代精神といふものゝ主動者となるものあるを忘るゝ傾あり。所謂言論なるものは時代精神の主動者となるものにて、事業の方面には關係しをらざるものなるが、さはれ如何なる政治家にても、此時代精神に背きて其目的に達し得たる例なきによう、言論の價値たるや決して輕視すべきものにあらず。此の如きは今日故らに喋々すべき必要なきが如くなれど、さりとて多數の人々は依然として表面上の事實にのみ重きを置き、新思想などが隱々裡に勢力を得つゝあるを蔑視する傾ある故、無用の答辯を試みざるべからざるが如きに至れるなり。彼等は新思想などを、高が雜誌の意見なり、賣文者の論議なりと稱して一口に罵倒し去るが、文を賣ること賤くば、講義を賣るも亦賤しかるべきなり、而して其所謂賣文者の論議が、文字ある人々、即ち一切事業の眞の原動力となる人々の多數を常に動かしつゝあるにより、其勢力を輕視するは、頗る皮相の見解なりといはざるべからず。かく種々の思想意見が此の如く社會の勢力となりつゝある時に、學者が其點に關する批評考察を怠りて、而して徒に今日の問題にのみ汲々しをるは、頗る學者の活動すべき範圍を忘れしものといはざるべからずと信ず。

其思想界の木鐸となるといふの他に、今一つの學者活動の範圍は、其專攻學科を通俗化して一般社會に告ぐるにあり。學術研究家が、一面教師となりて其道を傳ふることは一の通俗化なるが、其以外に餘力ある時に、一般社會をして其學問の大體を知らしむる如くにすることは、決して學者の恥づべきことに非るのみな

らず、寧ろ其學問に對する義務として、前の活動よりは更に勉めざるべからざることとならんと信ず。勿論學問は研究するに從て益疑問生じ來ると共に、其研究の範圍次第に狹小となり來るものなるを以て、學問全體に關する眞の良好なる通俗書は。容易に著述するを得ざるべきものならんも、左れど自己の研究に進むに當りて、大體自己の頭に畫き居れる學問全體の結構は、何人も有し居るべき筈なるにより、其詳細の事柄は未決の問題多きを許して、大體の說明を試むるは必しも困難に非るべしと思はる。是れ實に學者が必ず勉めざるべからざる活動の方面にはあらざるなきか。

終りに學者が自國以外に對する活動を爲す場合を述べて此文を結ばんと欲す。盖し戰後の日本は從來よりは著しく歐米各國の注意を惹くに至りしと共に、學術上の點よりも、歐米に紹介せらるるとは頗る急務なるべしと信ず。此方面に對する學者の活動は、從來とても一部分には存在し居りしが、今後益諸方面に於て行はれざるべからざること言を俟たず。但し此紹介する場合に、人々往々日本古代の學問文明を外國に吹聽して、日本の歴史的發達を明にせんとすることのみを唯一の事業の如くに考ひ居るものもあり。吾人は言ふまでもなく。其事業を必要と認め居る者なるも、左れど之と共に、現時の日本の社會、現今の日本の思想界の狀態を紹介することを怠るべからずと思惟す。換言すれば、今日の學者は獨り古代の歴史を嘆美するを以て甘んぜず、凡ての方面に於て、自己の研究を以て歐米の學術界に馳驅することを心掛くべきものならんと信ず。要するに予が學者の活動に就きて有し居る考は、以上述べしごときものにて學者必ず活動せざるべからずといふ理由もなきが、已に活動する以上は、獨り俗世間の考ひ居る如き事業の方面のみならず、思想界の方面にも向はざるべからざるものと信じ居るものなり。（文責在記者）

移民論

松井柏軒

（一）

ホーム（家庭）は英國人の誇とするもの也。然れども到る處の青山是れ我が家なりとして、海外移住を好むもの亦英國人に越ゆるはあらず、英國が北海の眇たる一國を以てして東西兩球に多くの領土を有し、雄を世界に稱する、實に其の國人海外移住を好むの結果に外ならず

現に英國政府には殖民大臣ありて有力なる政事家を之に任じ（前内閣にはチエムバーレン氏之に當りき）凡そ海外の移住に適する土地を精査し、其の氣候風土より生活の難易、渡航の手續等を明記して之を發表し、以て國民移住の案内に供し、而して各教會また寄附金を醵集し、資を給して婦女子の海外渡航を獎勵す、蓋し婦人の在る所にあらざれば移民あらず、假令移民あるも、婦人なければ良風美俗を保有し難しと做すが故也

即ち英國に於ける移民事業は、官民の全力を盡す所にして、加奈陀、濠洲、喜望峯等の浩大なる殖民地も之に由て作られたる也

獨逸も亦ビスマルク以來移民事業を傳統の政策とし、殊に今帝ウヰルヘルム最も之に鋭意す

露西亞伊太利また多くの移住民を出し、現に北米合衆國の如き夥しき兩國の勞働者を有し、今や其の多きに苦みて之を制限せんと欲するに至る

獨伊の兩國民は、主として人口の過剩なるがため海外に移住する也、就中獨逸の移民は一定の方針の下に膨脹しつゝあり、近時盛んに利權を東洋（海峽地方及び清國等）に樹つる其の證也、露人は本國の虐政と生活難に苦むがため、自由の天地を求めて外に出づるものを多しとす、必らずしも政府殖民策を執るがために非ず、又人口過剩の故にも非ず

（二）

移民の利益は、第一移民自身に於て、多くの賃銀を

得るヿ也、第二其の結果として豊かなる生活を爲し得るヿ也、而して其の本國の利益とする所は、第一人口過剰の弊害を避け得るヿ也、第二移民が其の貯蓄金を送り來りて資本の積聚を助くるヿ也、第三其の結果として移民を出したる郷土の狀態の著るしく改良せらるゝヿ也、第四移民が多く本國品を需要するため輸出貿易を盛ならしむるヿ也

移民が多くの賃金を得るヿ、到底本國に在るが如き比に非ざるは何人も知る所なるべし、北米地方に於て鐵道工事に從ふものは、一日米貨一弗廿五仙（我が二圓五十錢）以上を得、布哇にて勞働するもの亦一日の所得一弗（我が二圓）を下るヿなし

加奈陀に於て鮭の漁獵に從事するもの、及び布哇の耕作に從事するものの一少部分は、幾んど見るに忍びざる生活（但し日本の漁夫農民と比すれば寧ろ通例のみ）を爲すも、カリフォルニア州に於て耕作に從事し、殊に土地を借受け又は買取りて、菓物野菜を作るものゝ如きは、其の衣食住共に日本内地の中流以上に優れるヿ遠く、布哇に於ける多數勞働者も亦内地勞働者の夢想せざる良生活を爲せり

且つ此等の移民は年々本國に送金し、其の高今や一千万圓を下るヿなし。之がため移民を出す和歌山、廣島、山口の諸地方は、村民の生活著るしく進み、學校、衞生の設備等他に比して嶄然傑出せり

布哇に移民多きがため、米味噌醤油は勿論、吳服類の如き亦年々輸出せらるゝもの増加しつゝあり、彼等は其の收入の一部を本國に送金し、一部を以て豊かなる生活を爲し、殊に好みて本國の生活を爲すが故に、日本品の需要漸く多きを致す也

移民の利益や然かく大也、若し年々數万人を出さば、其の利の亦大なる何ぞ多言を要せんや、彼の醜業婦の外出を氣にして動もすれば之を制限せんとするが如きは、實に井蛙の見のみ、歐洲諸國孰れか海外に多數の醜業婦を出さゞるものあらん、唯だ彼の官民見て見ざる爲するのみ、却つて日本の官民が故らに嘵々して暗中の暗事を公告するの愚を冷笑せんのみ、凡そ海

外移住といへば、醜業婦と雖も亦妨げず、何ぞ況んや我が額の汗によりて生活せんとする『神聖なる勞働者』をや

（三）

移民の利益極めて大なるに拘らず、其の事業甚だ振はざるが如きは何ぞや、試みに其の原由を擧ぐれば

第一政府に一定したる殖民政策無きとなり、我が政府が移民事業に注意するに至りし嚆矢は、恐らくば故陸奥宗光氏が外務大臣たりし時なるべし、當時布哇に若干の移民あり、其の事頗ぶる有望にして、而して之を取扱ふもの亦少からざる利益ありしを以て、陸奥氏は自由黨の一財源として先づ取扱ひを彼の黨員に許し、且つ若干の取締法を定めたるも、主たる目的は僅かに自由黨のためにするに過ぎず、大に移民事業を奬勵するが如き方針ありしには非ざるが如く、現に布哇の我が移住民をして參政權を得べき好機會をすら逸出せしめたりき

陸奥氏以後の外務大臣は、移民事業には漠焉たり、彼の北米合衆國太平洋沿岸の諸州が、多く日本の勞働者を必要とするに拘らず、唯だ一桑港市の勞働組合が日本人の製靴者、洗濯屋、雇人等となりて勞働するを憎み、聲を高くして其の排斥を唱へ、クロニクル、エキザミナアの諸新聞紙亦市内の勞働組合に媚びて盛んに日本人排斥を鼓吹するや、我が外務大臣乃ち狼狽して人民の渡航を制限するに至る、移民の事情に迂遠にして而して冷淡なる想ふべき也、小村氏外務大臣たるに及び、始めて移民の利益の忽かせにす可らざるを氣付けるが如く、多少移民取扱人取締の改良を加へたるも、素より特筆すべき程のものにあらず、現外務大臣加藤氏に至つては、寧ろ此の事業に極めて冷淡なりと傳へらる、英獨諸國政府が移民に鋭意するに比すれば其の差霄壤も啻ならずと謂ふべし、

第二移民取扱業者の不良なると也、現今の移民取扱業者は、單に眼前の利益に汲々たるのみ、之を國家的國民的事業として永遠に其の利益を期圖するが如き大志なし、其の專念に期する所は、單に移民より一人二

十圓宛の手數料を收め、又移民の汽車賃、汽船賃、購買品、旅宿賃等より若干の所謂『頭を刎ね』て暴利を貪ぼさらんとするに過ぎず、甚だしきは不良なる銀行と結托し、移民の無智なるに乘じて多く不正の利を得るを大主眼とす、

現在の移民業者は其の數三十內外なりといふ、彼等は單に如上の利益を貪ぼるを目的とするのみ、眞實に移民の監督保護に任じ、又は移民のため、利益ある新開墾地を開拓するが如き意思なし、彼等は多數の移民を取扱ふを利とするがために、若し新たに海外より移民の需要を申出づるものあれば、移民の賃銀、衛生設備、生活狀態等の良否を問はず、又雇主をして當然盡すべき義務を盡さしむるの條件を約せず、幾んど法外なる條件（移民に不利なる）を以て、多數の移民を引受けんと欲し、競爭の結果、或は移民を失望し失敗せしめ、或は雇主を危惧せしめて手を引くに至らしむ、秘露、比律賓等の我が移民失敗は其の一例也、而かも此の如き移民取扱業者の手を借るにあらざれば、到底海外に出稼するを得ざるは現行の例規たり、移民の振はざる何ぞ怪むに足らんや

第三移民を欲するものに先づ少からざる費用を要すると也、移民たらんとするものは先つ移民取扱人に成規の手數料二十圓を支拂はざる可からず、而して契約移民（米國は契約移民の上陸を禁止す）にあらざる限りは、渡航の汽車汽船賃をも自辨せざる可らず、毛布其の他の携帶品をも調達せざる可らず、此等の經營を合して凡そ百五十圓乃至二百圓を要するを常とす、一旦出稼せば、多くの收入を得ると疑ひ無きも、先づ百五十圓乃至二百圓の費用を調ふると、移民たらんとするが如きものには全く容易ならず、是れ移民を欲するもの多きに拘はらず、未だ移民の大に振はざる一原因なり

（四）

故に移民事業を盛んならしめんと欲せば、政府先づ第一に之を奬勵するの方針を確定すべし、移民たらんとするものは若干の補給金を與ふるも亦一法なるべし

次に移民取扱の一大會社を組織せしむべし、外務省は移民取扱業者を無限責任とするの趣意を以て株式會社の組織を許さずといふ、是れ極めて理由なきこと也、會社をして移民に對し十分責任を負はしめんとせば、寧ろ相當の保證金を供托せしむるに如かず、會社責任を盡さゞる場合には、此の供托金を沒收し、之を以て移民に對する相當の措置を取ること寧ろ便法なれば也

移民取扱會社をして、移民渡航の特別船舶を所有せしめ、又移民賃銀の一部を割きて若干の期限中會社に收得せしむべし、然るときは會社の利益極めて多きを以て、其の資本また十分潤澤なるを得べし、資本潤澤なれば、會社をして左の義務を負はしむるを得

(一)移民企望者には、手數料、海陸旅費、上陸金(自由移民の米國に上陸するもの若干の所持金あることを擧示する必要あり)等を會社より貸與すべし、此の場合には土地又は家屋を有するもの二人以上を保證人とし、貸與金には相當の利子を附して移民の賃銀中より毎月賦を以て之を償却せしむ、移民之を償却せざるときは保證人之を辨償すること勿論也

(二)移民の多き海外地方に於ては、會社は移民の貯金を取扱ひ、又移民のため教會、學校病院等の設備を爲すべし

(三)移民一團體を爲すも、適當の商賣機關なき場合には、會社の發起を以て購買組合を組織して移民の便宜を計るべし。移民が土地を購ひ、新日本村を作る場合にも、會社は誠實に其の便宜を計るを要す

(五)

我が移民の到るべき所、近くは比律賓、濠洲あり、南北亞米利加の太平洋沿岸は、殊に豐饒なる地方にして、滿地の遺利甚だ多し、北はアラスカ、加奈陀より、ワシントン、カリフォルニア、テキサスの諸州及び秘露、墨西哥、ブラジル等、到る處に鐵道工事あり、菓物畑あり、甘蔗、珈琲等の栽培事業あり、鑛物採掘あり、秩序を貴び清潔を好む勤勉なる我が勞働者一たび

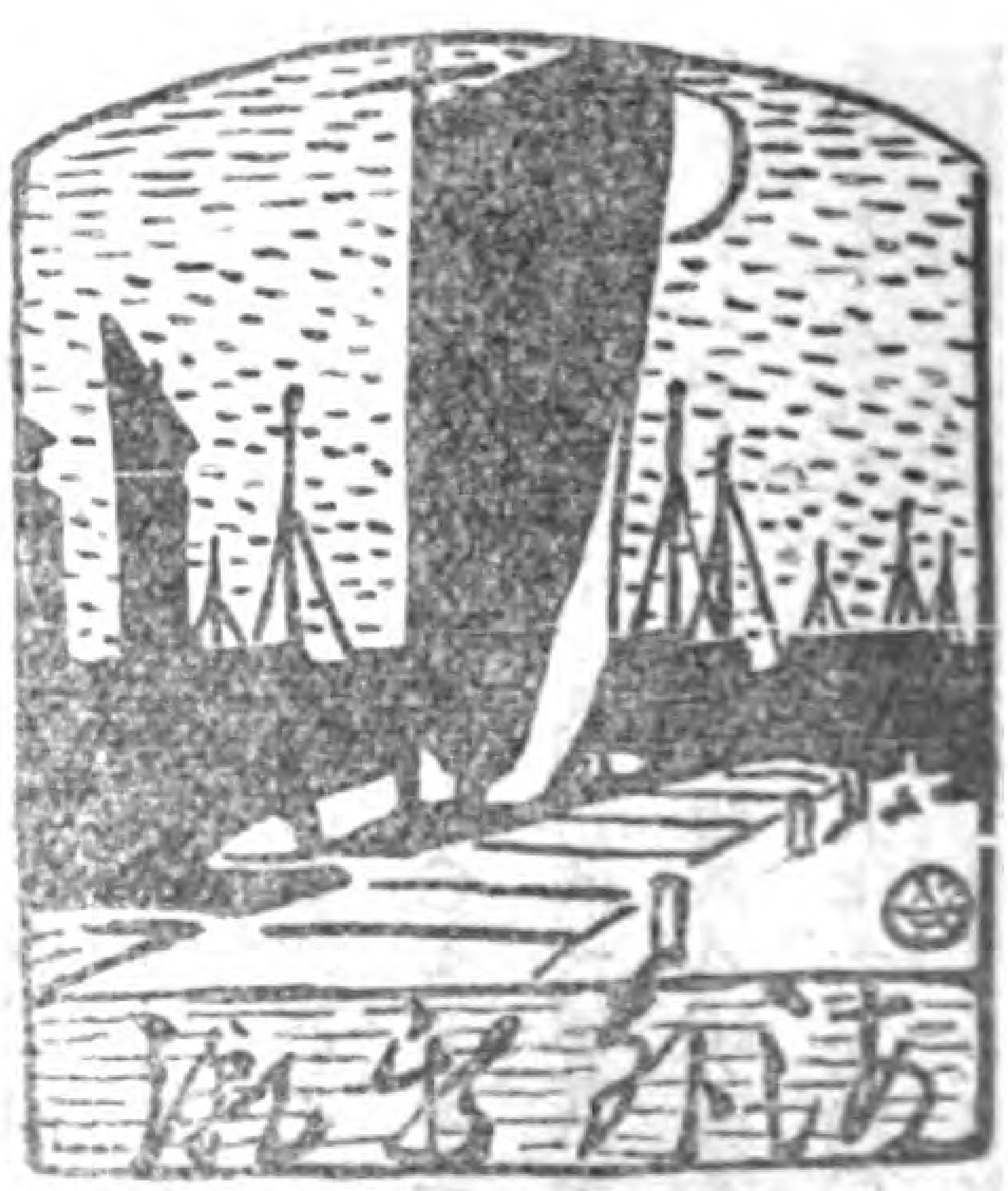
至らば、孰れか之を歡迎せざらん、而かも其の土地廣大、人煙稀疎にして、我が移民を容るゝ數万、數十万、數百萬するも曾て狹隘を感ずるとなし

我れは移民によりて他の國土を纂奪するが如き古風なる野心寸毫だもなし、唯だ到る處其の國の主權に從ひ法律を奉じて、我が神聖なる勞働を以て、平和幸福を得んと欲するのみ、而して是れ我が日本の利福也、我が民族の幸福也、我が官民宜しく一致して大に力を玆に盡すべし

次號の論說欄に寄稿を依賴し置ける諸家は左の如し

浮田和民氏　福來友吉氏
丘淺治郎氏　金子馬治氏
井上哲次郎氏　中村進午氏
安部磯雄氏　戶水寬人氏
竹越與三郎氏　上田萬年氏
藤代禎輔氏　成瀨仁藏氏

尙ほ委しくは本誌卷頭に於ける『陽春號』豫告を見るべし



極東に於ける商戰

(日本と英米獨との貿易)

「デーリー、テレグラフ」

滿洲に於ける日露戰爭の終結と共に直ちに新たなる他の戰爭の開始せられたるを見る。新たなる他の戰爭とは何ぞや、極東の商業界に於ける覇權を握らんとする列强の競爭是れなり。勿論列强の商戰は決して今日に始まりたるものにあらず、そは過ぎし數年の間徐々として行はれ來りたるものなれども政治上の困難はそを沮礙して一定の限度を超ゆることを許さゞりしなり。露國は常に手に劍を持して支那の戶口に突立ち、極端なる自我主義を以て、各國の正當なる取引を妨害せんとしたり。其港灣、汽船、鐵道等に關しては一切獨占的態度をとり、土地及び海上權に對する彼の措置は一として軍略的ならざるはなかりき。斯くの如くして

彼は單に日本の存在を危うしたるのみならず、且つ列强の商權發展を妨げたる決して尠少にあらず、換言すれば露國は明かに世界の進みゆく道に立ち塞がれるものなりき。然るに一旦日本が此妨害物を掃蕩し、少くとも來るべき數年の間支那の安全を保障したるを以て、從來抑壓せられたる各國の商權は翕然として無際涯の勢を以て其出口を求めんとするに至りぬ。是を以て列强の商戰俄かに劇烈を加へ、啻に商業界のみならず、延て政治上にも其影響を及ぼさんとするの勢ある毫も怪むに足らざるなり。

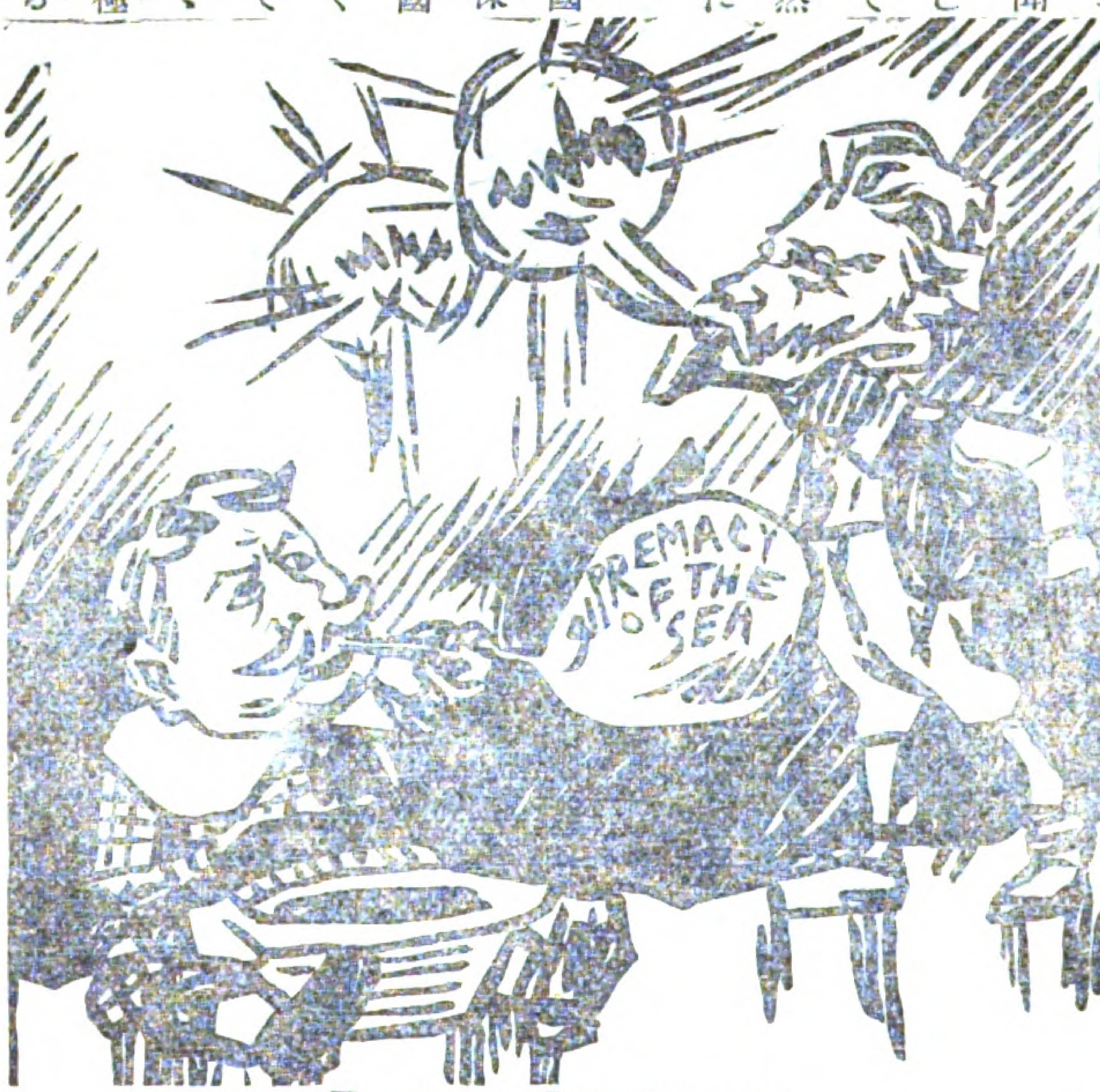
吾人は今此に我英國と日本との貿易を中心として、之を米獨の貿易に比較し、以て極東に於ける商戰の現在及び將來に對する見解を略述せんと欲す。世には一種の論者あり、其いふ所毫も確固たる根據又は事實なく、たゞ漫然英國の商權は衰微したりと慨嘆する悲觀論者あり、吾人は素より此等の論者と一致すること能はず、苟もかゝる重大の事件を論ぜんとすれば充分なる證據と綿密なる注意とを以て之を取扱はざるべからす。吾人は今玆に統計の明示する所に據りて觀察を下さん、蓋し統計なるものは一見無味乾燥なるが如しと雖も、其れよりして歸納せらるべき結論は實に重大なる意義を包むものたるを忘るべからず。日本に向て輸出する貨物の額を見るに獨逸は到底我英國の敵にあらざるも、今や米國は殆んど我に踵を接せんとするの勢あり、これ米國の人民が活動力に富みて膨脹的氣運の駸々として止まらざるにもよるべしと雖も其第一の原因は其地理的位置の便益遙かに歐洲諸國の上にあるを以てなり。千八百九十一年より千九百〇四年に至るまで過ぎし十四年間の狀態を檢すれば米國より日本に向てなしたる輸出額實に八倍の多きに增加し、獨乙は五倍に增加し、而して英國は僅かに三倍したるに過ぎず。然れども近來又稍々我勢を挽回し、他の列强と其律を等うするの形勢あるは少しく滿足するに足るべし。今現在に於ける極東の商業界を概示せんが爲め昨年九月に至るまで九ヶ月間の日本の輸入額を擧ぐれば

英吉利帝國より

大英國より	八、二三〇、六六五
印度より	七、七六六、八一四
香港より	一〇三、一八六
海峽殖民地より	二四二、九二〇
加奈陀より	四二、二八五
濠太利より	四八四、二二九
埃及より	二〇四、一四一
總　計	一七、〇七四、二三九
米本國より	八、〇七四、〇七六
比利賓より	一〇七、五一一
總　計	八、一八一、五八七
獨乙より	三、四八八、六九八
支那より	二、九七一、七四〇
佛領印度より	八四四、一四七

朝鮮より…………………………三九三、二四七

以上の表によつて見るに昨年九ヶ月間の日本の輸入は殆と從來の全一ヶ年の額に等し、而して米國貿易は實に長足の進歩をなしたることを了すべし、是を以て米國の一地方新聞が「今や米國は日本の輸出入に關して他の列強を支配するの位置に立てり」と論ずるものあるに至れり、然れども吾人は此論を以て些か誇大に失したるものといはざるべからず、何となれば前表の示すが如く我英國は依然として其輸出額の第一位を保つを以てなり、とはいへど今や米國は我英國の踵に迫り、獨乙も亦漸く其歩を早めて英國と仝じ割合を以て進むに至りたるの事實は之を許さゞるべからず。されど靜て考ふるに極東の貿易がかゝる變化を來たしたることは又大に戰爭の繼續のためなりしことをも思はざるべからざらん、何となれば日本が戰爭中要せし所の機關車、車輛、及び鐵軌の如きは迅速を尊ぶの故を以て大抵米國より輸入せられ、且つ太平洋は實際上禁制品に關する干渉を免れしを以て諸外國貿易は大抵米國を通じて行はれたる等の事情ありしを以てなり。



UNWELCOME INTERFERENCE.
PRINCE BUELOW—"As fast as I blow these fine bubbles, that little Bebel busts them!"
—*Humoristische Blatter* (Vienna).

以上論ずるが如く米國の昨年に於ける輸出額の増大は一面戰爭より來りしものなりとするも、過ぎし十四年間の割合を見れば列强中最も進歩の大なりしとは疑ふべくもあらず、而して最も其打擊を蒙るものゝ英國たるはいふ迄もなし。然れども吾人が眼界を大にして英國殖民地より日本に輸出する總額をも加ふれば嶄然として他の列强に超絕し、米國と比利實とを加へたるものゝ二倍以上に達す。而して我殖民地の位置たるや皆日本と貿易をなすに便益の位置にあり。而して各殖民地も極東の商戰漸く劇甚ならんとするを看取したるが如し、彼等は皆日本に多數の代理者及び旅行者を派遣し、大なる活動を開始せんことに熱中せるものゝ如し。知らず極東の商界に於て其鹿を獲るもの果して誰ぞや。

支那の覺醒

「ブリストル、タイムス」

數世紀の間長き眠を貪りたる極東の巨大なる帝國は今や將に覺醒せんとする徵をあらはしつゝあり。日露戰爭の如き大戰爭に於て日本の勝利が彼が如く大なりしに拘らず、數億の住民は果して何等かの影響を蒙りしか否かさへ明言する能はざる程支那の國土は大にして其眞相は知り難し、然れども外面にあらはれたる所によりて觀ずれば東洋が西洋に勝ちしといふ一事は深く支那一部の人心を動かしたるものゝ如し。これ或は支那一般の事實なりといふ能はずとしても少くも開港場又は他國との交通頻繁なる地方の人心を動かしたることは疑ふべからず、數週前モリソン氏は北京より「タイムス」に通信して、近來彼が應待する支那人の態度漸く一變し、明かに向上的進步的なる情を抱き來れるものゝ如しといへり。而して又我社の通信員も北京より仝樣の觀察を送り來れり、支那は自ら有する勢力を自覺し、他面に於ては從來畏怖したる外國人の弱點を認識するに至れり、支那は新たに西歐文明の一大利器―外貨排斥を學びたり。彼は米國が彼の勞働者を排斥したる返報として米國の貨物及び商人を排斥することに於て成効せり。而して昨今傳ふる所によれば彼は又印度產亞片に向て仝樣の所置をとり、漸く印度及び英國商人を排斥するの徵候あるものゝ如し。上海に於ける一擾亂は英米の協力によりて漸く鎭靜に歸したるが如きも、內部人心の激昂は却て增加しつゝあるが如く察せらる。

世には又彼の北清事件に類似したるが如き排外的氣運が醞釀せられつゝありと風評するものあり、然れども是れ所謂風評にして、彼の奇矯世を駭さんとするものゝ流言なるべし、吾人は寧ろ之を以て全く無根の捏造說なりとしたる「モーニング、ポースト」の日本通信員の說を信ぜんと欲す。而して今日支那が動搖しつゝあるの一因は又日清間の交涉全く其局を結ばざるにもあるべし、新文明を移植せんが爲め、日本に送られたる若き支那學生の數千は日本政府に反抗して續々歸國の途に就くものあるが如きは、日本も亦支那の排外的精神の渦中に卷き込まれたるものなりといふを得べし、今や支那人の唱ふる所は「支那人の爲めの支那なり」といふにあり、而して此叫は或は輕視すべからざる革命的氣運を造るやも知るべからず、陸海軍改革の計畫は俄然として着手せられ、滑稽笑ふべき古風の武器は漸次近世の進步したるそれに代へられ、大演習及び訓練は開初せられ、日本が大利益を博したる新制度は次第に彼等に採用せられんとすなり。又內政に於ても大改革を施し官吏採用の舊制は改革せられんとし、國民敎育は改善せられ、蠻的なる刑制は廢止せられんとす。又鐵道、鑛山及び其他の事業に於ても支那一己の計畫を立てたりと傳ふれども、是れ果して英、米、日の利益と一致すべきものなりや否やは未だ疑問に屬す、要するに支那の未來は未決問題也。たゞ今日明言し得るは兎に角今日とは大に其面目を異にすべきの一事也。而して今日の覺醒が絕えて亂暴なる騷擾を起さず、徐々として改善せられ、以て世界の平

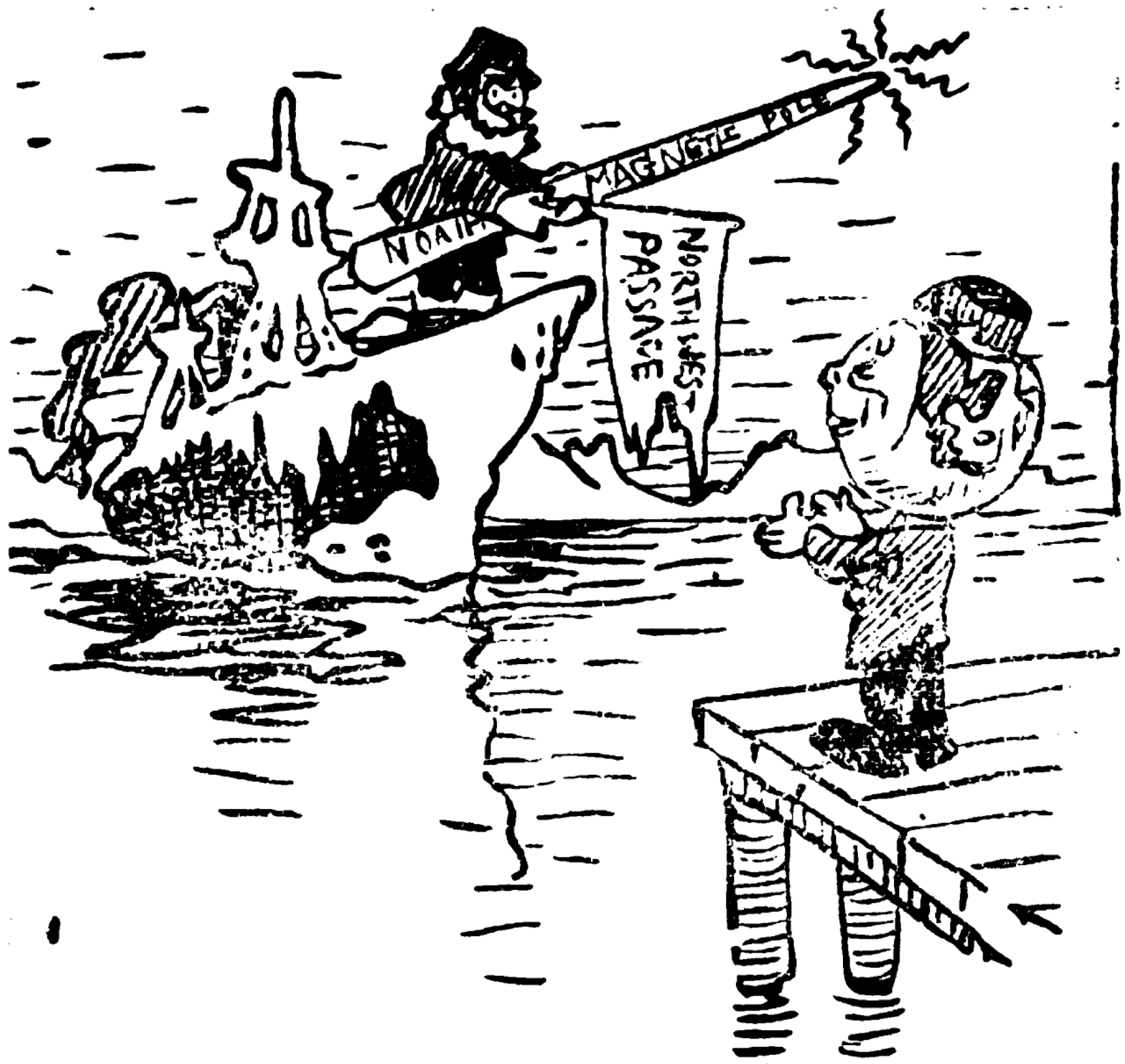
和を維持せんことを希望するの情に堪へざるなり。

露國の對印度計畫

ペレスフォールド大佐

ポーエル・ペレスフォルド大佐は英國大使館附武官として聖彼得堡に駐在せし人、頃日『中央亞細亞協會』の席上に於て『印度方面に達する露國の鐵道計畫』に就き演ぶる所あり、曰く、

オレンボルグ・タシユケント鐵道の全通は、露都聖彼得堡より阿富干國境に接するクシユク・ポストにまでの直通鐵道を露國に與へたる者、此に於て露國は更に第二の計畫を作し、一方に於て中央亞細亞鐵道を延長して印度に接近せしむる鐵道敷設計畫を爲すと共に、他方に於て波斯を貫通して印度に接近する大鐵道を敷設せんとを計れり。即ち一方には中央亞細亞鐵道のチヤルヂウエイ驛（メルヴ驛とブハーラ驛との間、アムダリヤ河の左岸に位置す）よりアムダリヤ河の左岸に沿ひて南下し、阿富干斯坦の境域を距る數哩なるケルキイに至り、更に境界を絕ぎりて阿富干斯坦に入り、マザリ・シエリフの附近を通過してカブール河の灌域に入り、ジエルラバツトを經て印度のペシアウアールに達せしむ。然れども此の計畫を完成せんとするには上アムダリヤ河の支流なるアクセライ川を通過するの後數多の小群山と、ヒンヅー・クシユ山の大山脈を迂廻若くは踰越せざるべからず、由來露國の鐵道技師は山腹に隧道を鑿通するに慣れざれば、此間に於ける小群山と大山脈とを通過するは頗る難工事にして、且つ巨額の費用を要することとなるべし。



CAPTAIN AMUNDSEN—"I saw 'em first."
—Rehse in the St. Paul *Pioneer Press.*

更に波斯を貫通して印度境域に到達する鐵道を完成せんとするは、波斯王との條約——即ち露英孰れの鐵道をも波斯を通過せしむるを許さゞる條約——を無視するの所行なる

が、此の方面に鐵道を敷設するに當り會すべき有形の障礙は特に大なりとせず。蓋し此の方面の鐵道は高加索橫截鐵道より分岐せるものなるが、波斯國境に接近するジュルフア迄の間は既に大略敷設を了り是より國境を通過して波斯内地に入り、タブリッツを經て首都テヘランに到り、此處にて南東兩方に分岐せしむる計畫にて、南行する支線は、イスパハン、シラッツを過ぎて波斯灣頭のバンダー●アバスに達す。而して幹線は首都テヘランより東行して、コーラッサンを過ぎ、メシエッドを經て再び波斯國境を絕ぎりて露領中亞に入り、クシユク●ポスト驛にて中央亞細亞鐵道支線と接續し、其れより更に阿富干斯坦に入り、ヘラツトを經てフアラーに到り、然る後ち更に兩路に分岐し、支線は南西行してセイスタンに達し、幹線は南東行してカンダハールに達す。

以上は露國の阿富干斯坦及び波斯の兩路よりして印度の境域に接近せんとする鐵道敷設の計畫なるが、更に地圖に據りて按すれば、英國も亦たニュー●チヤマンの線を延長してカンダハールに至らしむる計畫と、ヌシユキ、ケルマン、シラッツに至る幹線、及びセイハタン湖より北行してメシエッドに至る支線とを敷設するの計畫とあり。而して露國の計畫の一なるクシユク●ポストよりヘラツト及びカンダハールに達する鐵道は其の敷設容易にして費用も亦た多額に上らざるべく、究竟既設線なる露國舊都莫斯科よりオレンボルグ●タシユケント線を經てメルブに入り、更にクシユク●ポスト線を延長して印度境域に接近せしむるに外ならざれども、而も此の敷設計畫を完成せんとするには、先づ阿富干王の許可を得るを要す。

現時中央亞細亞方面に駐屯せる露國軍隊は二軍團にして兵員約三萬八千人、砲百二十四門なり、第一土耳斯坦軍團の本營はタシユケンに在りて、第二土耳斯坦軍團の本線は波斯の境域なるアスカバツトに在り。

泰西偉人の愛讀書

ベトーベンは歷史と小說を好めり。

カウパーは唯だ聖書と祈禱書を讀みたるのみ。

ハラムはリヴヰーが、摸範的歷史家なるとを云ひき。

シヨツパンは、佛蘭西小說の外、絕えて硬文學の書籍を讀まず。

オーパーは讀書を悄み、何か必要ならざれば決して書を手にせず。

シーザー●ボルジアは、藝術に關する書籍の圖書館を有しき。

チチアンは祈禱書と、オビッドのメタモルホーセスを讀めり。

ウオルテーヤの愛讀書は、諷刺家ジユベナルの小說なりき。

ロッシニーは殆んと三十年間、佛國小說の外何物をも讀まず。

ジヤン●ポール●リヒテルは、唯だ五六册の哲學書を讀みたるのみ。

クライブ卿は、其の讀破したるいかなる書籍よりも、督敏遜航海記が第一なりと云ひき。

フランクリンは、政治經濟財政に關する書籍は、目に觸るゝもの殆んど目を通さゞるはなかりき。

ミケール・アンゼロは、ダビットの聖歌及びモゼスの書を最も愛讀しき。

バッチは大讀書家にはあらざりき、然れとも滑稽諷諭の書を好めり。

ジヨルヂ三世は禱禱と聖書の外何書をも讀まざりき。

スキフトは拉丁諷刺家の著作を研究し頻りに其の言語と文體に模倣せり。

ハイネは詩歌の外、讀むことなし、然れども之を讀むや非常の細心を以てせりき。

ウオルズウオルスはバーンスの詩を好みたりしも猶はバーンスの詩は餘りに粗硬にして不作法なることを云ひき。

プルワー・リットン卿はホーレースの著作を好み、常にポケットの其中に其小册子を携へたりき。

英國のチヤーレス二世は、チヨーサーを好み、之を以て古今の大詩人なりとなしき。



BADLY MATCHED.
How will the journey end?
—*Kladderadatsch* (Berlin).

カーライルは重に獨佛の文學と歴史に關する大圖書室を有しき。

テニスンハ古英國物譚を熱心に研究し、之れに關する大圖書室を有しき。

英のゼームス一世は、古文學の愛讀者にして、殊に拉丁文學者の著述を好めり。

ジヨン・バンヤンは聖書の外何物をも讀まず、耶敎徒は寧ろ其他を讀まざる方可ならんと云へり。

繪工バンダイクはデカメロンを好み、會話の文句を其中より引抄すること多かりき。

カーヂナル・リセリユーは拉丁の戀愛詩人タイプラスの詩を好めりき

佛國のルイ十四世は、オビッドの戀愛詩を以て、世界第一の巧妙なる著作となしき。

ゲーテ少時に讀める俗說學に其の大名を歸すること多きを語りき。

ジユリアス・シーザーはホーマーの愛讀者也、其の軍事科學は、凡て

其の内より出でたりと稱せらる。

トルストイは社會學書の一大圖書室を有し。殊に新社會相につきての書籍を愛讀す。

アザソンの癖は金貨其他貨幣の歷史研究にありき。(日本人)

杜翁の露國將來論

伯林ターゲブラット紙の在露通信員は露國の將來に關するトルストイ翁の意見を同紙に送れり。伯は、今日同國の紛擾一方ならずと雖も、結局、農民の不動の忠心によりて將來は安全なるべしとの意見を抱けるなり。通信に曰はく、

トルストイ伯は露國の現狀に關して、驚くべき程の樂觀を有す。伯の考にては現今には何等の危險分子をも含まざるなり。何となれば大市都の勞働者が、如何に騷動すればとて、其の數、人口の大部分たる農　に比すれば、極めて僅小なればなり。



THE DIFFICULT PASSAGE.
Will he reach the harbor?
—*Kladderadatsch* (Berlin).

農民は決して革命のことを思はざる也。新聞紙上に、地方の動亂など〻記述する所ありと雖も、そは皆な針小棒大の記事なりとは伯の意見なり。今日同國の現狀を根柢より顚覆せむと欲する者は、極めて小數の革命黨のみなり。

而もトルストイ伯は同國の將來に關して、何事の生起するやは量るべからずと語ると共に、二三の意見を述べたり。其の要旨とは何ぞや。今日の政府は、腕力主義の上に建設せられたるものなれば、之れを破壞して、愛他、善及び基督教の教條を基礎としたる新政府を組織せざるべからず云々と。

ダヌンチオの作物

『エヒヨー所載』

ダヌンチオの新作小説、狂亂の母(Madreo folle)は、ミュンヒネル、ノイエステン、ナッハリヒテンの所報によれば、今正に印刷中なりとのことなり、此小説は、燃ゆるが如き青春の情抑え難く、遂に私通するに至れる少女の運命を描きしものなり、又數旬前に豫告されたる氏の小説コマランタ、之は或る似而非女流美術家の悲劇的運命を物語れるものなるが、之も暫く延期することとなれり、そは、氏が空想の所産にあらずして、或る確存せる事實に據りて筆を染めたるもの、其薄命なりし女流美術家の親戚にて、佛蘭西、比耳義に住めるものより、今は無き彼女の書簡及び其他の書類の保管を氏に托することとなりし爲、收め得たる此等の材料を、仔細に撿覈したる後、更に其未了の稿を續けんものと思ひ居るなり、



ルドルフ、バウンバッハに就きての論爭

『同誌』

現今ゲルリッツに於て、ルドルフ、バウンバッハに不朽の生命ありや否やに就きて、烈しき論爭行はれつゝあり、ゲルリッツのフライエ、リテラリッシエ、ゲゼールシャフトは、全力を注ぎて、名譽ある地位を、シエッフエルとユリウス、ウヲルフとの間に占むるを、何人にも認められ居る、此頃死せる彼の快活にして敬愛すべき詩人をば、實に不死の生命あるものと稱揚したるが、實にや死者に對する品隲は、兎角過褒に走るもの、過褒は幾分免れずとするも、大體に於て其所論は吾人を滿足せしむるものなりと思惟す、然るにニイデル、シラヂッシエン、ツアイツングの評論記者ハンス、フイッシャー氏は、其不朽の意義に就きて一層精

緻なる檢覈をなし、大に前者の說を非難したり、而して氏が其批評中、バウン、バッハの詩を排してローヂネン、ポエヂイ、即ち乾葡萄の詩なりと嘲りたるは吾人の所見よりすれば聊か過言に失したるに似たり、之に對してフライエ、リテラリッシエ、ゲゼールシャフトは、更に戰備を爲しつゝあり、斯くて此美しきシマレジア市に、バウンバッハの眞價並に彼が幾多不朽の名を負へる大文豪中に於ける位置に就いての論爭は、愈よ烈しくなり來れり、吾人は斯ゝる論爭の遠からず平和に歸せんことを望む。

東京女子大學

『同誌』

最近十年以來日本人は非常に精神上の發展に勉め、同時に婦人をば一層高地位に置さんと努力したりしなり、千九百一年より一個の豫備科を有する女子大學が東京に於て建設せられしが、最近の報告によれば、此本科、豫科の二制度に於て有する生徒數は、現在、一は三百名、一は五百名なりといふ、以て如何に日本の女子が自己の修養に勉めつゝあるかを知るを得べし、此大學は、一層、最も善美なる、眞摯なる意味に於て、女子の高等教育の一機關として存するものなり、そは或る一種の登庸試驗の如きに應ぜんが爲にはあらで、勉むるところは唯自己一個の高上を成就せんが爲なればなり、學制は三部に分たる、第一部は家政科、第二部は日本文學、第三部は英文學之なり、左れば學生等は、唯自國の文藝を修得するに止らず、更に歐洲の精神生活に切實に接觸して進みつゝあるなり、敎授は婦人より成り、特に多くは日本人、並に英國人にて監督は最も嚴に、其校規には學生の極めて眞面目に勉學せんことを要求し居れり、學科中、家政學は義務的に修むべき一必修科となり居り、日本の敎科書中に採用せられ居る理論的並に實踐的倫理學も授けられ、經濟學も授けられ、憲法並に民法、生理學、家政術、衞生學等も敎えられ、又適度の運動は、衞生學の實行として、必須科として與へらる、凡て此等は精細なる校則によりて規定せられたるものなり、此校の基礎は、歐洲諸制度中の粹を集めて大成せるもの、之を從來の結果に徵すれば最も前途に於て希望多きものなり、



予の愛讀書

○ 德富蘇峯

愛讀書と申しましても、殊に愛して讀むといふ樣な本はサウ澤山はないですね。又或時は此本が好きだが或時は彼本に代るといふやうに讀書の嗜好の變遷は誰れにもよくあることですが、私も其一人であつて好んで讀む本は時々に變はるのです。然しながら其中にも亦始めから終りまで餘り變らぬ本も少しはあるものです。今お話するのは、其變らぬ方の本を申すので、變る方の本は今はお話しませぬ。

支那の本ではマア史記ですね。史記の總てといふ譯ではない、其或部分ですね、これは今でも愛讀して居ます。夫れから水滸傳、これは持て居た本を泥棒にとられて了つて今は手元にはありませぬが、非常に愛讀したもので、文句まで暗記して居る譯でないけれども、大概こういふ調子であつた位は覺えて居るので、時々記臆の中から引き出して味つて居ます。詩では私は矢張り杜甫と東坡が好きです。唐宋八家の中では韓退之が好きです。それから論語といふ本は私は最も好きです。どういふ譯か知らぬが非常に面白いと思ひます。諸子の中では私は莊子と韓非子が好きです。韓非子の或物は自分で寫して居る位です。

日本の本では山陽詩鈔が大變に好きです。これは詩といふものからいうて果して善いか惡いかはわかりませぬが、詩は志を謂ふとか、詩は人生の批評なりとかいふ意味からいふたならば、あの位其意味に適當したものはないと思ひます。假名交り文では源平盛衰記、太平記、藩翰譜、讀史餘論、それから駿臺雜話、鳩翁道話、それから八犬傳などよく讀みましたが、然し果して愛讀書の中に入るや否やは自分にも疑問です。何

時も傍から離さないといふ程に讀んだのではないのです。又徒然草などもよく讀んだ時もありました。又自分には詳しいことはわからぬが古今集なども愛讀書の中に入り得るかと思ひます。その外殘したものもあるかも知れませぬが先づ其位にして置きませう

夫れから英米の本ではエマルソン。ジョン、モーレー。マッシウ、アーノルドなどいふ人のは愛讀書といひ得るだらうと思ひます。文章としてはゴールドウィン、スミスの書いたものや、フレデリック、ハリソンの書いたものなどが好きです。又故人となつたフラウドの論文は面白いと思ひます。歴史ぢやない、論文の方です、其 Short studies on Great subjects などは實に面白いです、スタイルの點からいふと非常によいと思ふてすね。マコーレーは非常に好きな時代があつて其英國史などは愛讀というても言葉が足らぬ位に讀んだことがあります、然し年と共に嗜好が變てそれ程でなくなりました。新聞の文章としてはタイムス（勿論倫敦のですな）の社説がよいと思ひます、又倫敦スペクテートルも面白いと思ひます。

私は外に何等の技能もないものですから、書物を讀むことを唯一のレクリエーションとして居るのです。だから本を讀むことは讀みますが所謂愛讀書となれば腹の底からしみ〴〵とわかつて面白いと思ふものでなければならぬのですな。以上に申述べた所は愛讀書と申しましても、所謂肝膽偏照であつて、讀まるゝ方では、ナアーにあれにはわかるまいというて居るかも知れませぬ。然し書物のことてあるから、何にも苦情をいうて呉れぬ樣に思はるゝのは幸です。（記者筆記）

○　薄田泣菫

此頃は餘り多く書帙に親まぬので、これと謂つて別に御答へ申す程のものも見當らない。が、其うちで興味深く讀んだのは、"The little flowers of St. Francis" と Swedenborg. E. の "Heaven and Hell" と James. H. の短篇の二三と、邦文のものでは梁川兄の『病間錄』とです。猶以前より師友として日夕手に觸れてゐ

る二三の書籍も無いてはありませぬが、孰れも人界共有の寶藏、事新らしく擧げるまてもありますまい。

○

野口米次郎

愛讀書は尊服畏敬して居る書物とは自ら異なるのて、人間ても自ら尊敬感心しては居ても親交するを得無いものがあると同じてしやう。天下に書籍多してあるけれども自分の愛讀書となると少いものてあるのは天下に人間多しても自分の親友の少いと同理由てあるのてしやう。又時々自分の友人が變ずる如くに讀む書物にも變遷がある。少年時代は青年時代と異なり從つて老年時代となると又一變化を來すてあろふと思ふのてす。

十年以前加州ミラーの山莊に入つた時にはポーの詩集を愛讀しました、其はポーの詩集の外本といふものは手に無かつたからてしやう。(ミラーといふ人は他人の作を讀んだとの無い人て自分ては星の歌を聞き薔薇の詩を讀むと云つて居るのも一見識てす、)ミラーの山莊にポーの詩集があつたから其本を愛讀したのてす、山に住んて一人の友を得て日夜談話を闘はすと同場合なのてす。其後、市俄古の詩人て今ては死んだ人だがチルドレンの詩て以て天下に名ある人てすがフキールドといふ人が、ミラーの山莊に來たとがある、其人が市俄古に歸つてから私に自著の詩集一卷を送つて吳れたとがあつた、讀んて其詩人に愛着したのてした。フキールド氏に依つて小供の詩の趣味を覺へて以來、ミルトンやセーキスピーアを讀むよりはライレーの小兒詩を讀むやうに成りました。今日ても私は堂々たる大家の詩集よりは無邪氣なるチルドレンの詩を愛讀します。小供の詩て天下に有名てあるのは、フキールドとライレーとルイス、スチーブンソンてしやう。私はスチーブンソンの Child's Garden of Verses を愛讀します。又近頃ては暮斯敦の女詩人ビーボデー孃の小兒詩も愛誦します。孃の小兒詩は Singing Leaves の中多くあります。又先々月のハーバー月刊雜誌にも得からざる小兒詩數章あります。

愛讀書を得るのは友人を得ると同じで、私に取つては一の機會ですよ。勿論大家の書物は尊服畏敬しまして讀みますが、愛讀するといふ段に成ると、肩の凝らぬ自分に戀はしい本を讀みたいのですよ。

ミラー先生は必ずしも天下の大詩人で無いでしやう、然し稀に產れる米國現代の大詩人に相違無いのです。一ケ年半前先生に離別する時、先生は自分の全集一部呉れました、私は之を歸朝以來愛讀して居ますのは、詩其物の大なるよりは其詩集の中にある先生の呼吸に接したいからです。先生に接して說敎を聞き高話を耳にして居る樣ですから少からずインスパイアされるのですよ。私は先生は私が是迄接した中で一番大で高き詩人であると斷言して其グレートネスを人にも知したいと思つて居るのです。先生の詩集を讀むと先生に接すると同時に加州否米國の大平洋岸の風物大景に接して、自然に自分も大になり且つ新らしき熱情と高き希望を與へられるのですよ。先生の外、私を感化して呉れた異人はスタッダード先生ですよ、先生の書いた南洋の散文詩を愛讀するのも亦ミラー先生の書物を愛讀するのと同じ理由です。スタッダード先生に依つて母の如き慈愛と温かき安慰とに接するのですよ。私の目下の愛讀書といふのは天下の名作で無いけれど氣心の知れた慕はしい書物なのです。

此の他の私の愛讀書ありとすると、其はウキトマンの Leaves of grass でありましやう。否な寧ろウキトマンの Specimen Days でありましやう。

○ 井上哲次郎

哲學の書物で私の愛讀するのはカント。ショーペンハウエルですな。又ダルウイン。スペンサー。ヴントの書いたものも除く譯に行きませぬ。それから文學の方では一番好んで讀んだのはゲーテの詩ですな。又ルツソーの書いたものは一體に好きです。殊にエミールなどは非常に愛讀しました。支那では先づ四書ですな。それから莊子、孫子、傳習錄などは好きです。佛敎の經文も好きですが殊に楞嚴經など勝れて居る樣で

すな。日本のものでは二宮翁の報德記を愛讀します。（記者）

○ 畔柳都太郎

愛讀書といへば日夕机上に親むといふものであらうが、斯ういふものは目今私に無い、が世には私と同じ樣に、一生の中或る時代に愛讀書なるものがなくなるといふ精神的態度の人もあらうと思ふから、自己の缺點を白狀するやうで氣持ちが惡いけれども、兎も角實情を打ちあけておきましよう、一體創作的熱情のあるもの、さらずば、唯作物をエンジョウイする讀者の側には愛讀書が出來るかと思へるが、兩者の中位に立ちて、幾分か批評的に咀嚼してみやうといふものには仲々難いもの丶樣に感ずる、それとゝ學問極めて該博、古來の大作家の作物を十分解釋剖判し得たる人には其間に自己の執心する書物を發見するともあらうが、私の如きは、頭腦未だ熟せず、スケプチックの態度にて讀む故。眼光紙背に徹することなく、從て愛讀書は出來ません、左れば唯現在讀み居るもの丶みの御話に止めやう

一時作家にならうと向不見の考を起して、幾分か熱心に讀んだものもあつたが、昔の高等中學時代のことであつて、今から見れば一昔のことだ、其後更に大批評家にならうと大學時代に少し試みたこともあつたが、之も大作をなして世を驚かさうといふやうな熱が冷めると共に、到底世人の益になりそうなものは書けぬと斷念してしまひ、此數年間は餘暇を偸んで唯讀むばかりであるから、如何しても情熱は起らず、極めて冷靜て、且つ至極滿足して手に任せて讀んで居るのみだ、慾には買ふ金と讀む暇がほしい、二つ求められなければ暇だけでもよい、併し慾には限りがあるまいと斷念をつける、見切りが惡るくない男だから目今の境遇ても不平は述べない。

私の頭の中には碁盤縞の樣なものがこしらへてあるからそれに篏まる書籍を配當して讀むで行くのだ、扨て文學研究といふものは、如何なる問題を提出するも

のかといふに、之を研究するには是非、文學概論が必要であるから、之に關する書籍を幾分か讀んで居る、が此文學概論は哲學概論よりも、更に杖柱となるべき書が無いのであるから、研究家には非常に不便を與へて居る樣である、何の文學概論を讀んでも、人に依つて何處かに瓢簞の縮括りのやうな個處が生ずるだらうと思へるが、私の今の苦痛の個處は、文學のスピリチユアルエレメント、即ち精神的要素の處、此處が如何も理屈は宜き樣でも、之に伴ふ情操が動かない此心的要素に情操さへ混つて來たならば、其處に一轉化を生ずるらしく思ふけれども、之が幾年の後であるか分らない、二三日前メビーの文學研究畧論を讀み上げたが、其中の精神的要素の所でまた／＼支えてしまつた、偶々手元に讀むべき書物があるので新注文は未だ海外に發して居らない、

次には、如何なる研究的歷史を經過しつゝあるかといふ問題、幷に如何なる方法が最上と見ゆるかといふ問題、此二つに答へざるべからざる書を撰びながら、讀んで行かねばならぬことゝ思ふ、之は非常に大頭腦あり大なる學問ある人でなければ、簡單に概括することすら困難と思はれる、私は其アウトラインだけでも一生のうちに得たいと思つて居るが空望に屬するでせう、併し其うちの比較的態度だけはどうか明瞭になりたいと願つて居ります新に注文したのは佛人の比較文學史ですが本月中に海外より着する筈で、今から待つて居るのです、

次には比較的態度で研究する曉の文學的材料を、序を立て、充實して行きたいと思つて居ます此方では自然問題の材料に就いて、丁度今ステップの新刊三種――馬鹿に寫眞版がよいので、日本の科學者が今少し通俗的にステップに模倣したらよからうなどゝ思ひつつ繙き居る所なのです、が一般の文學者諸君には顧られない性質の本でせう、科學者と文學者の兩方面から自然を書いて居るジョン、ボーロースの著が、西洋人から借りて讀んだとき氣に合つたのでそれで思ひついて全部注文してやつたのですが既に到着した通知を受

取りました、讀み殘しのウエーキ、ロビンとワイルド、ハネーに取掛らうと考へて居ます、ビーゼの自然觀は來月でなければ届きますまい、

次に人生問題の材料で、取敢えずラヴの問題がより多く興味あるから、少しづゝ調べて見る考で、フィンクの後を受けて、ギエンテルの戀愛史を讀みたいと思つて、嘲風君より借りて來ては居るが未だ着手はしない、モ一つの方はエリスの後を繼いで、ローランの病的戀愛を一讀する積で、千葉鑛三君より借りて來て居るが、これも其儘になつて居る、序でに言ふが、六合雜誌の神田左京氏は仲々忠實に戀愛哲學を連載して居られるやうだ、今日學校に於いて佛人エルベのラ、ヴイ、フイチユールの紹介を讀んで靈魂不滅の後を承けたる人道のまた其さきの將來の人生を書いたと云ふので何となく讀みたい心地がするのと夏目君が讀んで居たコンラッドのタイフーンが讀みたい氣が生じたことは事實である、

唯一つ、之は年齒(とし)の加はる爲でもありませうか、沙翁物に少し興味が出て來たかと自分で思つて居るくらいの處ですが、兎に角現在の心の狀態では、これ丈か御話し得る範圍です。

○　浮田和氏

精神的のものでは、東洋では四書、西洋ではバイブル、此二書を坐右のものとして、繰り返し〳〵讀んでゐますが、幾度讀んでも倦きないのは之ばかりです、佛書にもあるでせうが知らぬ、全體私の主義は儒教的基督主義といふので、バイブルと四書とを比較して見ますに、一方は頗る人類的に精神を養ひ、一方は之を基礎とするが上に、政治上並に多少修身の方も附け加へてあるので、兩方を讀むといふことは、興味のあることゝ思ひます、

始終讀むものではないけれども、白氏文集を好き、兵法を書いたもので七書といふものが有るが、之も好き、此中には孫子、吳子なども收めてあるので、文章などの參考にもなる書です、少し古いものの方でも靖

献遺言などを好んで居る、戰國策も好きです、陽明などども面白いとは思つて居るが未だ讀む暇がない、史記もよいですな、そーです、先づ文章がよいですな、太平記などは、餘りよくも讀みませんが面白そうに思ふ、三國史、私の有つて居るのは唐本で、薄い二十冊ばかりのものですが、譯したものでも隨分面白いもの、原本で見ると猶ほ一層に思ひます、水滸傳も唐本で有つて居るが、之は中々六ケしくも有り、未だ讀みません

近頃の日本のものでは蘭學事始、之は杉田玄白の自序傳で、薄い本ですが讀んで面白いものです、次には福翁自傳ですな、之は御承知の福澤諭吉翁の書かれたもの、それから此頃初めて見た報德記、之は二宮尊德翁の書いたものですが、面白いと思ひました、戲曲物ですか、其方は餘り見ません、が竹田出雲の忠臣藏だけは面白いと思つて讀んでゐます、

外國のものでは、カーライルのものを凡て好きです、詩ではポープのもの、それからバイロンのものを好みます、歷史ではギッボンの羅馬史、モンゼンの羅馬史、クリーチユールスの希臘史ですな、ヒユームの論文や、アダムスミスの著書、就中氏の著書では、富國論、道德論、感情論などを喜んで見ました、ダーウヰンのオリヂン、オブ、スペシースと、デッセント、オブ、マン、カントの倫理書、次にはヘーゲルの歷史哲學、法理哲學、それにコントの實驗哲學ですな、

政治書中ではアリストートルのポリチイックス、之を第一位に置きます、古いものではあるけれど、矢張り西洋でも此頃は、次第に氏の説に立ち返りつゝあるのですから、他に、グリーンの政治學に關する遺著、トライチケーの政治學講義、シーリーの著書、孰れも愛讀して居るのです、マキャベリスのプリンスとリヴイエー史論、之も愛讀して居ります、愛讀書といつても、先づ思ひ出した限りでは此んなところです、（文責在記者）

四川の大を語らん乎

竹川峽畝

●世界一勤勉の勞力者

清國諸口岸にある勞力者は狡黠にして慾張り、骨身を惜みて仕事に陰日向あり、常に卑むべき支那人的根性を丸出しに代表しつゝある間に、峽江の舟楫に從事せる苦力の、勤勉力行なる驚くの外なし、彼等の多くは、終始同一の船に乘り居る者に非ず、宜昌重慶間の往復或は片路を限りて老板の爲に雇はれ、契約の航行を終れば、更に他の老板の下に働く者にて、何れの老板とも深き縁故なきのみならず、其勞銀の如きも、溯江の片路にて、(一ヶ月餘もかゝりて)水夫長五六弔文、水先綱外づし苦力頭等三四弔文、曳手及雜役夫等一弔五百文乃至二弔文位ひの割合にて、他の口岸に於ける苦力の、一週間の貸銀程もなきに拘らず、朝は四時五時に起き上り、夜は碇泊すべき丁場の都合にて、足元の見へぬ頃迄も勞働し、毎日崎嶇艱險の道途を辿り、陰日向なく忠實に勤勉に忍耐强く立働くもの、恐くは全世界に於て無類の好苦力なるべし、

●下江の快速

溯江に於ては、増水季四五十日乃至六七十日を要し、減水季三週日乃至一ヶ月を要することは、前已に之を語れり、而して重慶より流に順て下る時は、減水季に於て、大船は十日乃至十二日、小船は七八日にして宜昌に到着し、増水季には、三四日乃至五六日にて到達し得らるべし、若し輕裝して快艇に乘らんには、夔州即ち白帝城の附近より、宜昌に至る約八百清里の水程を、一日にして到達したるの例少しとせず、古詩の千里江陵一日還てふもの、敢て不當の懸直に非ざるを悟了せらるゝ也、

●竹　　綱

遐た是れ川峽名物の一なり、凡そ峽江を溯らん程の大小船舶、皆之を以て命の綱として備へざるはなし、其太さ徑一寸なるあり、二寸なるあり、腕大なるあり、細小なるものには拇指大なるあり、一二人曳きの小舟に在ては、通常拇指大の綱を用ひ、別に急灘を越ゆる時の豫備として、より太き綱を準備せり、大船は通常徑寸の綱を用ひ、別に一二種の太綱を非常用に準備せり、大船は小船の如く沿岸の捷徑をのみ曳き行く能はざるが故に、四五町位の綱の長さを有して臨時之を伸縮するなり、彼等は何の爲めに世間類例を見ざる竹綱を使用するか、之には大に理由あり、第一竹綱は麻綱の如く水に濕ひて重くならず、第二竹綱は麻綱の如く水に入りて腐敗せず、却て强くなりて耐久力を增すものなり、第三竹綱は彈力あるが故に、某所の凸角に懸りたる時、遠方より振りて反れ飛ばすの便あり、川峽の旅客は必ず其兩岸の岬腹巖角に於て、高く低く幾十條となく、鐵軌の如く細く滑かに鑿たれたる溝を目擊するなるべし、之れ礀澗の石を鑿つが如く、何時とはなく竹綱の爲めに印刻せらるゝもの也、

●上風下風

兩岸一帶山岳丘巒を以て土手とせる川峽は、譬へば喇叭の管の屈曲す

るも、吹く息は一貫するが如く、其流域紆餘曲折幾百廻轉するも、吹く風は一端より一端に貫通しつゝあり、されば川峽には東風西風南風北風てふ稱呼なく、一般に單に上風下風と云ふなり、

●世界第一のパノラマ

余は今大膽にも川峽を以て、天下第一の奇觀にして且つ世界第一の大公園なりと斷定するに躊躇せざるべし、淸里一千五百里、行程三十日間、歩々絶景を送迎し、刻々奇觀に應接し、心目常に新にして未だ曾て倦厭を覺へず、誰か敢て耶馬溪の勝を説く者ぞ、此峽中の半日程の境域に過ぎずして、景致を以てすれば峽中の平凡なる個處に比すべきに非ずや、還た誰か敢て御嶽の奇巖を云ふ者ぞ、此峽中を一二時間過ぐる間に迎接する、一二山岳の奇岩怪石にも如かざるに非ずや、世の所謂名勝の區なる者、或は山或は河或は湖或は海に於て、澗谷の景、奇巖の景、瀑布の景、楓樹花木の景、蘆洲鷗汀、白波靑嵐、月光水色、乃至縹渺たる島嶼の景の一二特點を有するのみなるに、此峽江に至ては都て之を一幅中に集めて大成せり、天下廣しと雖も一個の川にして、山と湖と海と兼ねて野趣とを併有するもの、此の如きは還たあらざるべし、川にして山谷の絶景を有すと云ふ、讀者之を疑はざるべし、其湖と海との景を備ふと云ふに至ては疑惑の念を懷くなるべし、然り此の如きの例は天下無二にして惟一なればなり、これ豈天下奇觀中の奇觀に非ずや、これ豈全世界に於て最も偉大なるパノラマに非ずや、此パノラマは到底三十一字の國歌のレンズに入れて撮影すること能はざるなり、粗大なる唐詩のレンズに入るゝ、其映寫する所の影像は朦朧たるを免れざる也、若し其全景を仔細に描寫せんとす、限りある紙幅に於て不可能の事たり、余は昨春其アウトラインを敍し、友人君山を通して雜誌日本人に揭載せしめぬ、讀者如し此大パノラマの一斑を知らんと欲せば、請ふ之を參照せよ、

●地質學の大學校

山谷の間を流るゝの峽江、其深さは兩岸の山の高さに匹敵すと傳へらる、而して增水季の過ぎて減水季に移るや、急流の爲めに洗はれて赤裸々たる山脚を露出すること六十尺乃至一百尺、宛も土砂を去りたる根上り松の肢根を見るが如く、其露出せる地層には、小赤煉瓦を積み上げたる屋壁の如きあり、大煉瓦を積みたる支那の城壁の如きあり、江戸城の石垣の如きあり、大阪城の石垣の如きあり、薄き石板を積み重ねて其側面を現はせる如きあり、幾億萬枚の長き板の側面を揃へて縦に立て掛けたる如きあり、直徑三四尺の材木を高く積み上げたる如きあり、鏡餅の切り口を見るが如きものあり、其他千狀萬態、ありとあらゆる地層の標本の一切を蒐集して陳列せり、眞に之れ地質學者の大學校也、

●三峽の解

宜昌より重慶に到る間全部都て峽形を爲せり、而して世人嘖々三峽を云ふ者、其特に著るしきものを數へて全峽中の代名詞となすに至れる也、然り而して古今三峽の稱一ならず、蜀に三峽あり、楚に三峽あり、全流域を通じての三峽あり、蜀人は巫山峽瞿塘峽銅鑼峽の三となし、楚人は明月峽西陵峽黃牛峽の三を擧げ、其全峽中に通ずる者は黃牛峽巫山

峽瞿塘峽を以て三峽とせり、近時歐米の旅行者は明月峽西陵峽等を總稱して宜昌峽となし、之に巫山峽瞿塘峽を併せて三峽と爲すに至れり、

●四川往復の郵便物

日本より四川に送る郵便物は、在漢口日本郵便局より清國郵便局に轉交し、清國郵便局は汽船にて宜昌迄之を送り、宜昌より以西は人夫をして峽江沿岸と七離七合する羊腸崎嶇の阪路を負擔して行かしむ、故に水の增減風の順逆如何に關せず、二週日乃至二十日にして重慶に達する也、ツマリ東京より重慶迄、郵船出帆期を誤らずに發信したらんには、三十五日内外にして到達すべき也、又重慶より發送するものは一葉の扁舟に搭載し、晝夜兼行して江を下る故に、減水季にても四五日にて宜昌に達する也、而して其舟は每回新造するものにて、一旦宜昌に達すれば二束三文に捨賣りすと云ふ、漢口日本郵便局と清國郵便局と兩々連絡を通じつゝあるも、未だ小包郵便と爲換郵便との路開けざる也、

●川漢鐵路

楊子江の流域一帶を自國の勢力範圍としつゝある英國は、夙に四川の富源に着目して三峽の地に鐵路を布かんことを欲し、從前幾びか測量隊を派遣して其地を討査し、屢次總督に向て其布設權を要求せり、而して一方佛國は若し英國にして川漢鐵路を布設するを得ば、均しく雲南鐵路を成都に迄延張せんものとて總督に迫れり、總督は一び英國に鐵路の利權を與ふる時は、他列國の要求際限なきに至らんことを怒れ、後來都ての要求の根を杜絕せんが爲めに、北京政府の認可を得て、總督府自ら川漢鐵路を布設することを宣言して一時英佛の要求を拒絕したるは一昨年の事なりき、後一年を經て總督府何等の布設する所なきを見るや、英國領事は橫槍を入れて其宣言の虛妄なるを詰り、且つ清人の手にては到底成功せざることを注意せり、總督は退ッ引ならぬハメとなり、周章狼狽して急に總辦を任命し章程を作り資金五千萬兩の鐵路公司を創起せり、之れ昨秋の事にして會た英藏條約の發表せられ、四川人士は英國が今にも西藏より四川に迄鐵路を布設せんかの如く騷ぎ立ちて、大に敵愾心の勃發せる時なれば、異口同音に鐵路布設必要を唱へて總督の發企に賛成したるものゝ、之れ一時の現象にして時日を經るに從ひ其熱度次第に冷却せり、且つ其章程なるもの滑稽極まれるものにして、設計方法を示さず收支豫算を示さず、只御用金的に株金を徵集せんとするものなれば、心ある豪農富商は眉を顰めて逡巡しつゝある有樣なり、されば其成功果して何の時にあるか、將た又再び英國人の手に歸して完成せらるべきもの乎、今得て知るべからざる也、

●峽江と汽船

同じく是れ長江にして宜昌以東には大汽船の通じつゝある間に、其以西の川峽には到底滊船を浮ぶべからざる乎、是れ至大の難問題にして從前幾多の企業家は之を有望に解せんと試みて悉く失敗に終れり、今より殆ど十年前、英人リットル氏パイオニャーと命名せる新造汽船を以て、巴蜀開闢以來破天荒の溯江を企て、幾多の困難と戰つて終に首尾能く重慶に到着し、輪船航行の先驅者たるの名譽を博せり、然れども之れ一時

の試驗的好奇的冒險事業にして、永遠に營業して收支相償ふべき成算あるに非ず、果然、彼は之を重慶に止めたる儘英國政府に賣却せり、英國政府は之を軍艦に變造してウードコックと命名し、四川の警備艦として今尚ほ滬上に駐在せり、其後獨逸商人某々等相謀て定期航江の汽船會社を起したるも、劈頭第一に開航したる汽船崆嶺峽に至て旋渦中に沈沒せり、是より人の汽船航江を企る者なしと雖も、如何にかして汽船を航行せしめんものとの問題は、四川に着目しつゝある事業家の齊しく苦慮する所なり、

●汽船の航行困難なる理由

抑も川峽に汽船を通ずるの困難は何に原因するか、其理由や多々、第一、減水季に新灘與隆灘の如き江心の礁頭出沒しつゝある個處を越へんには、勢ひ水脚極めて淺き小汽船ならざるべからず、水脚淺き小汽船にては、急端激瀨の灘を凌て上るに適當なる馬力の機關を据付る能はず、よしや急灘をば從前の船舶に於けるが如く數百人の苦力の力にて引上ぐべしとするも、斯る少馬力の汽船にては、他の場合に於て狂瀾怒濤及渦旋等を凌ぐこと克はざる也、第二增水季の狂瀾怒濤を凌ぐが爲めに馬力の强大なる大汽船を浮べんか、減水季の灘を越るに適せざるなり、第三以上の難問題を無事に解決して四季共に航行し得る者とするも、下江の際には通常の船にても一瀉千里の速力にて駛行するが故に、溯江の時は兎ら角も下江に於て從來の船舶と競爭して營業する能はざる也、これ汽船航行の困難なる理由の主眼なりとす。

文士生活と書肆（上）

佐々醒雪

日本の文學に二流があるやうに、日本の文士生活には二樣の方法がある。其一つは詩人歌人俳諧師狂歌師乃至は川柳笠附の點者などの類で、その生活、即ちその收入の有樣からいへば、碁や將棋の師匠と同樣に、お弟子の月謝や點删料や選評料が生活の源泉で、その文學上の所産はあまりに簡短な爲に、多くは原稿料の升目にかゝらない。十行二十字何程といふ原稿料ばかりては、よし十萬堂東山の逸吟であつても、發句で飯の喰へるわけがない。從つてこれ等の小さな文學は、多く著作權の目的物にはならないで、例へば雜誌から轉載しようが、聞き傳へて新らしい編纂ものに加へようが、版權侵害の騷ぎが起らないのみか、反つて轉載せられ輯錄せられたのを榮譽としてをるのが常てある。それて、この種の文士は雜誌の募集詩歌選評とか、同人の歌集句集の出版などて、偶々本屋との交涉

があるばかりて、いはゞ本屋の營業とは大關係のない生活である。但し雜誌に提燈を持たせるとか、新作を吹聽させるとかいふことは勿論必要て、時には、散文詩とてもいふのであらう、新作に説明的の詞がきなどを加へたり、餘韻を説明したり、種々の方法て小文學の外目を多くして、原稿料の計算に加はることのあるのは、いはゞ第二種の文士の縄張に切り込むだのである。

このお師匠樣的の文士生活は頗る古くから行はれたことて、二條冷泉の師範家が先祖てあることは申すまでもない、薩摩守忠度が一首の御恩を蒙るまでには俊成卿は定めて尠なからぬ御禮を得たことてあらう、將軍實朝の時代には、お師匠樣の定家卿に種々の書物を送つたのてあらう。爾來、東野州が中興の祖で、歌人連歌師は秘傳奥義の受賣て、大分の儲があつたらしい。現に、玖山公てあつたか、非常に貧乏しても家宰が歌道の傳授を田舍漢に賣らせようとしたのを拒んだといふのて、名高い逸話となつてゐる位てある。この傳授が宗祇宗長肖柏紹巴などを經て松永貞德に至つたのであるから、貞德や其の門下生は尠なからぬ金儲をして、存外立派な生活を營んて居た。この一派が德川期に入つて專らお師匠樣文士て生活した最初のものてあらう。

ちようどこの貞門の全盛時代、明暦寛文の頃が日本の出版界の初めて景氣附いた時て、漢書古典の飜刻は勿論、德川文藝の端緒とも見るべき假名草子俳書の類がぼつ／＼出版せられた。だがまだなか／＼原稿料をとる時代にはならない、假名草子の作者は道樂か主義の爲かて、やはり生活上職業的の文士てはない。お師匠樣連の俳書も弟子どもの醵金て開板したものて、宗匠は弟子から入句料を集めて、其の一部を編輯料にとり、一部を本屋に渡して出版してもらつたにすぎぬ。それより後とても歌人俳人の著書は、いづれも、弟子か保護者かの手て出版せられたもので、近く鈴の屋又は桂園などの歎歌書てすら、原稿料を得たといふ話は聞かぬ。詩文集なども勿論同樣てあらう。(但し、維新前

後には、本居、平田、賴家などでは、藏板の印税が莫大であつた。)ところが、

貞門の俳諧が廢れて、談林風が流行するとともに、其師匠樣であつた俳諧の點者は幇間兼業といふ姿を呈して、稍氣骨があるとか、或は當世に合はないものは、生存競爭の失敗者となり了つた、こゝで新なる生活法の開かれたものが即ち芭蕉の頭陀袋流と、西鶴の浮世草子作者とてあつた。

芭蕉流は久しからずして一變して、許六支考の樣な虛名の競爭となり、或は淡々のやうな驕奢な風ともなつて、所謂る月並點者の發生を促したとゝもに、一方には大雅堂や蕪村や、或は藪前の富豪連のやうに全くの娛樂職業でない慰みとしても流行した。しかしいづれも原稿料取りにはならなかつて、其の生活は書肆の營業と直接の關係はない。

唯、直接の關係が成り立つたのが、西鶴の後繼者である、若し原稿料取りの先祖を尋ねたなら、必ずこの人を指さなければならぬ。(京傳を初とするのは、勿論江戸ばかりの詮議で、京攝を忘れたものだ。)團水や梅園堂は直ちに西鶴の創業を受けたもので、梅園堂が西鶴は本屋に原稿料の借金三百兩を殘して死んだなどゝ記してゐるのは、自分もそれ程借金かしたいと思つたのだらうか、とにかく、多少稿料をとつた證據で、ことに團水の校閲したものなどに、西鶴の名義で出版した僞書のあるのは、利益の爲に著作することの初まつた證據で、文士商賈はこゝに成立したといつてよからう。

これについては、八文字屋自笑と江島屋其磧との爭に、原稿料の證據が歷然と見える。其磧と自笑とが、唯書物の上の名義だけを爭つて分離したといふことも事實らしからぬことゝて、ことに自笑と分離した其磧が、自ら江島屋といふ出版業を初め、失敗するに及んで再び自笑其磧連名の書物を八文字屋から出版した跡を考へて見ると、必ず、利益目題、なほ詳しくいへば、其磧の原稿料問題が主なる爭點であつたことは明々白々であらう。

このごろの稿料といふと、どれほどのものであつたらうか、勿論判然とした材料は存してゐない、(元祿太平記の三百兩を草子六冊の稿料前借金としたのは少し大げさなやうてある)。だが、當時の浮世草子は、美濃紙の本綴に、所々に挿畫を加へたもので、この時代のものとしては頗る贅澤な體裁てあつて、從つて、價も廉くない。一代男一部八冊は、元祿書籍目錄によると銀五匁て、米にして壹斗二三升の値に當る、元祿の生活狀態からいへば、随分大金といはねばならぬ。八文字屋物になつては、製本もやゝお麁末て、價も廉くはなつたが、販路は更に廣くなつた。旣に一代男も江戸に賣り出したのてあるが、八文字屋の評判記となると、江戸の貸本屋が、着荷の先を爭つて買つて行くといふ有樣てあつた。今日に比ぶれは讀書界は狹いが、同種の出版物は一年二三部に限られてゐたから、一たび開板すれば讀書界の大多數に購讀せらるゝといふ譯てあつたらう。とにかく、梅翁随一の高弟が晩年の十年間、俳諧點者を廢して全く作者として暮した(西鶴は晩年に俳書を出さず、且つ十年に二十餘種の草子があるから、まづ全く作者に商買替をしたものと見てよからう)のみか、五十に近い老翁がなほ色酒の香を忘れなかつた所を見ると、(元祿太平記による)其の收入も決して僅少のものてはなかつたと推測してよからう。其磧が自分の著作を出版する爲に、態々江島屋を起したことなども、亦文士繁昌の一證てある。

ところが、京阪がいよ〳〵さびれて、江戸の新開地が繁昌する樣になるとともに、文士生活は一頓挫を來した。これは怪しむに足らないことて、若し明治の東京が薩長土の田舍武士ばかりて成り立つて、西洋の文學思想が輸入せられなかつたとすれば、今日の文士は、恐くは未だ原稿料に衣食することは出來なかつたらう。土臭い田舍漢が、父祖の功名に肩肘張つて、朱子一點張のお講釋に随喜する柳營の下に、文藝の萠芽は容易のことてはない。氣の毒なは元祿の江戸文士て「傾城町の噂、其外、草摺引(小唄か)と申す書物作り候段不屈に付き」といふ判決文て、「書物作り候者」以下

「賣り候者」まで、四人とも牢舎申付けられて、板木製本とも官没といふ次第。天外君や柳浪君などは生れ合せなかつてお仕合せといふべきだ。

讀者は、或は、これより先に近松門左があるではないかといはるゝだらうが、これを洩したのには理由があるので、元祿享保の淨瑠璃作者や狂言作者には、今日の脚本家のやうに、本屋と興行人と兩方から金をとるといふ樣な都合の良いことは出來なかつた。作者は興行人に隷屬した樣な有樣で、近松のもの、並木のものなどが、早くから書入の凪本などになつて、京阪で賣出されて居つたに拘らず、作者は唯興行人に養はれてゐたのみで、本屋からの收入はなかつたものだ。(この書入本は繰や芝居の廣告にもなつたものらしい)。却つてそれの節付をした淨瑠璃語は、多少板權類似の權利をもつて居つて、井上播摩が、知人の井上彌兵衛に床本の寫本を許したとか、宇治加賀が「徒然草」(門左作)の床本を山本九郎兵衛に與へて出版させたとかいふ譚が殘つて居るから、淨瑠璃語は、本屋からお菓子折でも貰つたかもしれないが、作者は關係がない。從つて加賀の正本、義太夫の正本などと稱して、太夫が奧書きをしてをる。(近松の奧書などのあるのは後世の僞板らしい)。だから、門左や出雲や正三などは勿論のこと、享保を經て寶曆になると芝居の繁昌とともに、江戸大阪の狂言作者の中には、稍豐かな生活をなし得るものが多かつたが、皆、本屋とは直接の關係がなかつた。

さて、出版取締規則が苛酷であつた江戸の元祿期にも、既に文藝の萠芽が全くないではない。五代將軍の文藝好きに加ふる、一般の風俗が段々文弱に流れやうとする、一方では漢學者の間にも眞の文人詩人が生れる、古學復興派では萬葉調の歌までが出來る、蕉風は流行する、川柳笠附は湯屋床屋にまで行はれる。流石に田舍漢の都會にも文學趣味がやゝ廣まつて、久しからずして黃表紙、蒟蒻本が成人の手に上るやうになつた。そこで安永天明にはやゝ江戸文士といふべきものもあらはれた。併しながら、就中稚氣を離れた蒟蒻本

てすらが、所謂る十八大通連が通名を賣る廣告機關か、さもなくば氣まぐれ者が文名を得んとする閑事業に過ぎぬ。だから、當時の本屋は大通連、例へば文魚輩の費用をもつて其の腰巾着たる京傳等の著作を上本するか、さもなくば、名もなき氣まぐれ者の所謂る入銀（即ち出版費用、時としては出版費の一部分）を受取つて、いはゞ自費出板の依托販賣をするに過ぎぬのて、若し都合よく賣高が多いとしても、所謂る當り振舞を中の町に開くか、反物の一反も送るに、過ぎぬ。若し自費出版の申込が尠いときは、已を得ず、浮世繪師の少し文才のあるものに書かせる、本屋の主人も書く、時には居候もかく、番頭も書く、隨つて文才のあるものが本屋に重寶がられて、小僧になる、番頭になる、居候をする、だから京傳も馬琴も、近くは魯文なども、本屋の居候をして居つた、春水も本屋の主人てあつた、蔦重や、花久（管理）も自作を公にしたのてあつた。

だから、當時の文士の錚々たるものといつても、先づは幇間を本職として、さらに京傳の小間物屋、三馬の藥屋、馬琴の下駄屋（及び藥屋）などの如き內職があるか、或は種彥などのやうに世祿があるか、さもなくば親兄の脚嚙りで、談林の點者が幇間を內職にしたよりも、更に憐れな有樣であつた。

寬政三年、京傳が禁を犯して黃表本を作つて、初めて蔦重から得た原稿料も、一部一兩の肴代に過ぎぬ。其後、仕懸文庫の大當りがあつても稿料は僅かに三分、其他尠きときは一分二分といふ端た金であつた。これ等は勿論短篇てはあるが、寬政一二年の京傳全盛時代にも、草双紙洒落本を合せて十二三冊しか出版してゐないから、當代隨一の小說家の一年の收入は三四兩位てある。所謂京傳流の吝嗇家にしても、僅かに小遣錢に過ぎなかつたらう。而來傑出した作者が段々に名聲を得るとともに、黃表本は讀本と改まつて、京傳馬琴の作は耕書堂仙鶴堂の獨占に歸したといふ頃には、可なりの收入もあつたらうが、京傳もまだ本職の小間物屋は廢業する運に到らない、一寸、江の島に遊ん

ても書籍を作つて、潤筆料をためこんで歸らねばならぬ有樣であつた。馬琴は就中健筆でもあり、讀者も廣くて、最も評判のよかつた八犬傳は一輯五册について五兩宛の潤筆であつたから、全盛時代には、下谷の同朋町に八十坪ばかりの可なりな家を構へた位であつたが、其の晩年に及んでも、なほ後嗣太郎興邦といふ男が三十俵三人扶持て、鐵砲をかついで日光御社參のお供に加はるのをこの上もなく歎ばねばならなかつた。ことに其の鐵砲は、兎園小説二十卷を女人に買つて貰らつた金で出來たのだと思へば、明治の生若い文士連は、贅澤などがいはれた義理ではあるまい。嘗て篁村翁が、天保に博文館があつたら、我が翁(馬琴)に讀書丸は賣らせなかつたものをと嘆せられたことを聞いた。今更ながら、明治の昭代に感謝すべきは、政治家や軍人のみではなからう。

かういふ有樣が德川氏の文士であつた。だが、本屋ばかりが暴利を得て居つたかといふに、必しもさうではない。蔦重の身上半減などは、自業自得としても、文學書類の出版書肆て家名だけでも今日に存して居るのは數へる程の少數で、馬琴三馬一九などの著作ですら、明治になつてから板權を屆出てたものは、殆んどないといふ次第、ことには、最も賣行のよかつた八犬傳てすらが、板木が諸所に轉賣せられ、遙々江戶大阪の間に運搬せられて、辛つとのことで完成した位だから、まだ本屋には三井も鴻池も乃至は越後屋も白木も出來た例がない。

德川の盛期が旣にかうだ、況や維新の破壞時代にあつては、小說家といふものはお話にもならぬ落魄て、魯文先生ともいはれる人が、大地震の一枚摺に鯰騷動の案文をして、繪草紙屋から稿料を貰ひ「御誂案文認所、江戶作者、鈍亭魯文」の看板を門口に挑けた仕合、條野採菊翁なども、やはりこの中間であつたので、近頃までも、上野の鶯亭の引札樣のものには「採菊山人代つて申す」といふ樣な文章が摺つてある。

怪物傳（四）

覆面冠者

啊呍鉢羅婆

七

啊呍鉢羅婆が、屋内に入つた跡は、馬車の響音に驚かされた目白の通路も、暫らく寂然としたが、啊呍鉢羅婆の屋内も、物の音せず、寥閑として居る。前庭に二三羽の鶏が、松樹の根方に、餌を猟つてゐるのを見ながら、世尊殿は、那の室に入つたてあらうと、當て途なく、空想に耽つてゐたが、暫らくして、屋内に、何やらん、人聲が仕たので、玄關の方に眼を注ぐと、二重外套を着た、でつぷりと太とつた、四十前後の人物が洋服を着た男と立ち竝んて、玄關に出て來たので有る。

何者てあらう、と眼を凝らして見ると、思ひきや、此の世尊の屋敷より現はれた男は、兼て自分の知つてゐる某てあつたので有る。飛び立つ喜悦を以て、余は玄關に進み、世尊に面會を求めた。無論、此の知人に紹介を煩はしたのてある。

八

余は記事の順序として、爰に、余と世尊との中間に立つた知人の人柄を、ちよと讀者に明かして置く。此の某は、嘗ては、新器械の發明者を以て、世間に喧傳された男てあるが、四五年前より、淺草〇〇町に門戸を張り、遊人を相手に高利貸を初めた小怪物。否、確實てあると見れば、如何なる者にも、融通を謀るが、普通の商人や官吏の如きは、危險多しと稱へて、好んて、世人の嫌惡する遊人と親しむのである。そして、此の男に奇とすべきは、他の高利貸のやうに、其の職業を隱蔽せず、昂々然と、高利貸の社會に必要なるよを公言してゐる事て、圖に乘ると、高利貸は衆生濟度の一方便なりなどと、ほざくともあり。現に、自分が、此の男が高利貸を創めたのを知つたのは、此の男自身の口頭からて、然かも二三年前、鐵道馬車て、はたと

邂逅した時に、知つたのである。ヤア、と挨拶濟んで、如何してゐる、と聞くと、四邊關はず、傲然として、

「僕は高利貸を遣つとる」

當時、自分は此の言を聞いて、非常に驚いたのであるが、今、又た、無師の獨覺なりと稱せる、此の新宗敎家の前で出會したのであるから、ます〳〵意外に打たれると共に、自分は、斯くの如き男と接近してゐる、啊呍鉢羅婆其の人の人物に趣味を持つたのである。

九

靑疊を敷き詰めた、十二疊の廣間に案内せられた。……自分は、莊嚴と滑稽とを混淆にした、一種變妙なる感情を懷きながら、案内せらるゝ儘に、靜かに、廣間に通ると、先頃、馬車の裡に、悠然としてゐた白衣の道人は、厚き座布團の上に、床を背後にして、待つてゐる。一疊ばかり隔つて、フロックを着た灰殼男は、火鉢を前にして、控へてゐる。自分は、座に着きて、世尊に對面した。

讀者よ、夢に十一面觀音の現示を得て、豁然として、身を禪定に入れたる啊呍鉢羅婆の風丰は、如何なりしと思へるや――顏を上げて、凝然と世尊の容貌を見た、その途端に、余は、不意と、ラフアエルが畫いた、耶蘇基督の畫を、腦中に浮べたのである、基督と、啊呍鉢羅婆！對照するのは、甚だ不釣合であると、精神の那邊歟に呼く者があるやうにも覺へたが、釣合、不釣合、其樣な杓子定規に頓着なく、坐に着きて、すと見た感情を其の儘、飾らず、詐らず、有體に言へば、啊呍鉢羅鉢の面貌は、如何にも、ラフアエルの基督に、相似て見へたのである。

而して啊呍鉢羅婆の經歷の幾分を知つてゐる自分は、右の如く、基督の容貌を連想して、嚴しき一大宗敎家を彷彿せると同時に、其の威あつて、猛からず、溫和にして、慈愛に富んでゐるやうに見ゆる、此の面貌は、宗敎家と、怪物とを混淆にしてゐるのであらうとつかぬ事に思想は走つたのである。

然かも、言葉を交へて、その音聲を聞くに及んで、ます〳〵啊呍鉢羅婆の特色を知り得たやうに覺へた。

それは、悠然とした風采の中より、靜かに、唇頭に出づる音聲――自分は、音樂が、人間の精神に至大の影響あるを知つてゐると同時に、男性といはず、女性といはず、音聲といふやつが、妙に人心に勢力があるのを認めてゐる、今目前に、啊吆鉢羅婆の唇頭に洩るゝ音聲を耳にして、自分は言ふべからざる美感に打たれたのである。ア、啊吆鉢羅婆が、宗教家として、怪物として、若干の價値を備へてゐるのは、此の風采と、此の音聲てあらう。

即ち、渠の風采は、髪を後邊に垂れて、威嚴を保つてゐると共に、音聲は、そのうらはらに、妙に人心を引着して、幾微を捉へてゐる。そして、その言語は、漠然として、雲を攫むやうて、風を捕ふるやうて、不得要領の極致に至つてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊

右は、啊吆鉢羅婆に會して、心鏡に映じた感想てあるが、親しく、渠と交るに及んで、ますく此の感想を强めた。剛と、柔、風采と音聲とを鹽梅して、之を布教の上に現はしてゐる。渠は、啊吆鉢羅婆としては、宗教界の怪物て有る。併しながら、西田和協としては、人情界の大通て有る。

十

筆を進めて、その前生涯に溯つて見ると、啊吆鉢羅婆の人物が、歴然と、余輩の前に現はれてくる。

前號に、ちらりと、その一端を洩らしたが、渠は、福岡縣は瀨高町の西田縮堂といふ儒者の長男て、幼名は哲といつたやうに聞いて居る、西田縮堂といふと、柳川附近では、ちよつと、知られた朱子派の學者であるが、渠は、幼より、母を失つて、人生の難を嘗め、二十五歳の時に、琉球に渡つて、巡査を奉職した。西村捨三氏を知つたのも、此の琉球に流浪した當時。巡査といふ微職に在りながら、巧に、西村氏に取り入つて、氏の愛顧を受けたが、後に、東京に出てゝ、土木局に入つたのも、西村氏の推選てあつたとか。そして、琉球に流浪してゐたのは、四年ばかりてあつたが、此の間に、西村氏より旅費を得て、南清に渡り、福州に

遊んだこともある。

渠は、斯くの如く、青年時代より、四方に流浪してゐたが、なほ二十歳前後の頃に、肥前の伊萬里に出てゝ、篆刻を學んだやうにも評判されてゐる。いや、その前にも、平戸に遊んで、漢學を研究してゐたのである。同郷者の言に依ると、渠は、少年の頃より、俊才を以て推されてゐたといふが、父の後を追ふて、學者とならず、四方に流浪した結果は、渠をして、人間の心を讀む人情界の大通と爲らしたのは、自然の運命とは言へ、恐くは、渠の父と共に渠の同郷人も、意外とする所であらう。――琉球より、故郷の瀬高町に歸るや、父は、朱子派の學問で固つてゐるにも拘らず、渠は、寳聚寺といふ天台寺に入り、佛典に親んでゐた。

由來、柳川には、蓮門敎の開祖、島村ミツのやうな人物も、出してゐる、息を引き取る迄、政府を罵つて、斬罪に就いた古河十郎の如き、謀叛人も出してゐる。渠は如何なる意思を以て、青年の身に不似合の、老人じみた、陰氣な、抹香臭い、佛弄りを初めたのであるか、その動機は知らぬが、當時、渠と、渠の繼母とは、極めて不仲であつた一事は、大に注意すべき事實であらうと、竊に考へてゐる。

然かも、啊咜鉢羅婆の名を呼ばはつて、社會に現はれた今日、當時其の行末を案じた乃父とは、殆ど絶交の體であるにも拘らず、當時不仲であつた繼母は、渠の最も有力な信仰者と爲つてゐるのが、不思議である。渠は、斯くして、徐々として、今日に至る資格を作つてゐたが、東京に出づるに及んで、渠は走馬燈の如く、幾多の變化に出會したのである。(つゞく)

▲正誤　前號島村抱月氏の愛讀書中、「又小說家では」の以下の文字を「ザングウヰル、コンラッドなどいふ人は、丁度日本の蘆花、春雨などいふ地位の人で、中にもザングウヰルのユーモアなど面白い、其グレー、ウヰック」云々と訂正す



西園寺内閣

鬼谷先生

鬼谷先生の政論、其見識嶄然として時流を抜き、其文章欝然として、一家をなす、此文二月發行の「太陽」に出でたるもの丶數節を抜萃せるもの、西園寺内閣の同情者として其長所美點を説ける所幾んど遺憾なきを覺ふ。

水星と地球との衝突は、久しく推歩せられたるに係らず、終に之を見るに及ばずして、吾等は先づ日露の衝突を見たり。其結果は水星と地球との衝突が、天體に生ずべき變異にも比すべく、火熔石の如き革命は、露國の端より端に流し、海嘯の如き國際的離合は、列國の間に生じ、地震の如き動蕩は我政治社會に起り、其結果として西園寺内閣を醻生す。此内閣は或は政黨内閣なりと稱せられ、或は然らずと稱せられ、或は深く歡迎せられ、或は然らざるも前内閣に比して比較的に安全なりと信ぜらる。其迎へらるゝ所以、一ならずと雖も、概して之を云へば社會は之によりて新時代の曉光曙色が、地平線の彼方より發しつゝあるを認め得たるか如し。之を非難する者も、其朱光中天の勢、遲々として豫期する所に副はざるがために外ならず。何人も之を以て夕陽とし、黄昏とするものあるなし。余は其組織に就て異論あるは世人と同じ。然れども之を歡迎する所以は、また世人に同じく樂天的見解を有するが故に他ならず。

西園寺内閣は之を歡迎する者にも、歡迎せざる者にも、多くは意外の出來事なりしもの丶如し。是れ蓋し西園寺侯が流俗と相競はず、浮響の爲めに惑はされず、久しく閑靜の地に在りしがため、其名節、附熱隨光子のために喧傳せられざるの致す所なりと雖も、政治社會の消息に通ずる者に取りては、必しも意外の事にはあらず。余嘗て三十一年の夏、伊藤侯の後、大宰相たらんものは、西園寺侯なるべしとの觀察を以て、一篇の文章を艸して江湖に質したるに、何等の反響なかりしのみならず、多くの政治家は、殆んど等閑に看過し、二三の政治家が密かに警戒する所ありしに過ぎず。然れども余の觀察は空しからず、三十三年政友會の組織せられて、山縣内閣の去るや『政治社會』は此に初めて、西寺侯をして内閣を組織せしめんとしたれども、彼尚ほ其時期にあらずとなし、伊藤侯を勸誘して起たしめたるもの丶如し。然れども一般の社會は、此等の事には盲聾にして、猶ほ老政治家を云々するにあらずんば、野心家を推立せんと欲したりき。已にして三十四年伊藤内閣の成りし後、久しから

ずして内紛によりて倒るゝや『政治社會』は、また玆に西園寺侯をして内閣を組織せしめんと欲したれども、彼れ猶ほ此の時を以て起つの時にあらずとなし、遂に井上伯の內閣成らんとして流產し、更らに桂伯の內閣を見るに至りしものゝ如し。一般の社會は、此時に於て始めて西園寺侯を以て未來の宰相となすに至りしが、三十六年の秋冬の交、桂內閣が外交の日一日、深遅に陷らんとするを見て、辭職の意を『政治社會』に諷示したるがため、西園寺侯は自然に之に代るべきものと信ぜられしも、彼れ尙ほ冷然として督みる所なかりしがため、人或は彼を以て遂に起つて國鈞を秉るの男氣なきものと信ずるに至り、彼の敵手は、之によりて彼を以て恐るゝに足らずとなし、彼の從遊者は彼を以て『約束の地』に嚮與を導かんとする者にあらずとなして失望せんとしたりき。蓋し彼れの人品、粹然として一世に秀で、文雅を以て高しとなし、風流を以て美となし、自から閑雲野鶴の韻に矜り、また且つ軒冕を輕んじて、功名を卑しむ。此時に方りて天下至極の同情を以て彼を見るも、彼に於て東山の謝安を見るのみ、王猛憤勵の志を見る能はず。故に世人が彼れを以て、淸遠沖淡餘りて、熱心勉勵、或は足らずとなし、之を困しむるに煩を以てし、是に督めしむるに苦を以てせば、飄然として莊周老子の林に返らんとすと信じたるも、また故なきにあらず。然れども今や桂伯が一たび大命を傳ふるや、三たび宰相の印を斥ぞけたる彼は決然として起つて大命を奉じ、前途渺茫、四方暗礁の間に舟を浮べんとす。余は彼が時艱を濟はんとするに急に、成敗利鈍を督みるの暇なくして起ちしか、將た四たび逃避するの結果は、戰勝の餘威を負ふ武斷政治を來たすべきを憂慮して起ちしかを知らず。然れども、何人も望見して逃避すべき此艱難の日に於て起ちし彼の男氣は、以て從來彼に對する世評の、實に違きを說明するに足らんか。

近時の政論、情に任じ氣を使ひ、人を卑しめずんば自から高しとする能はざるものゝ如く、容易に人の美を爲さんとする少なきは嘆息すべき傾向と云はざるべからず。而して此傾向中にありて新人は最も先づ世論の嘲笑非難を受け易し。而して西園寺內閣は割合に新人を用へたりしを以て、世人の物議を招くものゝ如し、然れども余は此點を以て、最も新內閣の長所なりと爲さんと欲す。蓋し世間若し歷制家なるものありとせば、露國の君相にあらずして、人物に對する世論に外ならず。世論は普通平凡の見解を以て人物を鑑識し、此鑑識以外の人物が躍進するを以て大怪事となして攻擊せんと欲す。而して此攻擊も永續せず、攻擊に次で沈默し沈默に次て嘆倘す、從來の歷史凡べて此の如し。此點に於て我國に元老なるものありて、不次の人物を撰拔し、保守にして嫉妬心に富む社會に新人を推薦したるは、頗る世道を益したりと云はざる可らず。世間は大臣の官職を輕蔑すれども、一たび大臣になりし者にあらずんば、其材を知る能はず。世間は人材登庸を論ずれども、自家以外の人材の登庸せらるゝを欲せず。世間は破格の撰拔を論ずれども、新聞記者、政黨より出でしものを嘆美する能はず。世間は人材を必要としながら、動もすれば資目の輕重、閱歷の多少は問はんとす。余はかゝる風尙は因襲

國の末俗にして、興隆飛躍の氣象にあらずとするものなるが故に、西園寺侯が寧ろ材能を閲歴なき新人に取りしを賀せんと欲す。試みに關係に就て一二の品隲を試みんか。松田氏は脫俗の資を以て世故を閲歴し、其言ふ所平淡にして奇なきが如く、時として果斷、人を驚かすものあり、確かに人の長者として最良の資格を有する者と云ふべし。特に其人法制の概念を有し、冷靜にして燥然なし、余は彼を以て司法大臣としては餘ありと信ず。英國の如きは司法大臣を以て貴族院議長を兼ねしめ、其席はウールサックと號し、俸給は總理大臣の上にあり、大臣として最も高き位置なりと信ぜらる。余は我司法大臣の位置は好し此の如くならざるも、彼によりて其過失したる品格威望を回復せんことを期待す。原氏が內務大臣たるは、世人が多く意外とする所なりしと雖も、最も原氏に適當の官職を求むれば、內務大臣にあらずんば即ち大藏大臣たるを意はざるべからず。蓋し原氏は理想家にあらずして、實行家なり、其言行に何等人の耳目を驚すべき色澤香味あるなし。故に世人謬つて輕薄才子となすと雖も、是れ官吏出身者は凡べて輕薄子なりとする一般斷見より生じたる見解に外ならず。余の知る處によれば、彼は最も堅實なる資質を有し、擔當の氣魄を有し、敢爲の男氣あり、威信地に落ち、紀律紊亂したる今日の民政を振肅せしむるには、恰當の人と云はざるべからず。若し貸すに歲月を以てし其人亦包容を勉めんには、恐らくは內務大臣ありて以來の名大臣たるに至らんか。加藤氏の外務大臣に至りては、何人も異論なき所なりと雖も、其人物に至りてはまた深く誤解せられたる一人にして、誤解は三菱氏を姻姑としたる一事より來る。然れども余が親朋より聞く所によれば、彼は富家と婚姻を通ずるを以て、男兒の事にあらずとなして嫌惡し、其先進の極力勸說するによりて、始めて肯諾したるものにして、此一事は彼を累するに足らず、寧ろ彼が昂々然として自立するの男氣あるを彰明するに足ると云ふ。世人若し富家通婚の一事を取り去りて、彼を觀察せば、彼が堅實にして自信に富み、健闘の男あり、時勢を解するの聰明あるを知るに足らんか。彼が外交家としての手腕に至りては、三十三年の冬期より、露國と折衝して遂に撤兵の宣言を發せしめたる一事を見て、之を彷彿するに足らん。此宣言こそ即ち露國が從來の進退を拘束せられたる原因にして、三十七年の日露戰爭の槓杆は此に存在す。若しそれ日英同盟を以て、日本外交の一大成功なりとすることが、適當の見解ならんには、此同盟の底流を作爲したる加藤氏は、また此功名を分つべきものと云はざるべからず。要するに加藤氏の外務大臣は、其過去に於ても、未來に於ても、優に前內閣の外務大臣を超ゆると云ふを得べし。其他坂谷氏は大藏省に於て財政を運用したる實際の大臣たりし者を、今は名實併せて大臣たらしめ、適材を適所に置きし者にして、從來進言參議の地にありしものが、責任擔當の地に立つものなれば、余は其材また之によりて大に伸長すべきを疑はず。齋藤氏の海軍に於けるも、また此の如し。唯だ山縣氏の遞信大臣たるは、世人多く之を疑ふと雖も、大浦氏の爲し得たる所が彼によりて爲し得られざるの理なし、而して操行淸白にして、人物の溫潤なる、大浦氏に駕して上ると云ふべ

し。松岡氏の農商務大臣に至りては、少しく異色なりと雖も、精勵にして吏務に達するの一事は他の各大臣に比して寧ろ優るものあるも劣るものあるべからず。而して以上の各大臣を統率するに、西園寺侯の識量を以てす。余は此内閣が最も統一あり、組織ある事功を舉ぐるものたるを疑はず、然れども以上の各大臣中、其學問、識見、經綸に於て、西園寺侯の親友知己たるもの、果して幾人かある。若し侯にして卒然として屈むべきの事ありとせば、彼は笑を含みて安全として去るを得べきか。余は其必らず然らざるを信ぜんと欲す。夫れ相國補衮の職は、獨り政務を行ふのみにあらず、また實に人材を推挽して陛下に薦め、新舊内閣の更迭あるも、其人に窮せざらしむるにあり。昔は蘇老泉、管仲を論じ、其死に臨みて、豎刁易牙を用ゆべからざるを論じて桓公に告ぐるのみ、之に代るべき宰相を推薦せず、是れ大臣の職分を空うするものにして、後來齊國の禍患、仲實に、其責に當るべきものとなす。是れ宰相事君の大義にして、古今を通じて皆な然りとす。余は此點より觀察して今の内閣が、必しも西園寺侯の素志を盡したるものにあらざるをトせんと欲す。

鐵道官有の論據

『時事新報』

政府部内にては、豫て鐵道官有問題に就て調査中なりしが、其調査も結了し、本期の議會に、官有法案の提出を見る可しとの説あり、戰後財政の整理は現下の大問題にして當局者の財政計畫にては、四十年度以後の財政に確乎たる方針を缺き、姑息なる遣繰算段に依て、一時を彌縫せんとするの事實歴然たるに當り、殊更に鐵道官有の如き難題を提起して、財政の紛糾を甚しからしめんとする理由は何れに在るや、我輩の第一に了解する能はざる所なり、假に日本、山陽、關西、九州、北海道炭礦鐵道等重なる私有線路の買入に着手し、買收價格の標準は風説の如くに之を各會社既往三年間の平均純益の廿倍に求め公債を發行して買收するものとし、公債の發行高を計算するに、右五會社のみにて三億四千萬圓を下らず、而して特許年限滿了以前に私設鐵道を買收するには、會社との合意に出でざる可からざるを以て政府の定めたる買收價格にて、果して協議の成立を期するを得るや否や、鐵道業の如き一種の獨占に屬して、今後ます／＼收益增加の望ある事業の株式を手離して、一方に利子一定し、殊に借換の爲に其低減を免かれざる公債を受取るに當り、鐵道會社の株主が、鐵道株の配當と同額の利子を生ずる公債を受取りて滿足せざるは當然にして、政府が私設鐵道買收に熱心なるだけ、買收價格は自然多きを加へ來り、到底當初豫定の標準に止まらざるとならん今回の戰爭に就て、公債の元金著しく増加したる一事は、當局者の焦慮、已まざる所にして、之を苦に病むの餘り、減債基金法の如き愚策を採用して、急速に其整理を期せんとする次第なるに、一方に鐵道官有の爲めに數億の公債を發行するが如き財政策の矛盾を極むるものに非ずして何ぞや、減債基金法成立の曉には、經常收入の一部は同基金に編入せられ、經常

費の不足に應ずるに八千萬餘圓の公債發行を必要とする、其上に、一時に數億圓の公債發行せらるゝに於ては、公債の實物は市場に氾濫し、減債基金法の下に、政府が買入銷却に、抽籤償還に姑息の策略を施せばとて、時價の下落は必然の勢にして、求めて財政の信用を薄弱にするのみならず、公債政略に依賴して一時を糊塗せんとする政府の財政計畫に一大打擊を與へざるを得ず、官有論者は、辯護して公債時價の下落より生ずる損失は、單に一時の現象のみ、此損失を忍んで一方に年々多額の純益ある鐵道を政府に收用するときは、財政の基礎自ら鞏固なる可しと云はんか、然れども我輩を以て之を見るに政府が鐵道を官營に移したる後、私設鐵道時代と同一の收益を期するは大に誤まれり、鐵道を以て社會公共の機關とするは世間の定論にして、公衆は鐵道に向て運賃の低減設備の改良を要求して已むとなし、私設鐵道にては株主の利益を楯として、或る程度まで斯る要求を拒絕し得べしと雖も、政府に至ては之を拒絕するの理由なし、政府が官有鐵道を利用して國庫の一財源とするに於ては、人民は之を以て運輸交通に對する課税と認め、其不當なるを攻擊するに躊躇せざる可し、斯る非難を排して充分の純益を國庫に收むるは、極めて困難なるを覺悟せざる可からざるのみならず、官業の常として營業の敏活を缺き、營業費の增加を免かれざるに於ては、官有鐵道を將來の一財源に充つるが如き望を繫ぐの價値なしと斷定せざるを得ず、或は鐵道を官有にして政府の財産を增加するときは我財政に對する內外國の信用增進し、今後の公債發行に便利なりとの說あり、彼の戰爭中、外債の擔保に充つる爲め、鐵道官有を唱へたると系統をを同じうするものなれども、一國財政の信用は區々たる官有財産の多寡に依て高低するものに非ず、國の富力豐にして又經常收入の基礎たる租税制度堅固ならんには、自然財政の信用高きに至るは、郵便電信の外何等の官有財産を備へざる英國財政の信用高き其一方に鐵道を始め種々の專賣業に付帶して多額の財産を有する露國財政の信用低きの一事に徴して、疑を挾むの餘地なかる可し、或は鐵道統一を論據として官有の必要を主張するは今回の官有論に伴つて生じたる新說なれども是れ亦取るに足らず、我國の鐵道運輸が統一を缺き所屬の異なる線路の聯絡密接ならざるは當業者の不便を感ずる所に相違なしと雖も一方に英國が私有制度の下に、聯絡上に何等の故障を訴へざるの事實を考ふるときは、聯絡問題と鐵道管理者の問題とは何等の關係を有せず、私有制度の下に於て聯絡の密接を謀るを得るは勿論にして、我國に於て此點に故障あるは、私設會社に對する當局者の措置宜しきを得ざるの證據とも云ふ可けれ、米國の如き鐵道創設の際に、極端なる自由放任主義を取れる爲め、線路は全國到る所に延長したる代りに、聯絡の點に盡さゞるの嫌なきを得ざりしが、現大統領ルーズヴエルト氏は、銳意その改良を期し、鐵道委員會の權限を擴張して、賃率問題と共に聯絡問題を解決せんとしつゝあるの一事を見るも、私有制度の下に運輸の統一を期するの難からざるは明にして、斯る證據を控へながら鐵道を官有に移さゞれば、統一の目的を達する能はざるやに速斷し、財政の破綻を賭して官有を敢てせんとするが如き、無謀も亦

甚だしと評するの外に辭なかる可し、如何なる點より見るも、鐵道官有の不可なるは明白にして、我輩は輿論の勢力を以て、政府をして斯る計畫を斷念せしめ、議會の開期中、斯る提案の說ある爲めに、徒に經濟社會を騒がすが如き失態なからんことを希望するものなり、

思想界の變調

境野哲氏

正否は暫く置き、混亂せる今の思想界に於て、境野氏の此篇又一派の說なるべし、次は其拔萃なり

『日本人』

近時の思想界に、一種の變調を現じつゝありとは、吾輩の久しく感じ居たりし所なり。此の調變は、種々の意義を寓するものにして、道德上、宗教上、看過すべからざるものあるに似たり。蓋し此の變調たる、畢竟思想界の傾向甚しく感情的となり、神經質となり、全く靜に理路を辿るの力を失ひて、終には病的に陷るとなりしなり。想ふに其のこゝに至りし理由と順序とには、自ら摸索し得べき脈路の存するものなくんばあらず。吾輩は今悉く之を說明し盡すこと能はずと雖、若し其の重なる原因を數ふる時は、一は時勢の反動より來り、二は過渡の時代に生せし思想の自由より來り、三は邦人性格の根本問題より來り、四は生活の困難增加の事情は、人をして懊惱苦悶せしむるより來り、五には文學の影響も亦少からざることなるべしと信ず

（一）

知識的敎育は敎育の主腦となり、學問は品性人格の養成を言はずして、先づ「物識り」を造ることを目的としたり。斯くの如き學問萬能、知識至上の潮流は、漸く其の極に達せり、一轉して之が反動を見るに至りしは、また自然の勢と言ふべきなり、

（二）

時勢の進運は、愈物質實利と、學問知識に依賴するに重きを致し、敎育の語出でゝ敎化の意義を失ふに及び、此の時に成長し、形式的敎育の關門を透過し得て、實社會に出でたる學者の頭中には、既に儒敎的感化なし、素より佛敎的感化なし、彼等は科學を知れり法律を解せり、倫理學を學びたり、哲學を研究したり、唯敎育を受けて、敎化を受けざる人の思想ほど自由なるものなし、即ち之を一應の理論に訴へて取るべしとなさば何の論か唱へざらん、何の說か爲さゞらん。思想の自由は言論の亂調を招ぎ、極めて不健全なるニイチエの說も流行したり、殆んど亂暴なるバイロン主義も說かれたり、斯くて病的思想は益昂進せざることを得ず、これ過渡時代に於ける已むべからざる形勢なり。

（三）

吾輩の見る所を以てするに、日本人は元來智的國民にあらず、端坐冥想、深く天地の玄奧を穿つの理論は、日本人の堪ふる所にあらず。之を希臘人に似たりと言はんよりは、之を羅馬人に似たりと言ふべし。プラトーン、アリストテレースの國なるよりも、ストアの强きは羅馬人に適

したるが如く、亦恐くは日本人に適するものならん。而して日本人は之を羅馬人に比するに、なほ一層感情的なり。感情的なるものは、一方に於ては、極めて愛すべき美なる點を有す。而も一方に於ては喜怒哀樂の境に包合せらるゝこと甚しく、最も變化し易きことを表す。一言にして言へば、甚だ單純なり。(中畧)加之、長く一事に從ふの氣力を缺き、初めに甚しく熱中して、後容易に冷却し、所謂飽つぽきも亦感情國民の常なり。上つつらにして飽きつぽき國民はまた珍らし物好にして、其の最も意氣に投合するものは、淺薄にして奇拔なるものに限らる。

(四)

今は實力と運命とのみが自己の生涯を支配する困難の時代となれり。時代の進步と共に發狂者の增加するは、統計の示す所なりと聞く、經濟問題は明に其の一因なり。此の經濟問題の困難は、多くの他の懊惱煩悶の種子となる、家庭の不和は其の主なるものなり。凡そ人の心を苦しめ、其の精神を勞せしむる、家庭の不和より甚しきはなし。心思過勞は神經の過敏を招ぎ、人を驅りて、益淺薄にして、堪へ性のなき感情の人とならしむ。

(五)

いづれにしても、文學の教訓は、小さいと弱いといふ言はゞ女性的傾向を盛ならしめしは疑なしと信ず。女性的はやがて感情的なり。眞正の戀愛は、素より尊重すべきものなれども、道念の伴はざる自由相愛は淫靡なり。淫靡文學と、本能滿足論と、バイロン主義と、蓋しまた好個の三幅對にあらずや。

以上の五項は、未だ決して滿足なるものにあらざるべしと雖も、假りに之を綜合して考ふる時は、學問排斥、倫理排斥、而して形式教育の排斥を標榜せるニイチエ主義の出でたる理由を、説明するに困難ならず、淺薄にして奇拔なる文字の中には、バイロン主義も入れ得ざるにはあらざるべし。科學排斥は神秘主義をも產み出したり。宗教界には超倫理の精神主義も現はれたり。超倫理の理論は、之を是認するを得べしと雖、其の實は感情を基本として、其の他一切を捨てたるものゝ言ひ前なり。感情宗教の極は終に實驗主義となれり。實驗主義、實は實感主義なり。或は神を見たりといひ、或は佛陀に接したりといひ、其の言此に至りては、既に病的なり。しかも斯くの如き思想言論の、多く今日の青年を動しつゝあることは、憂ふべきものありと言はざるを得ざる也。

吾輩は近時自ら神人と稱し、或は佛陀と號し、以て世に誇耀するものゝ漸く多からんとするを傳聞す。これ敢て驚くべきことにあらず。社會生活の苦惱に堪へず、煩悶の難關を透脫せんとして能はざりし思想孱弱なる、所謂神經過敏の青年が種々の事情より喚起せる感情的の風尙に乘じて、益病的傾向に沈まんとするに當り、怪しげなる救世主の出現するは、なほ下層社會に、驗者巫女の勢力あると一般の道理なるべきのみ、これ實に社會の風尙が產出したるものにして、思想の邪路に向ひつゝある兆候なりといふべし。

國文學に於ける外國思想

『國學院雜誌』

鈴木暢幸

古事記神代卷の火遠理の命が、御兄火照命と山海の獵を競ひて鈎を失ひ給へる條に、火遠命が、其の鈎を探さんとて、鹽椎神の敎の如く、海路を行きて綿津見神の宮に至り、其の海神の女、豐玉毘賣と契り、歸るにのぞみて、姫か干滿の寶珠を上りきといふ說話は、印度說話を滿載する佛經典の中に、多くの似よつた譚を有する。勿論、海國の習、海神宮の想像は、決して怪むべき事ではないが、それでも、よく細かい點まで類似があるとすれば、どうも其の間に何等かの關係が無いと斷言する事は出來ない、起世經によるに、須彌上の北、大海水の下に、娑伽羅龍王の宮殿ありと見え 大樓炭經にも同じ趣が見えて居る。次に、華嚴經のうちには、娑竭羅王の宮殿の中に、四つの寶球があつて、能く海内一切の珍寶を生ずるといふ事が見え、又、同經の他の部に、此の龍王の殿中から水が涌きてて、海にはいるが、これに時刻が一定して居る。大海の潮の滿ち干は、これによるものだと書いてある。最後に、法華經の第十二提婆品に

文殊師利曰有二娑竭羅龍王ノ女一年始八歲智慧利根云々、爾時龍女。有二一ノ寶珠一。價直三大千世界。持以上レ佛。佛卽受レ之云々

とある。以上の各說の要點々々をひろつて、記の文に讀み合せて見たらばどうであらう。豐玉姫の、命に奉つた珠は、意に随つて汐を盈欠せしむる寶であるが、龍女の佛に上つた寶珠も、如意といふ寶珠、而も、汐はこの宮の司る所と云つてある。而して法華經は、聖德太子が既に御講義になり、又其の注解も書いて御遺きになつてる位であるから、記の記載せらるゝ頃までには、其の經中の說話の、國民間に行はれなかつたとは斷言する事が出來ない。又、華嚴大乘敎の講說は、奈良朝に及んで始めて行はれたのではあるが、其の經典の傳來は、既に早くにあつたに違のない事は、養老六年十一月の紀に、天皇の追福の爲に、八十華嚴を齊寫せしめなすつた事の見えて居るを以つてもわかるが、此等が、知らず識らずのうちに、說話を注入する媒介者となつた事が考へられないわけでもない。予は此の神話を全然以上の如き佛典より得たものといふのではないが、或は、南印度地方の說話が、一方は佛敎經典のうちに入り、一方は流れ〳〵て古事記の内にはいつたと云ふ、人種的の關係位は、此の間に考へられない事もあるまいではないか。

天台の四敎儀第七に

問曰毘黎耶波羅密云何滿、答曰、若有二大心一如二大施太子一爲二一切衆生一入レ海採レ寶從二龍王一得二如意珠一欲下將還二閻浮一雨二衣服寶物一布中施衆生上海神惜レ珠因二其睡眠一卽盜二取其珠一將還二海宮一太子覺已爲二此珠一故誓以二此身一抒二大海水一令二海乾盡一從二海神一索レ心定不レ懈帝釋諸天感下太子心爲レ物精進不中惜二身命一卽將二諸天助一抒二海水一水遂減レ半海神怖故慚愧還珠

此の本據たる經文は何處にあるか、予はまだ見當らないが、兎に角、此

の傳說が、龍王龍珠に關して、印度に行はれて居たものゝ、精進の意義を明にする方便として、佛者が借用したものたるは疑無い所である。勿論、國民性を異にし、文化の度を同じうせざる點から、全然筋の一致を得る事は出來ないけれども、尙、大施といふ太子が海に入つて寶を採らんとし、龍王に從つて如意珠を得たといふ事が、天孫太子彦火々出見尊の入海受珠と相似たる所があるては無からうか。又、これの珠による海水の乾滿は、かれの粹顧にある身親らの海水乾盡と、附會すればされない事の無いかも知れぬ。

予は此の參考として、支那に於ける龍宮龍珠の事を少しく敍べて見たいと思ふ、それは外でもない。支那に於ける龍宮龍珠の思想も、彼の國固有のものではなくして西南印度地方の說話を輸入したものであるとの考である。もつとも、支那は龍を尊重する國がらである。皇帝は龍を以つて比喩せられ、聖人も往々之に比して敬慕せられて居る。孔子を評してそれ猶龍の如きかと云へるも此の消息を示すものであらう。けれども、この龍は雲氣に乘じ太淸に遊ぶといふ性質の龍で、未だ宮殿を構へ如意珠を藏するといふ大海水底の龍王といふものではない、其の水底に緣ある龍の傳は、外國所傳を輸入し記載した所の山海經以下を以つて始とする。而も、其の記載は

突厥龍首居二弱水中一云々

といふ位の事で、其の外の龍は、皆、神の、騎乘に充てらるゝものであるから、自身神王ではなく、その自ら神たるものは、大抵、龍とは云はれずして、蛇身人頭の者と稱せられて居る。而して其の神の繪なるものは(勿論後世の所畫にはかゝれど、本文の典據によりてせるものなれば、其の大體に於いては、信據するに足るべし)雲龍には似もよらぬ、双頭もしくは數頭の蛇で、甚だよく印度に崇拜し來れる所の龍神に似よつて居る。此に就いて、尙、細論はあるが、略すとして、此の龍が、其の後數百年を經過し來るうちに、西城南海地方との交通が、公私の間に行はれつゝありし結果、漢を過ぎて蜀漢以後の頃となつては、東南海邊の俗間には、明に龍王の宮殿といふものが信ぜらるゝに至つたものらしい。蜀の杜光庭が錄異記の中に

海龍王三宅在二蘇州一東入レ海五六日程小島之前云々船人相傳龍王宮在二其下一矣

海上を跨にかけて東西に富する船人などが、印度南洋の方の說話を、是に持來したものであらう。又同書に、柳子華といふ者の所に、龍女が尋ねて來て、宿命によつて夫婦となると喜び、後に子華は龍宮に入つて仙となり、後に一明珠を留めたいといふ事が見えて居る此の明珠とは、龍王の如意珠を暗に意識して居るのであらうが、まだ明瞭でない。但し、宿命によりて匹偶たりとの三世因果の思想は、この說話の、印度所傳たる事を證明して居る。次に梁の任昉の述異記には

凡珠有龍珠龍所吐者云々越人諺云種千畝木奴不如一龍珠

これも、南海邊の傳ふる所である。又、晉の于寶の搜神記には、隋侯が小蛇の苦るしんで居るのを救うて、もし汝神龍の子ならば、此の恩とし

て我を擁護せよと云つて放した所が、後一小兒の、手に一明珠を捧げて。侯に献じたものがあるを、誰ぞと尋ぬれば、先に救はれし小蛇なりと答へたといふ事が書いてある。此の明珠も、龍珠を意味して居るものなることは明て、且つ、我を擁護せよといふ神龍擁護の思想は、印度思想に外ならぬから、これも西南外國輸入思想の一證である。
と、斯く、龍に深い關係のある支那も、龍宮龍珠の傳說をば、印度南洋の方から輸入したものとなれば、我が國の神話中に存ずる、綿津海神の宮殿、神女、寶珠、等の源泉が、印度南洋地方、もしくは佛敎經典より直接に得たものと考へる事の外に、或はむしろ一度支那に這入つて支那化された龍宮傳說が、一層入り易き性質となりて、わが國に齎らされたものと見ることが出來るかも知れぬ。たゞし、わが國の平安朝後今日までも信ぜられた龍宮傳說は、其の筋、其の相好、ともに確に支那所說のものである。

日本海に對する邦人の活動

『實業之日本』 法學博士 松波仁一郎

日本は永く半身不隨たるべきか

世上戰後の經營と云へば必らず滿韓の經營を說く、滿韓は我百萬將卒の心血を灑ぎたる所、其政治經濟上の關係は近く我國運の消長に渉るものなれば、之が攻究は決して偶爾にあらず。然れども滿韓に對しては論ずべきものは既に論ぜられ、說くべきことも殆ど竭され、今日に於ては只之を實地に施すを必要とするのみ。邦人第一の對外經營として實際に之を行ふべきのみ。吾人は更に眼を轉じて近く日本の中にあるもの若しくは滿韓に讓らざるべき密接の關係を有する新地方に對する施設の調査攻究を必要とし進て之が實行の急を感ずる切なり。特に日露の大戰歇みて互に善隣の交を敦ふすべき今日に於て吾人は一日も之を緩ふするに忍びざるなり。

所謂新地方とは日本海を中心とせる沿岸各地を云ふ。本土の中日本海に面するもの十有一縣、人口亦之に伴ふて本邦の要部を占む。土地と云ひ人口と云ひ將に大に活動すべき資質を有するものなり。而も過去及び現在に於ける同地の發達は如何。從來久しく裏日本と稱せられ太平洋沿岸の諸地に比すれば進步の程度殆ど同日の談にあらざるなり。農業は尙幼稚たるを免れず、工業に至ては福井石川に於ける一の羽二重業を外にして見るべきものを求むべからず。漁業は尙開けず航海は表日本の航路縱橫錯綜するの比にあらず。從て官設の事業も亦表日本を主として裏日本に及ばず。金澤に一ヶの師團設けられありと雖も實業學校の高等なるものなく、特に鐵道交通は最も不完備にして、換言すれば日本海に面する地方は全國中にて殆ど繼兒扱せられつゝあるが如し。

然れども裏日本は永く睡眠的狀態にあるべきものか、日本は永く其本土を半身不隨の狀態に放任すべきものなるか。裏日本は氣候に於て表日

本の温暖和平なるが如くならずと雖も、其土地に產物を藏し富源を收めて、人の大に開發するを待ちつゝあり、今日の裏日本は退嬰躊躇、還て中央に覇を爭はんとするの勇氣を缺けるが如しと雖も、是れ必らずしも彼等の先天的資質として目すべきにあらざるなり。幕末の偉人錢谷五兵衛高田屋嘉兵衛は共に北海に生れ、縱橫に東洋を航行したるものなり。近くは大家七平、廣海仁三郎、右近權衛門等諸氏の如き亦籍を裏日本の僻地に有し、奮鬪努力、今や日本海運界に於ける個人營業者の巨擘たるに至れり。吾人は未だ裏日本人の發達すべき資質を缺けるを發見する能はず、寧ろ彼等が將に力むべき所を努めざるを見る。吾人は彼等が發展すべき方法を求め而して之に向て極力經營すべきを望む。（中略）

從來日本海は一の激浪怒濤の惡海となし海上航行に極めて不利なる海面として目せられ、從て之に注意するもの多からざりしが、事實は大に之と反對せるものあり、對島、津輕、宗谷の三海峽が優に大船巨舶の航行に適するのみならず、浦鹽其他日本海沿岸より北米の或部分を航するものは表日本よりするものに比して距離と時間とを短縮し得る利益あり、更に最近の事實に依れば日本海は或時期に於て北海より新嘉坡に通ずる最短最要の航路たることを發見したりと云ふ、從て從來或航海には適せずとしたる日本海も他日浦鹽の發達と共に世界交通の要樞となり、表日本の發達と共に我海運界の一偉觀たるを失はざるに至るべし。

東洋に於ける浦鹽の地位

浦鹽の將來も亦頗る多望なりと云はざるべからず。平和條約は浦鹽及び沿海州一部の割讓を約する能はざるは吾人の大に遺憾とする所なりと雖も、浦鹽及び日本海の將來と延て我裏日本の開發に關しては必らずしも深く悲むべきにあらざるが如し、始め露國が旅順大連を租借するや、同地を以て東洋に於ける露國海軍の根據地たらしめ、併せて將來歐亞交通の大機關の呑吐口たらしめんと欲し、巨億の資を投じて大規模の經營を開始し。爲めに積年の要港たりし浦鹽は其價値を減じ多少閑却せられたる感なき能はざりき。而も形勢は一變し大連旅順は又露國の有にあらず、浦鹽は宿望たりし不凍港たる能はずと雖も、厖然たる大帝國が太平洋に出でんとすれば此一港海を外にして又他に求むべからざるに至りぬ。八百萬方哩、一億數千萬の民衆は西に不完全にして小規模なるバルチック海を控へ北は即ち積雪凍氷の北氷洋に面するのみ、浦鹽は冬季結氷の缺點なきにあらざるも東方に於て大交通機關の聯絡地としてはた又漠々たる西伯利亞の生產物を輸送する要地として蓋し今後露國の大に力を用ふる所たらずんばあらず。戰勝に乘じ之を我に收めて西伯利亞一帶の地を殺地ならしむるは曾々彼等を發頽せしむるか若くは激發雜を他日に釀さしむる一因たらざるを得ず。之を割讓せしむる能はざりしは惜むべきが如しと雖も、之に依て露國をして東亞の要港として全力を傾けて其設備經營に任せしむるを得べく、遠からずして世界的、少くとも東亞に於ける一大港たらしむるに至るべし。是れ豈に帝國の乘じて以て大に發展すべき好個の舞臺にあらずや。

裏日本發達の生命

日本海の價値は浦鹽をして最も多望ならしめ、浦鹽の多望は日本海の價値をして益々多大ならしむ。日本海の發達は即ち航路の擴張なり。航路の擴張は沿岸の風氣を刷新し、久しからずして沿岸をして其生產力を極度迄發揮するに至らしむべし。從來裏日本の太平洋沿岸に伴ふて進む能はざりしものは交通不便にして文化の輸入せられざるにあり、航海の進步に伴ひ交通の頻繁を得ば產業上の面目一新すべく、鐵道其他の設備も亦必要上表日本に劣らざるに至るべし、現に裏日本到る所として資產家多數なるも彼等は進て之を利用し增殖せんとせず、空しく埋藏せるを以て富力の增進は毫も望むべからざりしなり。文明の風氣一たび入らば彼等も亦其祖先傳來の勇氣を發揮して中原に驅逐するに至るべきなり。若し夫れ北海道、北韓、樺太等に至ては從來交通不便に苦しめる所、交通に依て其利益を增進しつゝある所、他日日本海の利用せらるゝに至らば亦當然の結果として進境に向ふべきは疑ふべきにあらざるなり。

精神病學と社會

『日本人』 醫學博士 吳秀三

法律は精神病者の犯罪を犯罪と認めずして之を不問に置く、而して又精神病者を禁錮するを許し、又市町村が場合によりて之を監督すべきことを命じて居る。然るに不問に附せし危險なる犯罪者を收容する所なくして可なりや、又監置すべきを命じながら監置すべき場所を設けずして可なりや、此の如くにては、法律をば唯體裁丈に制定したるか、又は申譯丈に編輯せしに過ぎずと愚弄さるゝも辯解の辭かなかろう

更に又一考すれば、法律上よりは責任能力（罪責能力）や處分能力（治產能力）は重大なる問題であつて、憲法規定の人權を直に無視する底の大義であるが、是は何によりて其有無を決定さるゝかといふに、是れ一に係つて醫師の鑑定如何にあるのである。然るに國家は法律中に不論罪や禁治產を設定しながら、之が鑑定の任に當るべき醫師に其の必須の學科を敎育せず、又此任に當るべき醫師となるべきものを試驗するに此必須の學科のことを顧みないといふのは、實に嗚呼の沙汰ではあるまいか、之を一向平氣で居る諸役人も人役なれば、一般人民も人民ではないか、而して其當の職責は文部官吏にありと云はなければならぬ。

瘋狂院が國家經營上地方經營上必須不可缺ものなることは、論理上此の如くで、精神病學が之と相俟つて法律上の推論より又治術上の應用を得るが爲めに敎育科目として必須なることも、論理上此の如く一點の疑ふべきことも懸念すべきこともないのである。

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

博士スマイルス原著　文學士竹村修譯述

品性論

全三册　上卷(二月發行)・中卷(三月發行)・下卷(四月發行)

(各册定價金五拾錢・郵税四錢宛)

日露戰爭は終れり、鐵血の戰は終りを告げたり。帝國の地位は俄然世界に重きを爲し、國民は世界に雄飛活動すべき確乎たる立脚地を得たり。これより後我が國家が最大急務となす所のものは、果して何事なるべきぞ。經濟の膨脹にあらず、科學の發展にあらず、軍艦大砲の製造にあらず、唯一の精神修養にあらんのみ。國民の品性にして腐敗墮落せんか、戰勝の美果は槿花一朝の榮に過ぎずして、國家は或は滅亡せん。古の希臘羅馬の末路は即ち其證左にして、支那朝鮮は現時の實例なり。本會曩に社會風敎の爲めに、スマイルス氏の『職分論』『勤儉論』を刊行し、今又其大著述たる『品性論』『自助論』を世に公にす、輙ち現今の我が社會に最も適切なる氏の四大著書を紹介するの大事業を完成したり。スマイルス氏は誠實なる實際的道德論者なり。其所說穩健着實、高遠に過ぎず、卑俗に失せず、世に處するの敎訓これより適切なるものあることなし。品性論の感化力は實に偉大なり、腐敗墮落せる青年が、一たび之を讀みて、飜然前非を悔い、淸新の元氣を奮起し、國家有用の材となりたる者甚だ多しと云ふ。本書は譯筆甚だ平易にして流暢なり。戰後の國民は必ず此書を一讀せざる可からず。戰後の家庭は必ず此の一本を備へざる可からず。世に處し社會に立ち、苟も獨立の生活を營まんと欲する者は必ず本書に依りて其の成功の捷徑を了得すべし。

版元　東京本郷區駒込西片町十番地　內外出版協會


(禁轉載)

雜記帳の一節

露伴迂人

○ウッチャリ拾ひ

世間には隨分いろ〳〵な商賣がある。其の中でもウッチャリ拾ひ位をかしみのある商賣はまあ澤山はあるまい。又世間には隨分さま〳〵な事業もある。が其の中でもウッチャリ拾ひ位豪氣な事業はあるまい。と云つてもウッチャリ拾ひの何たるを知らない人には一寸分るまいが、一ト度實際にウッチャリ拾ひ先生の其の神聖な勞働を仕て居るところを眼にしたならば、如何なる人でも、ア、ウッチャリ拾ひなる哉と歎ぜざるを得まい。予の知り人なる七山生の如きも、今日はじめて予の指さした方向に眼を着けて、而して所謂ウッチャリ拾ひ先生を見て、ア、ウッチャリ拾ひなる哉と歎じたのである。

我等が乘つて居る小舟は今潮の頭に乘つて大川口に向つて歸つて來るのである。丁度夏の初の日の光は、

人をして直接に其の皮膚に受取るにはやゝ熱過ぎるを感ぜしむるほど鮮麗に且つ爽快に輝いて居る午後三時半頃である。併し眉庇の出た帽子を被つて此の生氣の强い――山の頭から海の底までの萬物を生育せしめやうといふ初夏の正直で而して雄壯なやうな日光に曝されながら、小舟の胴の間の梁に片肘を靠せて、毫末も我意の無いグタリとした姿勢になつて兩脚を前へ投げ出し、背中を船舷に寄せて、悠々として四方を見渡しつゝ、時運の流行して景物の日に新に、昨日に今日は雲の樣子も水の色もいよ〱夏めいて來て、やがて「川スゲ」の細葉の靑さに徐と吹く風もゆかしいやうな景色になつて來やうといふ趣きの見えて居るのを味はふといふのは、何とも云へない好い心持である。

予の對ひ側には七山生が矢張り予と同じやうな姿勢をして、同じやうに舷に寄り掛かりながら同じやうに胴梁に片肘持たせて居る。異なるところはたゞ其の肘の右と左との點のみで、冠り物も服裝もおほよそ似て居るのである。見て居る景色も同じである、感想も大概似たものであらう。彼も矢張り初夏の此の晴れ渡つた日の、快い空氣と快い日光と快い氣候との間に抱かれて居るので、母の溫い懷に抱かれた罪の無い赤子のやうな氣になつて、今日の朝からの舟遊びに滿足し切つて而もかく穩かに歸路に就きつゝあるのを悅んで居るのであらう。

上ゲ潮の潮頭に乘つて歸つて來て居るのであるから潮はまだ一向殖えては居ない。ふり反つて見ると沖の方は輕い南風が吹いて居るので、安房上總の山々がボンヤリと薄靑く見えて居るばかり、一體にボーツと霞んで、たゞもう平和と安寧とが、上は半透明的の靑い美しい空から下は紺に近い程濃い靑色の野

したやうに平らかな海までの間を塡め盡して居て、自分等の乘つて居る船の帆さへダルイやうな此の景色に相應すべくダラケ切つて居るのみか、時にはそれどころの段では無い、やゝもすると全くブラリとなつて仕舞つて、船頭等の言葉に「オマンダラ」といふ垂れた旛のやうな形になり勝てあるから、幸に潮が背後から推すから宜いやうなもの、然もなければ船は後へと戻りさうな位の勢てある。

『意久地の無い風だナ。艪て推した方が増なくらゐなもんだ。』

若い船頭は斯樣獨語いたが、矢張煙管を手から放しは仕無いてブカアリブカアリと煙を吹さつゝ、立ちさうにも仕無いのは、先生も其の帆と同樣ダラケ切つて居るのてあらう。實際此樣な長閑な快い睡いやうな日に、誰が小怜悧らしく醉興に働いて、エッサエッサと艪を推すのを好む者があらう。客に叱られぬ限りは、舵柄をチョイチョイ動かす位の事て勤務の方は御免蒙つて、大胡坐喞へ煙管て坐り込んで居る方が何程宜いか知れたものでは無いのてあるもの。

『マア宜いやな、打棄つて置いたつて潮が送つて呉れるのだもの、風だつても少し經ちやあ出て來やうはネ。』

遲牛も淀、速牛も淀、何樣せ一日潰して遊んて居る日曜の事だから、船頭に骨惜みをさせたつて腹の立つ事も無いと、悟りを開いて居る譯ては無いが、此方も宜い心持にダラリと仕て居るのだから、他人も矢張然樣だらうと思つて予は前のやうに云つたのである。そして船頭の居る艫の方を見た次にずつと見渡すと、直鼻の先の芝から愛宕高輪品川鮫洲大森羽田の方まて、陸地の段々に薄くなつて行つて終に水

天の間に消える芝居の書割とても云はうか又パノラマとても云はうか何とも云ひやうの無い自然の書が、今日は取分け色工合好く現れて、毎々の事てはあるが、人をして「平凡の妙」は到る處に在るものてあるといふことを強く感ぜしめるのてある。て、思はず知らずに又洲崎の方を見ると、近い洲崎の遊廓の靑樓の屋根などの異樣な形をしたのが、霞んだ海面の彼方に草紙の畫の龍宮城かなんぞのやうに見えて、それから右手へ續いて飛び〳〵に元八幡の森だの疝氣の稲荷の森だの、ずつと東の端に浮田長島の方の陸地が、まるて中途て斷れても仕て居るやうに點々斷續して見え渡るさまは、天の橋立の景色を夢にても見るやうてある。が、東京百幾萬の人間の中て海へ遊びに出る事を知らずに、塵埃の中て鼻うごめかして怜悧がつて居る人達は、全く此樣いふ好い景色の有る事を知らぬばかりか、有ると云つても眞に仕無いのてある。たゞ少數の人々は之を知つて居るが、知り切つて居るので却てまた珍らしいともせず、何とも思はずに居るのてある。予も知り切つて居る方てあるから今更らしく褒むるても無いが、餘り天氣も好し何も彼も好いので、三拍子四拍子揃つた此の嘉日の佳景に對しては、

『何樣だ七山君、好いぢやあ無いか。』

と云はずには居られなかつた。七山生は予のやうに此邊の景色を知り切つて居るのては無い。しかし自然を愛することは予にも超えて居るのてあるから、

『何樣も實に好うございます。東京のつい鼻の先に斯樣いふ景色が有つて、斯樣いふ美しい感じを與へて呉れやうとは思つて居なかつたのてす。』

と云つて、そして又惚れ〲と四圍を見て居た。

船は遲々としながらも今や川洲の側に沿うて段々と月島近く進んで來た。東京近の海は非常に洲が多い、いや澪筋を除いては恐く洲だと云つても可い程なのだ。東へ寄つては三枚洲出洲相の洲、西へ寄つては天王洲といふやうに、洲だらけなのであるが、川洲といふのは隅田川の吐出しの洲であるから其の名を得たのでもあらうか、一番川口近で、そして水の流れに沿うて長手に出來て居る洲なのである。船はポツーリポツーリと稀疎に立つて居る澪標が示して居るところの澪の中を今のろ〲と溯つて居る。目近へ來た澪標の上には。お定まりの海鷗が止まつて居て白く見えると、又其の傍を飛ぶのもあり、猫のやうな聲を出して鳴くのもあつて、是も亦海の長閑さの景を增す道具の一つになつて居る。

潮がまだ餘計差さぬので、洲の極々高い處は少しばかり背上を見せて居る。其處から殆ど平坦歟と思はれるほどの緩い傾斜を爲して洲は水に沒して居る。さて其の水に沒して居る部の最極端線に澪標の列は在るのであつて、標から此方は急に深い――即ち澪通りなのである。て船は云ふまでも無く澪通りを進んで居るのであるが、予が偶然見ると、洲の見はれ居る部分と澪標との間の、丁度水の深さが膝膕に少し足らぬ位のところに、例のウッチャリ拾ひ先生が例の神聖なる勞働を仕て居るのを見出した。そこで多分此のウッチャリ拾ひ先生の如何なる事をするものだといふ事をも知るまいと思はるゝ七山生をして先生の隨喜讃歎者たらしむべく、予は七山生に先生の偉大なる事業を爲し居らるゝところを指さし示した。

七山生は眼を張つて見たが、たゞ見る一表の人物、乞丐兒の如く狂人の如く、精力未だ盡きざる俊寛の如く、過つて蝦蟇を遺失したる蝦蟇仙人の如く、范雎恨を含んで厠を逃れ出てたるも如是やと思はるゝばかりの、又愍然に又汚穢く、又ミジメに又惡辣なる氣味ある樣子をして水の中で何事か仕て居るので、七山生には合點が行かばこそ、

『あれは何です。』

と先づ問を發して、而して猶自ら眼を凝らして見詰めた。

上は色も正體も分らぬやうになつた、海苔を束ねたとても云ひたいドンザを着て、下部は同じく襤褸の半股引一つ限り、リボンも何も無くなつて仕舞つた、鉢の開いた、孔の明いたお釜帽子の汚いのゝ上から、糞〆めたやうな手拭を帽子の飛ばぬ爲の用意でもあるかスットコ冠りに冠つて、俗に「バイスケ」といふ石炭擔ぎの使ふ笊籬のやうなものを手にし、身後には物を容るゝための箱樣のものを半沈半浮に從へ、そして洲の中でも淸潔な砂の寄るところでは無い、泥淤に交つて汚い汚い塵芥や瓦礫や、へたくた種々の物の流れつく地勢のところを、汚い水をジョボ／＼と音させて歩きながら、此處ぞと思ふところ——即ち何や彼やの流れ着いて居るところ、畢竟猫の屍骸の日を經て沈つたのや、骸骨になりかゝつた狗の頭や、茶碗や德利の缺け損じたのや、齒の折れた馬爪の櫛の反りくりかへつたのや、首が拔けて片脚折れて居る揷頭や、金具と袋と離れ／＼になりかゝつた蝦蟇口や、睾丸火鉢の碎片や、口の無い土瓶や、ブリキの便器や、多分は何かの穢物なるべき正體の得知れぬ油紙包みや、革がブヨ／＼に水膨れに

なつた雪駄や、其他何といふこと無く種々様々の物が或は上を流れて來て此處に沈み、或は中、或は底を流れて來て此處に止つて、居やうといふところを考へて、其處へ彼のバイスケ的のものを突込んで掬ひ上げ得れば、劈頭掬ひ上げるし、重い物などが多ければ猪八戒が持ちさうな馬耙で搔き込んで置いて扨掬ひ上げて、ガザボチャ、ブタヂタと濁波臭浪をしたゝかに起しながら水の中で泥土を淘り漉しながら、拾ひ取つて多少錢かになりさうなものは、何樣な汚いものでも下らないものでも、それこそ眞鍮の鈕扣一つでも齒刷子の古いのでも、何かに又用ひ路の有ると認められるものである以上は去り嫌無く皆拾ひ取るのである。これがウッチャリ拾ひの職業で、其の神聖なる勞働は、空しく海中に棄つて仕舞ふべきものを取り上げて、復び人間の用に供するのである。天の力、地の力、意の力、智の力、技術の力、筋肉の力、此等の尊ぶべき力より生じたものが無茶苦茶に棄てられて仕舞はうとするのを、ドッコイと半途で喰ひ留めて復人間の世のものにするのは、物質と非物質との差違こそあれ、可惜尊い魂魄を懷きながら地獄の搗臼の屑になつて仕舞はうとする凡夫を愍んで、大慈大悲の本願から聖賢權者が泣いたり、笑つたり泥塗れ砂塗れになつて其を喰ひ止め拾ひ取つて、ドッコイ地獄へは遣るまい、本土へ歸れ／＼と大骨折をなさるのと酷く肖て居るのである。かういふわけでウッヤチリ拾ひの稱は、人の打棄つたものを拾ふから起つた稱なのである。百幾萬の人が打棄つたものゝ自然に流れ着くべきところを考へて、これを拾ひ上ぐるといふがウッチャリ拾ひ先生の本願なのである。

『あれはウッチャリ拾ひさ。』

と云つたのを初頭にして、大體の話を仕て七山生に聞かせると、七山生は少からず好奇心を動かして、舟と水とて無ければ、古の人が蝉を取るものに道を問ふたり、瀧川を泳ぐものに敎を受けたりした例に倣つて、ウッチャリ拾ひ先生に近づき接して其の「ウッチャリ拾ひ哲學」を聞かうとするやうの念を起したやうにも見えた。

船は遲々として居る。帆はオマンダラてある。先刻からまだ澪標一ツ越さぬ。ウッチャリ拾ひ先生は頻りに、何か拾つて居る。予等二人は遠目に今拾つたものは何であらう彼であらうと云つて見て居る。先生の水に立つて、從容として『會者は忙せず』に俯仰するさまは、美はしい天や海や暖かい日光や和らかい風やの中に、古昔の逸人畸士を畵にしたかの如くに見えた。特に濡れしよぼたれて居ながら濡れしよぼたれたとも思はぬやうて、汚い事をしながら汚い事をも忘れて、脫然として平氣てガザ、ポチャ、チタ、ブタとやつて居る容態は慥に一種のおもしろいところが有るやうに思へた。

『ウッチャリ拾ひなる哉とは何樣だ、贊成する氣は無いかネ。』

予は七山生に戯れて斯樣云ふと、七山生も戯れて、

『實にウッチャリ拾ひなる哉てす。贊成てす。』

と笑つた。

『ほんとにライオン齒磨で磨いた眞白な豪氣な齒でもつて、親や兄弟の脛骨などをガリ〳〵と咬りながら、演劇改良論や外交論を仕て居るのよりは、ウッチャリ拾ひの方が何程世間の爲になるか知れやしま

せん。』

と七山生がまた付加へた時、船頭は煙管をはたいて、

『あれて馬鹿にならない商賣です、平均五貫以上にやあなるさうですからネ。たまにやあ好いものを拾ひ出す事も有るやうな話ですよ。此邊だの新地廻りだので隨分拾つて居ます。あれも彼男一人ぢやあ無いのですから世間は廣うございますのさネ。市中の方ぢやあ溝渠を攻めて居るのも中々居ますからネ。』

と云ふ。

『左樣さナア、成程溝渠を攻めて居るのも見かけるやうだ。』

と云ふ中潮の募るに連れて風も募つて來て、颯然として快い南風が一ト吹き吹いて來ると、船は忽ちに走り上つた。ウツチヤリ拾ひ先生の姿は見る〳〵小くなつた。

（をはり）

麵包一片

トルストイ作

ちよいん生譯

或る貧亡な百姓が、たゞ一片の麵包を持て、朝飯も食はずに畠に出掛けた。先づ犁を顚覆し、棒を拔

いて、麵包と一所に藪の中に仕舞込んで、其上に上衣を掛けた。仕事に掛かつて居ると、直に腹は餓る、馬は疲れる。で犂を地に措き、馬の馬具を脫いて草を食せるに放してやり、自分は麵包を食ひ、且つ少しく休まんものと藪の所に引返した。上衣を取つた。麵包がない！、あたりをキヨロ〳〵と視廻はした、上衣を隈なく探してもない。持上げて震つてもない。どうしても麵包はない。百姓は驚いた。

『不思議てなんねー、何人も此處へは來ねいだが、――だつて麵包が無ーとこを見るとキツト何人かゞ來たに違いねんだ』と獨言をいふ。

麵包を盜つたものは小鬼であつた。百姓が犂をかへして居る暇に麵包を盜て藪陰に隱れて、百姓がどんなに怒つて、どんな惡言をいひ出すかを聞く氣である。

百姓は萎れた。が思ひ諦めたものと見えて元氣よくいつた。

『あ、よし〳〵、己らあ腹あ餓つたつて、マサカ死にもしねーんだ、盜つた人だつて矢張し欲しかつたから盜たんべえよ、あの麵包で生命拾つたら、却て功德になつたのだ』

で百姓は井戶に行て、水を飮んで、一休して馬をつかまへて馬具を附けて再び仕事を初めた。

小鬼の失望は甚だしい。折角麵包を盜て、百姓を怒らして罪惡に陷さうと計畫んだのに、こんな風では仕方がない。で早速親分の大鬼に相談に出掛けた。

親分の所へ行て、麵包を盜んだ事や、怒らせやうとしたのに反對に、却つて功德だと喜んだ事の一部始終を物語

大鬼は酷く怒つた。

「手前が百姓に負けたのは手前が惡いんだ。手前は餘程の痴者だよ、百姓だの、嬶だのがみんなそんな風であつたら、我等は遣り切れねーぢやないか。これあ其儘にして置かれねー!、今一度其百姓に行て麵包を盜て見ろ。若し三年の中に百姓を怒らして手前が勝て來ねーなら、己らあ神樣の池の中に手前を拋り込んで仕舞ふから。いゝかエ、しつかりやッつけろ!」

との嚴命を下した。神樣の池の中へ拋り込まれて眞人間になる程恐いことはない。小鬼はぶる〱と震へて、是非共失敗を取返さんものと、己が住家なる地の中へ潜り込んだ。

小鬼は首を傾げて熟考に熟考を加へた。とう〱よいことが思ひ附いた。

小鬼は勞働者に身を換へて、彼の貧亡な百姓の家に雇はれた。其翌くる年は日照續が多かつた。て小鬼の雇人は今年は濕地に種蒔するがよいと百姓に勸めた。百姓は其勸告に從つたので、他の百姓共の穀物は日に燒け死んだのに、獨り非常の上作で、十二分の作物を獲た、て一年食ひ通してもまだ〱餘剰があつた。其翌年は山に種蒔をするがよいと勸めた。所が今年は雨降續で、他の百姓どもの穀物は皆雨に打たれて枯れ腐れたが、此百姓のもののみが山に蒔たために非常によく出來た。

こんなに二年も續いて上作であつたので、食つても食つても餘剰て〱仕樣がない。今は餘剰たのをどうしてよいか心配な位だ。

そこで小鬼は穀物を粉にして、ホイスキーといふ酒を作る術を敎へてやつた。百姓は直にそれを作つ

て見て、自分でも飲み、他の百姓どもにも飲ましてやつた。

小鬼は大鬼の所へ出掛て、最う私は百姓に勝ちましたと誇りかにいうた。で大鬼は其眞僞を確かむるべく一所に出て行つた。

大小二匹の鬼は百姓の家に着いた。百姓は五六の客を招いて例のホイスキーを饗應て居るのが見える。所がお酌をして廻つて居る其百姓の妻が、どうした張合か、躓づいて、德利を顚倒した。

百姓は忽ちに激怒して妻を叱り飛ばした。

『おい何をするんだい！、馬鹿奴！これを何だと思つて居るんだ、何たと！、ん、酒は百藥の長だ、泥溝の泥水なんかと一所にされちや、こちとらが大迷惑だー、んーお多福め』

そこで小鬼は稍々得意になつて大鬼の臂のあたりを輕く衝く。

『どうでせう親分、こんな時に誰か麵包を一片盜んで見たら。――』と鼻が些か高くなる。

百姓が惡口をいひ終つて、今度は自分から德利を持つて酌をし初めた。其時に恰度野良仕事から歸つた貧亡百姓が其處を通り掛けた。で招ばれもせぬけれど、疲れては居る、腹は餓つて居る、甘さうに飲むのを見ては堪らなくなつて其處に坐り込んだ。ペロ〳〵と唇を舐つて、どうぞ一杯といひたげにして居る。主人の百姓は見て見ぬ振で、杯などは献しはせぬ。のみならず聞えよがしに口の中で呟いた。『折角作つたホイスキーを見ず知らずの百姓共みんなに所望された日にや堪らねーや』

これが甚く大鬼の氣に入つたが、小鬼は一層得意になつて『これからだ、最う少しお待なさい、今面

白いことが始まりますぞ』といふた。

客來の百姓共はぐい〳〵と飲んで居る。主人の百姓も負けずと飲む。て漸次とお互に愛嬌を振り蒔く。油のやうな滑らかな僞りや、諂が續々として唇を洩る〻。

大鬼は耳を聳て〻聞き惚れて居る。聞けば聞く程面白くなつて小鬼を非常に褒むる。

『お酒を飲んで、こんなに諂諛をいつたり、虚言を喋舌出す樣になれば、もうこつちの手のものだな。手前なか〳〵甘くやつたよ。』

『まアもう少しお待ちなさいよ、どうして〳〵これがホンノ序幕といふものでげすな。もう少し醉の廻るのを御覽なさい、今は狐のやうに尾を掉つたり、虚言を吐いたりして居りませう、直ぐに狼の樣に亂暴殘酷になる幕が開きますよ』というて小鬼はます〳〵得意になる。百姓共はお代りの德利を又飲み干した。話聲がます〳〵高く、ます〳〵荒くなる。油のやうに滑かであつた言葉が漸次喧嘩口調になつて、惡口が次第に殖ゑて來る、と思ふと互に怒り初めて、飛び懸つて擲り合を初めるといふ騷ぎになつた。主人の百姓も客の一人と口論して擲られた。

大鬼は益々笑壺に入つた。『面白い〳〵、實に面白い。』と頻りに褒める。が小鬼はなにこれしきの事がといふ顏をして見せる。『もう少しお待ちなさいよ。まだ一幕ありますからお急ぎなく願ひたいものですな。もう少し醉拂ひますとまた變化するところは妙ですよ。今は狼のやうに怒つて居ませう。あれが今度は豚のやうに寐轉ぶ所はお慰みてすよ。』と喋々と唇を叩く。

百姓共は又もやお代りの德利に取り附く。際限もなく飲み續ける。とう〳〵たわいなく泥醉して、叫ぶやら怒鳴やら、各自解し兼ねる言葉を喋舌り續ける。

其中に百姓共は早や坐を立ち上つて家路に就いた。街上に出ても一人又は二人連に喚いてぶら〳〵して居る。主人の百姓は客の歸るのを送らうと家外に出たが、蹌踉して泥溝に落こつて淤泥まぶれになつて豚のやうぶん〳〵鼻を鳴らす。

此一幕の光景は無限に大鬼を喜ばした。

「お前はなか〳〵よい飮物を作らゑたわい。お前はこれで麵包の復讐をしたといふものだ。お前の好きな程麵包を食うてもいゝのだよ。――然しどうしてこんな甘いものを作らゑたんだ?、おい知らして吳れよ、己等にも。なんだらう、キツトお前はあの中に先づ狐の血を入れたらう。あんなに狐のやうに虛言ばつかし言つて居たからな。――それから狼の血を入れたらう、あんなに殘酷になつた所を見るとな。――夫れから一番最後には豚の血を入れたに違いねーんだ、てなけれやあんなに寐轉ぶ筈はねーからな。」

『それや違ひますよ。そんなものは一つも入れないんですよ。私のやつたたゞ一つの秘傳はね、親分。あの百姓の入用なよりも餘分の麵包を吳れてやつたことなんですよ。人間の胸には初めつから動物の血をタンと持て居ますよ、然し働らいて自分の食物を得る間はそれがよく現はれませんが、少しても餘分のものが出來て來ると其血がぶく〳〵と湧き上がりますよ。初めに貧乏な中はたゞ一片の麵包までも喜

んて人に分けたが、餘分の麵包が出來ると、どうして快樂を買ふかと考へ初める。だから私は百姓に快樂を得ること――ホイスキーを飲むことを教へました。て百姓が天道樣の惠物を自分の快樂の爲めに變へやうと考へ出すと、其時直ぐに狐や狽や豚の血が湧き返へるのです。だから人間は酒を飲むのを止めない中は動物の境界を脫がれないんですよ。』

大鬼はひどく小鬼を賞めた、麵包一片に失敗た罪を許して其小鬼を夥伴の首領に推した。（をはり）

鶲の歌

薄田泣菫

一

うべこそ來しか、小林の
法師兒鶲、――
そのかみ、(國に風雅男の代にかもあらめ、)
豊の明の小忌ごろも、童男のほとり、
日蔭蔓や曳きかへる木の下路に、
葉染の姫に見ぞ婚ひて、生れにし汝、
黃櫨のうは葉はくれなゐに、
また榛實の虛の實は根に落ち鳴りて、
常少女なる母宮の代としもなれば、
すずろありきや許されて、
さこそは、獨り野木の枝に、
占問ひ顏にたゝずみて、
初祖の人や待ちつらめ。

二

ひと歲なりき、
春日の宮の使ひ姫、秋ふた毛して、

竹柏の樹の間をゆきかへる小春日和を、
都ほとりの秋篠や、
『香の清水』は水錆びてし古きみ寺の、
頽廢堂の奥ぶかに、
技藝天女の御像の天つ大御身、
玉としにほふ面ざしに、
遠つ御國の常世邊ぞ、
あくがれ入りし歸るさを、
ふとこそ、荒れし夕庭の朽木の枝に、
汝が靜歌を聞きすまし、
心あがりのわが絃に、
さは緒合せにゆらぐ音の歌ぬしこそは、
うべ睦魂の友としも、
思ひそめしか。

三

また一とせは神無月、
日ぞ忍び音に時雨てし深草小野の、
柿の上枝に熟み殘る美し木醂、
入日に濡れて面はゆに紅らむゆふべ、
そぞろあるきの往くすがら、
竹の葉山の雨滴りはらめく路に、
汝をひとり、黄鶲の
默の俯居をかいまみて、
ありし掛想のまれ人の
化か、雨じめる野に薫る物のかをりに、
そのかみの夜や思ひいでて、
涙眼に禽は嘆くやと、
思ひ恍けにき。

四

ああ汝こそ、小林の
法師兒鶲、――人の世の往くさ來るさに、
兎もすればまためぐり會ふ魂合へる子や、
實にいささめの縁ながら空華にはあらじ、
わが魂の小野にして、

『努力』の濕ひ、『思慧』の景、おほし齋きて、
さて咲きぬべき珍の花、
そのうら若き芽みこそ、
さは龕の戸と噤みつれ、
まだき滴る言の葉の美しにほひは、
生命の火をも齋ふまて、
香にほのめきぬ。

江林

しろがねの角冠、
あえかなる月代や、
まなざしは、天つ阿摩の、
慈悲とこそ滴れ。

水錆の香くゆる夜を、
江ばやしのたたずまひ、
寂しらや、齋居精進、
樹々の息しのびに。

蝙蝠はうつぼ木に、
瞑か味嘗むる。
まよはしの羽搏絶えて、
しめらへる樹の間や。

葉の一片つぶやき、
二片またささやく。
ありし日の榮や、さこそ
鷺脚に落つらし。

あな解脱、——さばかりの
嚴の夜の氣深さに、
ともすれば、女が吐息の
なよびもぞ仄見る。

小禽を憐む歌

吉野臥城

金の冠に花髻華の
夕日殘んの光榮なげて、
雲路たゆたふ末枯野や、
死の影のごと立つ塔の
背より來る風時雨。

國を異にし住める子が
うら寂しさに、郷戀ふる
涙面あげて仰ぐ空、
秋の木の葉の飄り、
飄りゆく群小鳥。

冷たき森に棲み詫びて、
花温けき雲の外の
境へいそぐわたり鳥、
羽向のきほひ勁がれや、
かしらを塔に打ちあつる。

嗚呼あこがれの柔胸に、
見ぬ樂しみを描きつる
一日の夢を夢として、
群に離り、塔のもと——
土の褥をまくらしぬ。

花にそむきて遠の國、
椰子の月夜の露に濡れ、
身を横へし沙尼が手に
常花ささげ、ありし世の
戀を尋ねむ子もあらば。

薄氷わたる鶺鴒の
雌雄の睦びをかなしみて、

銃投げ棄てむ子もあらば、
ひとの情の美しき
ほまれは神を泣かしめむ。

若き血汐の冷え果てし、
小禽を胸にかひ抱き、
金に冠に花髻華の
夕日薄れて、風時雨――
涙に暮るるえ堪へぬ思ひ。

短詩

○
溪を踊み藥を採りて、歸り來る
あららぎやまち黃昏れぬ、
戸に倚りて待つ白髮のひと。

○
愛戀に生命惜まぬ近松が
劇の女性とかたらひて、
涙を落す春の人かな。

○
若うして愁を知りぬ、深窓に
小琴を抱きなげきては、
海士が少女の幸羨む身。

○
忍び出て野の人に倚る霧の家、
「千年牢獄の憂き戀を、
一夜活きむ。」と、泣く王女かな。

○
天華吐く扉の龍に陽炎の
遊戯うつくし春の大寺

○
慈悲の手に餓鬼に追はるる人捲くと
師走霸する雪の街かな

○
春の白日孔雀尾開く燦爛の

まぼろしに醉ふ一人とおもへ

○

億劫の迷妄やぶる慈相して
　金色雲を出るあさ日かな

○

純潔は花白百合の常少女
　香の甕いだきほほゑみにけり

○

こがらしのとろ凪夕日赫灼と
　大寂靜に歸す心かな

○

恒沙照る金華彩雲彌陀笑むと
　湖の夕日を西へ行く舟

歌

尾上柴舟選

小川眞清

わがおもひ吹かむ笛をと竹むらに竹えらみ居れば鶯なきぬ

月に湧くたかきうしほのその底によき世あらばと思ふことあり

枯れつゝも小草がのこす功績みよちひさき殼に實は乾きたり

おん袖に朝かげふせぎつみもなき胸もりますか夢のおん神

ゆるされぬ戀にいかりて冬の皇子の秋姫襲ふおとか木がらし

秋姫の斷れ緒の小琴いだきつつ泣きます涙時雨と降りぬ

雪寒うともしをぐらきやれ窓に詩卷ふせて人戀ふる夜や

詩の國のうましあめつち幸にみちてものみなはゆる初日子の影

さらにまた憂愁(うれひ)の巻を繰らん身に初日の影よあゝ何の榮(はえ)

吉岡夕舟

舞姫が願かけすみてかへりゆく清水堂の糸ざくらかな

金の籠(こ)に白梅ちるやよき姫のおん名よびつゝ鸚鵡は死にぬ

むらさきの霞の夜具にうまいする山々さめよ春の皷に

まどろめば君が瞳は矢のごとく我胸を射ぬ苦しき夜かな

君みれば我發心の危くもまよひそめける若き尼の身

名も知らぬ草もわれもし山に死なば黑百合となり君をのろはむ

上村萩江

野の川の夕日に立てばおもいづる夢ときゝにしくさ笛のこゑ

塚田擣衣子

おもむろに鐘(かね)なりいてゝなんとなう母墓はしきこの春のくれ

鐘のおとのとほくうするゝ春の宵朱欄柳の雨しづかなり

河野素陽

白鳥の西へととびて天雲は浪のやうにも帆をまく日かな

佐久間霧江

うたはしらずたゞ素湯(さゆ)一つ呑みに行くとすねたる文は山のひとりに

苦吟五首興はまだ來ぬいきどほり魔ありひそむと筆折りて見る

秋風はもゆる淺間をしづかなる千曲をこえて離愁の袖に

みづからは戀せじ人は戀ひもせよの君驕慢の子ならば子なれ

君が胸はとはに底なる淵の石あたたかきもの知らでも行くか

あけがたを二人はもだしわかれたり露につめたき秋風の路

ひとときなばつらきわかれの涙もとたゆたひながら搔くあけの鐘

若麻績長風

藍玉と空はてれどもきさらぎや雪衣ぬがぬ信の山かな

金堂や軒はつらゝの瑤珞と寒月てるよ飛鳥大寺

山の日や秋風しろき戸によりて母の名よべば鐘聞えくる

きみが家は青柳おほき水の里舟して行けば白鳥より來

雪姫の來べき宵よとすかされてむかしはいねし雪の故郷

むらさきの雲にまかれて白蓮の夢のやうなる花の國見し

遠鳴りの海のおととも聞かれつゝ夜毎つのるよ山の木枯

くれ竹に雪するあさをさゝ鳴きのうぐひす飼ふよ山の尼君

きさらぎや信濃をとめは參宮のよそほひすれど梅蕾固うして

金門に紅霞流れて朝あけの太平洋はよき春の風

芹

繞石選

芹を摘む十歩に立ちぬ麥鶉　初聲
水絶へず流れて芹の澤邊かな　同
踏み込めば水ふつ〳〵と芹田哉　同
芹摘に田鼠の穴や踏まれけり　同
花芹に目高の群やさゝ流れ　同
殘雪の嶺映りけり芹の水　同
水よどむ溝の崩れや芹のたけ　同
蘆の洲に鴨下り居るや芹の水　蓜人
芹引けば小き魚のにげ走りぬ　舟外
平桶に水いさゝかや芹を賣る　可睡子
散策の根芹を摘んで戻りけり　方外
芹摘むや妹に籠をもたせつゝ　掬水
田の中の寺や日蔭の芹の水　挑村
我が庵や裏戸出づれば田芹あり　松露
小田の芹雪解の水に沈みけり　冷雨
芹摘やぬぎすてゝある女下駄　壺天
芹摘に湯治の客をさそひけり　嵩雪
小松野に續く水田や芹の花　仙外
芹摘むや切れ紙鳶近く落ち來る　黄村

散策に出づればそこら溝の芹　之子
日に踈き厩のあなた芹田かな　同
芹賣の京に出る日や春の雪　四緑
さゝ流れ流れもあへぬ根芹かな　同
芹の田や敗地の杭の打たれけり　樵風
水古き寺田の芹や一二寸　同
まゝ事や大きな芹は捨てられぬ　同
芹賣や脛に短き山脚絆　石羊子
浮草を向ふへのけて根芹かな　同
芹賣に犬の子呉れてしまひけり　同
芹摘や鎮守の森を抜けて田へ　鳳梧桐
鷺下りて雨のはれ行く芹田かな　同
亂杭に芹のより屑かゝりけり　同
芹ひけばころげ落ちたる田螺哉　箏子
芹摘や裏戸を出てゝ閑田の隅　同
淡雪や門田に芹の青き見ゆ　同
芹摘んで雛の其日遊びけり　三餘
芹の澤投網の泥をそゝぎけり　同
里近く鳴く雉子寒し芹を摘む　同
水底や春まだ寒き芹二葉　碧子
春寒き芹雑炊や艸の宿　同

芹浸す漂母が鍋や煠けたり　同
芹摘んで田螺もとつて戻りけり　夏柳
鴨の猶妹は根芹を摘みに出し　同
芹つむや野橋の下に日落つる　同
鳴子縄芹田の水に腐りけり　華水
下駄さげて芹摘む子等やさゝ流れ　同
籠の目を根芹の白き下りけり　同
降り出ての水の朧や芹の花　蝶衣
大徳の病閑なり根芹つむ　同
酒酌むや芹田の人を鷺と見て　同
芹の溝田中の寺へ道斜　同
芹摘めば暮るゝ遠野の煙哉　同
廢園や蛙も棲める芹の水　同
芹つむや湖の白帆の見ゆる野路　同

四月分課題　籠(春)　三月十五日限
五月分課題　桶(夏)　四月十五日限

應募俳句は東京市本郷區駒込蓬町大谷正信宛

川柳　三面子選

盲ジウと云ふジウ類は靜なり　岐阜　四山
議員には十八億も屁のごとし　仝　仝
交番所かついてにげる樣に出來　仝　仝
お茶でもは何にも出さぬ下ごゝろ　本郷　星爛
リボン以來バラは机の隅に咲き　仝　仝
チリンダア葬禮の帽と思つて居　仝　仝
聖賢の涸を飲み拔く生ビール　桐生　凡夫子
燒酎に虚空を歩く空ぐるま　仝　仝
フロッコート動ともすると演說し　仝　仝
政事家になつて田地が五反減り　牛込　小裴
當選の暮にバッチをよしにする　仝　仝
園遊會さて飮む程に喰ふ程に　仝　仝
貧乏をするがコンモンセンスなり　凡水居
鬼は外福は債劵質に置き　仝
University extentionゥンにや新橋ステーション　仝
雪の道いさましそうな顏ばかり　下谷　丁東
不用本今日はなさけの役に立ち　仝　仝
發起人聞けば東北生れなり　仝　仝
新夫婦取りあひをして炭をつぎ　大阪　三樂

動物園みたいだと下女影で云ひ　血達摩
名譽の戰死悄然と還つて來　仝
戰爭でソシアリズムも屛息し　仝
氣障な奴復らせたらば留守と云へ　仝
挨拶はあとでと無理に席に上げ　仝
恤兵の飢饉のとバザアかつぎ出し　仝
內外の新著大抵ツンドクし　仝
序文だけ讀んで批評家批評する　半面子
〇〇て西鶴ものゝ骨が拔け　仝
本よりはレースの栞大切なり　仝
土佐日記水浴の場はぬいてある　仝
新體詩同じ患者が讀んでやる　仝
御進詠ヅラリトならぶ五十鈴川　仝
拂下げ兎角北海道でもめ　仝
下讀みが足らず講義を引延ばし　仝
試驗前三日にみんな讀む氣なり　三面子
其以來神經衰弱が急に殖へ　仝
大臣に成る氣にしては不精なり　仝
國の父母球の代とは氣が附かず　仝
學生の方があたまは光るなり　仝
客の式部內裏お婢女と思召し　仝

内裏様だけに膳部をまゐらせる　仝

投吟者の多き割合に佳句少し、今後とても捨つべきは遠慮なく捨つれど數あれば自然佳句も增加する道理なればドシ／＼御投吟を願ふと選者恐る／＼申す

四月分題　自殺、日月星辰、花(何でも)

▲川柳投句規則

一　一人何句にても差支なし
一　二句以下は葉書にてもよし、二句以上は封書にすべし
一　字體を明瞭に認むべし
一　封筒には『中央公論川柳』と朱書すべし
一　毎月十五日〆切の事
一　反省社宛の事

豫告

次號の文藝欄が如何に絢爛の美を極むるかは卷頭に於ける『陽春號』廣告を見るべし

我が財政の前途

萬朝報社編輯局にて　圓城寺清

吾人は我が國民の富力を悲觀せず、隨ひて又必らずしも我が財政の前途を悲觀するものにあらず、然れども現政府の計畫のごとくにして進行せば、吾人は之を悲觀せざらんと欲するも得ず

現政府の財政計畫は、遠慮なく言へば粗漫を極む、姑息を極む、毫も先見あるなし、お先き眞暗也、一寸先きは闇也、行き當りバツタリ也、ホンの間に合せ也、斯くの如きは或は眼前の一年を糊塗し得べし、次年度

以降を糊塗し得べからず、困難や、破綻や、踵を回さずして到らん、誰れか之を見て其の前途を悲觀せざらんと欲するも得んや

本期議會に提出せられたる歳計豫算は、時局に關係するもの及び時局に關係なき通常歳計を通して殆んと十億圓の多きに達す、其の内、當時軍事費追加豫算として要求せられたる四億五千餘萬圓、卅八年度總豫算追加第一號として提出せられ、臨時事件豫備費の不足を補ふ爲めに要求せられたる七百二十萬圓、及び卅八年度總豫算追加第二として提出せられ、國債の借換償還に充てんが爲めに要求せられたる四千三百餘萬圓は、孰れも一時限りの經費にして、時局の終了と共に自然に其の必要を消滅し、永く後年度に繼續すべき費目にあらざるを以て、次年度以降に於て再たび之れが財源を求むるの要なきも、十億圓に近き歳計豫算中、是等の諸費目に伴ふ豫算額を差引きたる殘額は、大概、時局に關係なき通常歳計、若くは時局の結果として避くべからざる諸般の經費に屬するを以て、依然之を後年度に繼續し、永く之が財源を調達せざるべからざる必要あるは論を待たず、之を反言すれば本期議會に提出せられたる歳計豫算の總額中、其の一半乃ち約五億圓は直接、時局に關係あるものにして、時局の終了と共に自然に其の必要を消滅すべき一時限りの經費なるも、殘れる他の一半、乃ち

（甲） 時局に關係なき通常歳計、約二億三千五百萬圓

（乙） 時局の結果として避くべからざる經常諸費

（一）國債償還基金、一億一千萬圓（二）陸軍々事費増加、一千萬圓（三）海軍々事費増加、四百三十九萬圓（四）恩給年金及び賑恤金、三千二百萬圓（五）韓國滿洲及樺太郵便電信事務費、二百十七萬圓（六）徵稅費其他、一千四百八十四萬圓、以上六項合計、一億七千三百餘萬圓

（丙） 時局の結果として避くべからざる臨時諸費

（一）陸軍滿韓派遣部隊諸費、二千萬圓（二）陸軍復舊費、二千五百萬圓（三）海軍復舊費其他、二千七百三

十萬圓（四）勳章勳記製造及び公債證書製造發行諸費、六百八十餘萬圓（五）韓國統監府及び理事廳經費、百十八萬圓（六）煙草製造專賣創業費及び鹽專賣施行準備費其他各省諸費、四百餘萬圓、以上六項合計、八千四百餘萬圓

の三種を通じて約五億圓は、少くとも今後六七年に涉りて毎年其財源を調達せざるべからざるもの也、而して以上の三種中（丙）に屬するものは、臨時費として要求せられたるを以て一時限りの經費なるがごとき觀あるも、實は然らず、各項の經費孰れも殆んど經常の性質を有し、少くとも今後六七年は之を繼續すべきも、なるのみならず、陸海軍の要求のごときは單に戰役の爲めに消耗したる損害の補足復舊に止まり、永遠の將來に對する新計畫は未だ案定せらるゝに至らずと稱せらるゝのみならず、新たに我が勢力圏內に入りたる滿洲、韓國及び樺太に於ける諸經營、並に戰後實業の奬勵其他に要する經費は、計畫未定の爲め未だ毫も之を計上するに至らずと言ふに出り、次年度以降の經費は以上の計算よりも更に著しく增加するやも知るべからず。而して之に對する確實の財源として數へらるゝものは

（甲）經常、臨時を通じたる從來の歲入、約二億五千萬圓

（乙）戰時稅を一の改廢なしに之を繼續するとするも、之に依りて得る所の收入總額、約一億六千萬圓

（丙）外に不用官有物拂下代及び前年度剩餘金等の收入ありとし、其の總額、約一千萬圓

に達すとするも、三種を通じて約四億二千萬圓に過ぎず、之を次年度以降に於ける歲出の概算額約五億圓に比すれば實に八千萬圓內外の差違あり、其の差違は直ちに歲計上の不足として現はれんとす、是れ本期議會に提出せられたる歲計豫算を閱するもの丶、一見、直ちに豫測し得て深く憂ひと爲す所也

然るに現政府は之れに對して何等の成案を有せざる也、之を如何せんとするやとの問に對して答ふる所なき也、答ふる所を知らざる也、嗚呼、是れ先見なきの甚

だしきもの也、所謂お先き眞ッ暗也、一寸先きは闇也、行き當りバッタリ也、ホンの間に合せ也、粗漫にあらずして何ぞや、姑息にあらずして何ぞや、斯くの如くにして進行す、我が財政の前途は所謂借金政略の深淵に陥り、回すべからざる困難、破綻を醸すの外なきのみ、如何なる樂天主義者を以てするも、現政府の財政計畫を見て其の前途を悲觀せざるものあらんや、獨り現政府者、之を是れ慮からず、一の無用なる減債基金制を提げて永く戰後財政の調理を遂げ得たりと爲す、事の本末輕重を解せざるものにして寧ろ滑稽の極と言ふべきのみ

思想界私觀

默　笑　子

宗教界近時何ぞ新旗幟の多きや、新人物の多きや、曰く宮崎某、曰く末廣某、而して綱島梁川氏、而して伊藤證信氏、之に對する世論亦紛々、此等の靈出を以て明治思潮の病的現象なりとして、悲觀の眉を蹙むるものあり、思想の進歩、靈的要求の精深よりして來るとなし更に宗教的偉人降下の豫表として樂觀の眼を圓(つぶらか)ならしむるものあり、吾人は實に後者に與せんかな、何となれば吾人に畏怖心あり、繊々五尺の身、眇たる滄海の一粟を以て、仰いで天地の無邊際に對す、實にや小年は大年を知らず、小知は大知に及ばず、何くんぞ其處に畏怖の念なからん、之や一轉して歸依の情となる、宗教心の種子となる、此種子が靈と肉との如く、生るゝより以降吾人に附隨するものとせば、其發芽して絶えず宗教の幹を此世に抽んずること無るべくはあらず、然り之を事實に徴せよ、御嶽教に、黒住教に、天理教に、蓮門教に、阿蘇波羅婆教に、連年、相接踵して今日に至れるにあらずや、此等は迷信にもあれ、皆宗教心の發芽たるを失はず、此眼前の事實を無視して漫に今日の狀態に厭心瞠目するものは實に迂愚の極のみ、前者何を以て稱せられざる、或は無智の老媼が幻覺より生れ、或は寡聞の痴漢が頑頭より孕まれ、其現代の思潮と懸絶万里、之を取つて云爲すべく餘りに愚劣なるかの觀あり、其潜在力の俗間に侮るべからざるものあるに拘らず、世の注視を忘られしもの是が爲にあらずや、後者何が爲に爾く稱せらるゝ、靈慾の聲に愜るゝの深き、次第に學識ある士に、或は多少學識ある士に注意せらるゝに至りし結果、是まで閑却せられし智信の調和も顧慮せられて、從て吾人の鼓膜に響くの力次第に强きを致したるに因るにあらずや、然り、稱せらるゝは大なるを以てなり、以て後者が明かに現代思想の進歩と其内的要求の次第に精深に趣くを示すを見るべく、吾人が歡迎の態度を示すもの亦此理に存す、宗教的偉人降下の豫兆と否とは必ずしも問はず、

未だ生を知らず焉くんぞ死を知らん、此聖訓あらゆる人生の疑綱を切り抜けんと欲すと、世には幸福なる人々もあるものかな、予は其人の生死問題に觸れざるの因を順境に歸して羨むものにあらず、そは觸るゝもの皆ナザレの大工の子のみにはあらず、九五の尊を踏むべかりし悉達大子もあればなり、唯羨むところは、如何にして爾く短視に止まるを得るかに在り、天下事なければ即ち止む、事あらばそも如何せん、治に居て亂を忘れずといふも亦此顧慮より來るにあらずや、大なる事業は大なる信念より來る、そは亦大なる安心より來る、生死問題に傾耳する勿れと教ふるものよ、そは京見物に旅宿を定めて先づ觀光に浮かれよと教ふるものにあらずや、日暮れて路頭に迷はずんば幸なり、天下の青年よ、漫に鬼胎を懷いて冥搜暗索するは要なし、然れども健全にして精到せる思想には憚なく耳を傾けよ、少くも白刄一下の底にビクツカざるを要すればなり、

見神の實驗を以てさながら荒唐怪奇の說かの如く、或は幻覺若くば錯覺より來るものゝと速斷し、或は獨り我のみ神の寵兒の如く心得るものと罵倒し、果は巣鴨病院に當然入るべき候補者なりといふさへあるに至る、何ぞ思はざるの甚しき、神を見るといふも信仰の光を以て神の靈に接するをいふなるべし、必ずしも白衣瀟洒の神人を見るの謂にはあらざらん、信あるものゝ目には一顆の李の葉の露にも、天上の星地に落ちて甦ると見ゆるなり、而して之を神の御手とも見得るなり、否心に爾く感ずべき無限の囁嚅あるなり、這般の消息、說くは實に愚、然れども現時猶ほ斯ゝる僻說の天下を蠱惑するもの少しとせず、愚も亦時には說かざるべからざるを悲む、

自力と他力、之も亦刻下最も人の頭腦を惱ます問題なるべし、而して又之れ最も言ひ易からざる問題の一なるべし、然れども一を守つて他を非とし、自力なるが故に能く眞理と抱合し、他力なるが故に輙ち眞理と背馳すといふが如きの斷は、吾人は確に其謬妄たるを信ず、要するに自力に入ると他力に走ると、其趨向を異にするは、其人の境遇性格にも然らしめられたるもの尠らざるが如く、強健なる支體、内に英氣の横溢するあり、爲さんと欲すれば必すべく、遂げんと欲すれば遂ぐべし、此の如きものゝ悟に入る、往々絶對者に人格の呼吸を吹き入るゝを要せず、唯そが示す理數を攫して自家藥籠中のものとなし、天上天下唯我獨尊、宇宙を掌上に弄するの活潑々地に高踏するなり、彼は他を愛せんとはするなり、愛せられんとは勉めざるなり、其底に雄々しさはあり、左れど又淋しさもあり、脆弱なる體質、内に往々悲痛の壓迫し來るあり、進まんとすれば力なく、止らんとすれば支えず、かゝるものゝ悟に入る、往々絶對者に人格の温き血液を通はしめて、其攝取の御膝に抱かれ、育まれ、一向その大威力を分ち得て而して後始めて此世に強者とならんとするなり、斯くてなるなり、彼は他を愛せんとはするなり、左れど更に己より大なるものに愛せられんことを勉むるなり、言はゞ或は女々しさはあらん、左れど又言ひ知らぬ温さあり、一括すれば、兩個の爭點は、家長となつて思ふがまゝに命令せんか、長へに父母の膝下に在つて甘き涙に

溺はんかに在り、囂々たるものよ、漫に一を取つて他を排するを休めよ、自ら強者となると、父母の力を恐みて強者となると、其此世に於て強者となるに於ては一なるにあらずや、更に譬ふれば自力の悟境は秋日和の如し、碧落千里纖翳眼に入らず、山骨痩せに痩せ、水心細りに細る、蘆花の岸、黄茅の家、白鷺時に來つて枯樁に上る、崇高の念は之あり、何處にか涙のにじむ蕭寂の感は無からんや、他力の悟境は春日和の如し、繁紅闇紫野馬其藍より生れ水に蕩ずる日華、欄に醱る羅袖、黄鸝或は來つて粧閣に夢を語る、崇高のそれは知らず、何處にか愛の漲る和煦の光はなからんや、去れども春花秋月、人の好みに任す、說くべきなり、強ゆべからざるなり、此に就くと彼に赴くと、人には心的傾向の異なるあり、一概して言ふべからざるを如何せん。

然れども其趣舍の際に於て、こは理性の透入し得ざるところなるが故に、非なりとか、非ならずとかいふは迷へり、吾人は必ずしも智信は全然無關係なりとして、彼兩珠の譬喩を以てヘーゲルに嘲けられんとするものにはあらず、否智信の調和は何處までも必要なり、然れども智の示すところに違ふが故に非なりとするはよし、智の至るべからざるが故に非なりとするは迷へりとするのみ、何となれば智と信とは其目ざすところ同一絕對者なるの點に於て關涉あり、從て智の許すところ信も亦堅きを致すの關係ありと雖も、由來智は唯概念を與ふるもの、信は全意義を敎ふるもの、其方向に於て一は右よりし一は左よりするが如く、其範圍に於て一は全部を把握し一は部分を抽出す、故に信を得んとして唯智の範圍に止まらんとするは迷へりといふのみ、思想界近來稍多事、而して今の說をなすもの、往々此根本義に於て深く顧慮せざるものあり、一關此處に透破せずんば、同一文字に即すとも、其解に於て忽ち雲泥万里の差を生ぜんかな。



戀愛文學と社會主義

堺利彦

戀愛文學と社會主義！讀者或は此の題目に訝(いぶか)るなるべし。而も予輩は此の二者の間に重要なる關係を認むるなり。

謂はゆる戀愛文學を見よ。大抵是れ、男女性慾の本能的要求と彼等が現在社會に於ける生活狀態との矛盾衝突を描出せるものに非ずや。而して評家は之を釋して曰く、是れ人生の煩悶を寫せる者なり、是れ自我發展要求の聲なり、是れ理想を天の一方に望む憧(あこが)れなり、而して多大の詩美常に此の中に在つて存すと。

予輩も亦た實に此の憧(あこが)れ、此の要求、此の煩悶の中

に多大の詩美を認む。然れども、予輩は只だ徒らに憧れ、徒らに要求し、徒らに煩悶するを以て滿足すること能はず。此の憧れと、此の要求と、此の煩悶との底に、遂に一道の光明ある希望を認め得て、玆に始めて安心せんとする者なり。

然らば其の光明ある希望とは如何。他なし、新社會の建設、是れなり。然らば其の新社會建設の方策は如何。只だ我が社會主義あるのみ。然らば其の社會主義とは如何なるものぞ。社會主義とは、現在社會の私有財産制度を破壞して、土地資本公有の社會組織と爲し、貧富男女の階級を一掃して、總て人民をして衣食住の安全を得せしめ、其の自由平等を地上に現出せしめんとするもの、即ち是れなり。

然るに文學の人、やゝもすれば自ら高く標致して曰く、文學は絕對なり、至上なり。文學は政治に非ず、道德に非ず、宗教に非ず。文學の目的は詩美に在り、吾人は詩美を看取して之を描出するの外、曾て何事をも知らざるなりと。然れども、願はくは思へ、文學も亦た社會の產物なり、時代思潮の一現象なり。一波豈に萬波の方向に逆らふを得んや。足利時代には足利時代の特色ある文學あり、德川時代には德川時代の特色ある文學あり、二十世紀の初年、豈に亦た一特色の文學を產せざるを得んや。

然らば二十世紀初年の特色は如何。今や此の社會には資本家制度の氷漸く厚く、黄金萬能の富豪政治を現出せんとし、多數の人民は常に饑寒に苦められ、中等階級も亦た常に生活の不安に襲はれ、人は皆な四面の壓迫と周圍の暗黑との間に多大の煩悶を感ぜざるを得ず。此の間、稍や氣力ある者は其の四面の壓迫に反抗して自己存在の權利を主張し、玆に謂はゆる自我發展要求の聲となり、轉じては奮鬪主義、精力主義、排他主義、向上主義、成功主義と爲る。次に品性の稍や淸高なる者は、其の周圍の暗黑に堪ふる能はずして光明を望んで之に趨らんと欲し、玆に謂はゆる理想の憧れとなり、轉じては巖頭の感、無我の愛、見神の實驗、救世主の出現と爲る。而して是等の思潮傾向が兩性關

係の上に現はれたるもの、即ち今の戀愛文學に非ずや。

然るに、今の文學者自身は是等の思潮傾向に動かされながら、敢て昂然として之を非認す。是れ自覺なき也、意識なき也。然れども意識なきは傾向なきに非ず、自覺せざるは思潮に觸れざるに非ず。足利文學の特色も自覺なき特色なり、德川文學の特色も無意識の特色なり。明治の戀愛文學、亦た未だ自覺せざる無意識の思潮傾向を帶びたり。

斯くの如く、文學に自覺なく意識なきは、其の時代に眞の自覺なく意識なければばなり。今や明治の社會は只だ雜然紛然として煩悶の裡に在りと雖も、其の眞相を自覺する者、未だ甚だ少く、此の經濟上の不平等、此の富豪政治の現出、此の多數貧民の境遇に就て、未だ明かなる意識を有せず。故に其の文學の上に現はるゝもの、亦た只だ雜然紛然たる反抗の聲、叫喚の聲、悲鳴の聲、絕望の聲、逃げまどふの姿、救を求むるの姿、物にすがるの姿に過ぎず。

予輩は今の文學者の技倆を尊敬す。彼等が今の世の矛盾を寫し、悲慘を寫し、此の虛僞冷酷なる道德、法律、習慣に對して、敢て奮戰苦鬪するの狀は、予輩の常に嘆服して措かざる所なり。然れども、彼等は斯くの如き道德、法律、習慣の依つて來る本源を察せず、此の矛盾悲慘なる社會の組織を解せず、即ち自覺なくして無意識に筆を取るが故に、惜むべし、其の効果未だ大なること能はず。

若し彼等にして、善く此の社會の眞相を解し、此の多數人民の疾苦を救ふの道、只だ此の經濟上の不平等を除き、只だ此の富豪政治を廢し、即ち只だ此の社會主義を行ふに在るを知り、明かなる理想を持して明かなる要求を爲し、其の卓拔なる筆力を以て、現社會の打破と新社會の建設とに勉めなば、其の効果、實に測り知るべからざるものあらん。即ち多數の讀者は、之に依りて能く光明ある希望を前途に認め、茲に始めて眞の慰藉を與へられ、眞の活氣を附せられ、安心滿足の間に革命の事業を共にすべきなり。

彼の佛蘭西のゾラの如きは、實に此の自覺を有したる傾向的小說家なりき。我が木下尚江君の如き、亦た實に此の派に屬す。近頃。山路愛山君も亦た指を此の流れに染めんとするが如し、今や社會は漸く覺醒しはじめたり。文學者豈に獨り永く其眠を貪るを得んや。

喃々錄

小燕子

△川上眉山氏の「ゆふだすき」、早稻田文學第二號に出づ。結構も趣向も平凡なれど、其筆の洗錬、其文の清麗に至りては確かに文壇の珍、「ふところ日記」の著者未だ老えざるを知るに足れり。一代の粹人紅葉氏去りて、文を以て見るべき小說いとど少きの時、切に眉山氏の奮勵を望まざるを得ず。

△二葉亭主人、東京大阪兩朝日新聞の月曜文壇を擔當し、一回讀切の短篇物を草す。長さに制限ありと聞けば、充分主人の驥足を伸ばし能はざるやも知れねど、文想共に當代に斷然たる主人の事にしあれば、其斷簡零墨と雖も、恐らくは寸錦斷ち難く、尺璧藏するに堪へたるものあらん。況んや主人は新聞以外に於ても活動すべき計畫ありといへば、主人の將來の如き最も文壇の注目に値すべきものたるを信ず。

△青柳有美氏より來れる原稿紙の中の罫に「踏正勿懼」の四文字あり。頗る面白き思附といふべし。

△德富健次郎氏（蘆花といふ雅號は今後一切用ひぬ由）大に煩悶に煩悶を重ねて終に豁然として大悟し、去つて榛名山上に疲勞せる心身の回復且つ修養を勉めつゝありと傳ふ。思ふに詩人文士の煩悶は恰も婦人の產痛の如きか。彼等が偉大なる思想を產まんとするや、多くは之に先つて大いなる煩悶を經由す。我は此點に於て寧ろ氏の煩悶を祝福し、今后世に出づるべき生兒の如何に淸き勇ましき產聲を擧ぐべきかを期待するの情に堪へず。

△先月上旬我れ德富氏を訪はんとて原宿に行く、門に貼札あり。曰く「山へ轉居。　德富」と。其飄逸思ふべし。

△綱島梁川氏遠からずルナンの「基督傳」を譯して出版すべしと傳ふ。氏の筆を以て彼の名著を譯す、我讀書界又一の寶玉を加ふべきを喜ぶ。

△登張竹風氏曰く、「吾輩は元來涙脆い男だ、だからニーチェの如き超人主義、自我主義を尊崇して夫れによつて力を得たいと思ふのだ。倫理道德などを八釜しくいふ人は元來の性質がよくなくつて倫理道德にでも束縛されなくつては世に立てない樣な男に多いものだ。世に無我の愛とか何とか唱ふる人があるが、人間を眞裸にして出して見給へ、我輩は餘程彼等よりも無我の愛を行うて居るものぢや」と。此說大に一理あるを覺ふ。

△ニーチェといへば近頃面白きは「日本」新聞の「文藝界消息」に出てた

る記事なり。文句は確（しか）と覺えれどニーチエ此頃狂氣となり瘋癲病院に入れりといふ意味の事を珍らしげに書きありき。ニーチエ先生草場の蔭にてフフン〳〵と笑ひ居るべし。

△「早稻田文學」の雜報欄に筆を執る人は主として中島孤島、德田秋江、東條鐵笛の三氏なりといふ、而して孤島氏は評論界、秋江氏は小說界、鐵笛氏は音樂界の擔當なりと聞く。

△「小品文學」はなか〳〵器用に出來たる雜誌なり、殊に第二號の意匠頗る斬新にして、何となく江戶趣味を復興したる樣の心地せらる。恐らくは今後實行よかるべし。

△「藝苑」は趣味の高尙、藝術の愛慕等を標榜して敢て沽らん哉主義を取らざる所、流石に上田敏氏の手に成れるものたるに耻ぢず。殊に博く文壇各種の方面に注目し、獨自一己の批評を加へて、頗る活氣を呈し來れる所なか〳〵面白し。

△「進化論講話」の著者丘淺治郞氏は今年中に必ず「生物學講話」を起草すべしと傳ふ。氏が明確なる敍述と趣味ある譬喩とを以て、深遠なる學理を一氣にして讀下了解せしむるの手腕は我學界の只一人なりといふべく、吾等は「生物學講話」の世の思想界學問界に貢献すること甚だ大なるべきを信ず。

△山路愛山氏「獨立評論」に「大盜通信」といふ小說を書く、第二回は少しく見劣りせらるれど、第一回は愛山氏ならではと思はるゝ面白き書振り、今後の成行こそ、漫ろに待遠く思はるれ。兎に角氏の如き新思想を抱ける人が小說界に筆を染むるに至れるは、大に注目すべき現象なりといふべし。

漫評



新聞紙雜感

雨のや生

▲何人も新聞記者たり得べし、何人も新聞記者たり得べからず。

▲今日の新聞紙、論說に雜報に、文藝宗敎談の劇評に、燦然として夫れ備はれる哉。而も平凡なる新聞紙を刊行せんとならば、通信社あり、外國電報あり、演藝界の摺物ありて、尋常茶飯の事なるのみ。

▲新聞紙を讀むも讀まざるも、日常の生活に於て損益する所なきは、何人も認むる所ならん。政界の雲行や、俗吏の往來や、吾人に執て何でもなき事柄なり。況ん

や、窃盗姦淫、皆々しき醜陋の敍述をや。

▲新聞紙が唯だ社會の出來事を報導するに止まらば、これにて足れりとせむ。されど『タイムス』の如く、『ヘラルド』の如く、其の一言一動世界に反響を及ぼすべくんば、新聞紙の勢力も亦た侮るべからざるに非ずや。

▲現下新聞紙の無勢力なるは、疾くに故樗牛道破しきと覺ゆ。實に無能の故を以て難詰せられたる大臣も、庸劣の故を以て排斥せられたる議員も、依然として大臣たり議員たるに非ずや。政黨の腐敗も、學者の惰容も、依然として故の如し。必竟新聞紙の言論が社會に無勢力なれば也。

▲新聞紙の論説が如何ばかり讀者を動かし得べきやは、既に新聞記者自身の疑ふ所に屬す。浮田氏の言を俟つまでもなし

▲散漫撞着、お茶話を引伸したるに過ぎざる今日の論説とやらは、田舍代議士の智見を養ふに足らむも、識者の一顧を煩はすには足らぬ也。宜なり、天下滔々として豊富なる三面記事に趨るや。

▲三面記事の信を置き難きは、洵に浮田氏の説く所の如し。こは信僞奈何に係らず、將來益々新聞中の新聞として榮え行くべし。

▲新聞紙に執て三面記事以外、最も讀者を惹くものは小説也。論説なき新聞はあれど、小説講談なき新聞はなき也。續き物小説は現在は勿論、將來に於ても、重要なる要素たるべし。

▲於是か吾人は、日に何十万部と號する現時の新聞紙よりも、寧ろ『吾曹』時代の朝野新聞を想ふの念に堪へず、

▲吾曹新聞の主筆として成島柳北、福地櫻痴等の言動が、如何に當時の耳目を聳動したるかは、玆に説くを要せざるべし。彼等が驕奢の狀、亦た想見すべきに非ずや。

▲想へば明治十年(?)、忌避に觸れて發行停止の嚴命に逢ふや、吾曹等相集りて、淺草寺に於て盛んなる新聞紙の吊法會ありき。今の新聞紙、停止に逢ふて果し

て葬式を行ふの勇氣ありや。

▲かゝる不便なる時代に於て、數千枚の摺物を作り、新聞葬式記事を掲げて、萬都の人士を驚かしたる岸田吟香翁、亦た一頭地を拔ける人たりしを疑はず!

▲御用新聞主筆としての吾曹記者は、今日の所謂御用記者の直線的なるに似ずして、渦や政府の辯護も、當の敵をして同情を寄せしめつゝ、婉曲限りなき筆路なりし。

▲今や都下、新聞社の數、十數餘を以て算ふべく、新聞記者の數、一社百餘を以て算ふべし。而も自ら號せずして大新聞たるもの何處にか在る。吾等は輦轂の下、大阪朝日大阪毎日と比肩すべきものだに無きを觀て、密かに以て帝國の恨事と爲すもの也。

▲吾等は今日の新聞社が、規摸に於て田舍の師範學校にも及ばず、其の新聞記者が、學殖に於て、中學敎師にだも若かざるを憾とす。竹風子が記者學校の設立案、即ち所以あり。

▲吾等も一たびは新聞記者たらんとの念慮を起しき。然るに實際社員の列に連りて見れば、案外つまらなきものなるを自覺しぬ。將來再び新聞記者として起つべきや否やは、疑問なるも、今暫し形勢を觀ての思案なり。

▲兎まれ角まれ、新聞記者なる天職は愉快なもの、神聖なるものなるとを斷ずるに躊躇せじ。新聞紙が一般に程度を高め、品位を高め、學識識見を以て當代に睥睨するの曙に到らば、吾等も亦た再び起ちて新聞記者たらん哉。

▲新聞記者の態度は、學者の夫にあらざるは、言ふまでもなし。されど淺薄なる學術と俗才の外、何物もなき新聞記者は憐れなるかな。

▲今日の新聞記者は、論説記者として政治經濟の一端を、二面記者として歴史法制の一斑を、三面記者として短篇小説ぐらゐ書き得れば足る。而して劇評家としては歌舞伎年代記をひねくり廻はせば充分也。

▲新聞紙の論説が必ずしも政治論ならざるべからざるの理由更になし、啻に理由なきのみならず、社會の耳

目たる新聞紙としては、宜しく他の文學宗教美術一般社會敎育上の議論あるべく、又之を解決するの力なかる可からず。

▲朝日と時事を除きて、小說の呼物とロイテル電報の山分に過ぎざる今日の都下諸新聞は、決して內外に誇稱するに足らざる也。

▲『何人も新聞記者たるべし、何人も新聞記者たり得べからず』。於是、吾人は朝野盛時の吾曹記者を想ふ。

鬼面魔語

醉美生

○西洋人は到底肉の人種なり。握手といひ、接吻といひ、embrace といひ、何れも皆肉の接觸によりて感情をあらはさんとするを以ても視るべし。

○「家族會」なるもの起りたりとて、直ちに家庭圓滿、夫婦和合の道進步したりと速斷すべからず。これたゞ藝者の社會的地位が、次第に降下し始めたるに伴ふ自然の現象のみ。藝者を上ぐるも世間體惡しと思し給ふ先生達の、妻君携帶といふ妙策を案出したるものと知らずや。男同志ばかりの寄り集りにては何となう物足らねば、他人の妻君にも行儀よくカラカヒテ歡を盡さんとするいとも果敢なき望が其動機なるべけれど、妻君も亦己が夫以外の男を淑やかにヂラスの快味を覺え、暗に夫をオダテて「家族會」を理想的のものと思ひ込ましむるに至りしなるべし。思へば寧ろ家庭夫婦のみにては滿足し得ざる人間の慾望あることを證據したるものといふべし。

○西洋の會合に夫妻相揃うて出席するものゝ多きは全く藝者の存在せざるが爲めなり。

○男の客なば婦人に迎へさせ、女の客なば主人自ら迎ふる西洋の風習は甚だ厭ふべし。思ふにこれ往古貴賓尊客あれば、其妻をして枕席に侍らしめしとかいふ醜風の稍々變形せしものか。

○若し人に移氣なるものなきか、又は愛の獨占を冀ふ慾望なければ、決して嫉妬なるものゝ存在することなかるべし。嫉妬とは所詮愛を獨占せんと欲して、而かも人心の移氣なることを認めたる時に發動すべき感情なれば也。夫れ故に性來移氣なる人が、全心を捧げて熱愛すべき戀人を見出したる時、其嫉妬心や必ず極度に達す。

○非常に女好きなる人に限て女を惡口するが多し。蓋し女の研究に憂身を窶したる結果、些細なる弱點までも、知り拔きたるが故なるべし。

○河上肇氏が「無我の愛」を信ずるに至りたるを以て、人多く本氣の沙汰にあらずと冷笑す。されども吾人は氏が徹頭徹尾眞面目にして、且つ確かに幾分安心立命の地を得たるが如きものあるを多とす。只經濟學に

於ては法學士たる價ある氏が、靈界の修養に至ては未だ一個の中學生たるに過ぎざるを自覺せず、「人生の歸趣」などと大袈裟なるを——而かも理屈は何人も知れるが如きことを——事珍らしげに振廻すが如きは、些か氣の毒の感なきを得ざる也。

○「無我の愛」に對して「自我の愛」出づ。蓋し前者の稍其勢を得たるに反動したるものならん。思ふに浮世の相は橢圓形の如くにして其中心二あり、其二つ相待て初めて完全なる發達をなすべきものにあらざるか。われは寧ろかゝる反動の起るを以て人生自然の理勢なるべきを思ふ。

○「愛國婦人會」の催しにかゝる慈善演藝會を歌舞伎座に見る。片市の楠正成、八百藏の重の井、皆不出來、高麗藏の伊勢三郎に至つては拙惡見るに堪へず。科白毫も覺え居らず、一々黑坊の助けによつてやるが故に、間が拔け、調子合はず、氣の毒といはんか、滑稽といはんか、よくもづう／＼しく舞臺に居りしものよと思はれたり。

○高麗藏の退歩は眞に驚くべし、彼れは漸々市川高麗藏を遠かりて藤間金太郎に近きつゝあり。今にして覺醒する所なくんば彼は終に容貌を以て婦女子に喜ばるゝの外、一の取柄なきに至らん也。

○之に反して一役毎に其腕を上げ行くは羽左衛門なり、其齋藤實盛は當日第一の見物、其調子のよさ、其動作の美しさ殆んど非難すべき處なく見えし。

○羽左衛門に次て當日の上出來なりしものは蟹十郎の九郎助、あの可笑しな顏附をしながら、人をして泣かしむる腕前、たゞ／＼老功といふの外なし。

○今日の俳優にて、よく人物の腹を呑み込み、情を以て人を泣かしむるに足る者は新派にては高田實、舊派にては女寅、吉右衛門、宗之助の四人を推す。

○吉右衛門と宗之助とは將來同じ座に入つて夫婦役となるべきものなり。



魚河岸の鮪

樋口二葉

お刺身といへば、鮪が無いと物足らぬやうに重寶がられ、晩酌の一寸一杯にも食膳の上に幅をきかせ、名ある割烹店の献立にも膳部の一隅を占めて、好酒家の箸は先是よりぞ着き初むる。啻に上戸に歡迎さるゝば

かりてなく、下戸にも亦これを嗜むもの多し。此魚の特りお刺身にのみ重寳がらるゝにあらで、切身となつては煮られ炙られ、骨牌の目に切られては葱鮪となつて、牛肉や鳥肉を壓するほどの大勢力を占めるも可笑し。されば市中の魚商も小料理店向も、鮪を買出さゞれば他の魚類が幾等ありとて、忘れものしたる如しと言ふに至る。東京人士と鮪といふ魚との因縁は深く、結び附られたる潛勢力が多年の間に蔓つて、この魚が東京の名物の如く持囃されつゝあるなりき。

東京の鮪

鮪のうちて最も稱美されて居るは、近海ものと云ひ、東京灣近傍にて漁獲さるゝ處のものなり。また俗に仙臺鮪と云ふ一種ありて、美味なきものと云ふが、此仙臺鮪は魚川岸にては北海ものと稱す。北海道にて漁獲したる鮪を汽船便、または汽車便に托して輸入し來り、魚川岸の市に持出さるゝに由て斯くは言ふなり。近海ものと北海ものとは味に於て大差のあるは、誰もこれを味ひ知る如くに云へど、餘程の贅澤屋にあらざる限りは、迚も是は近海ものなり、是は北海ものなりと區別し能はず、現に毎日それを手に懸け營業する商人ですら、容易に識別するは難きこと、況て普通の需用者に於てをや。或はそんな道理のあるものか、喰てゐて美味か不味か解らぬ筈はない、と云ふ人もあらむが、近年東京人士の多く口に登りて味ひ居る處の鮪は、彼の仙臺と稱し劣等と目されゐる、北海道附近にて漁獲するものゝみにて、特種の美味を持つ近海ものは、年々漁獲を減じて價高く、臺所口より今日は魚商でございと賣歩く商估の手に適せず、小料理店の板場にてこなし切れるものにあらざればなり。假令高價を厭はず手に入れんとしても、僅々の輸入品を上等の料理店にて奪合ふて、價に拘らず買取る始末なれば、到底棒手賣魚商や市中の魚商の手に渡らず、已を得ず北海もの即ち仙臺鮪を仕入れて賣る、斯の如き現狀であれば市中で賣る鮪に近海ものなどの有るべき筈なし。併し今日では仙臺鮪と云へど、交通不便の昔日の如き不味ものにあらず。比較して味ふときは、肉に美味のあ

るは近海ものなれど、北海物にのみ馴れたる今の東京人士の口には、どれが仙臺やら何れが近海ものやら迚も解らざるべし。

近海物と北海物

近海ものとて一般に稱美さるゝ鮪は、伊豆、房州の近海にて漁獲するものを云ひ、其漁獲法も伊豆は多く網を用ひ、安房は繩を用ひて釣るが多し。明治十年頃までは豆房の海に游泳する鮪は群を爲し、從つて漁獲も多くありたれば、毎朝魚河岸へ山を積み、都下百萬の口腹を滿たすに不足は感せざりしなり。然るに小汽船の縱横に駛走して、海上安を妨害すること甚だしきより、鋭敏なる魚族は遠く去つて復灣に入らず、鮪のごときも汽船の航路に接する里餘、隻影をも止めざるに至り、頓に漁獲を減じ、爾來年を追ふて殊に此魚族は姿を隱し、房州あま洲ばかりにて、繩船即ち鮪を釣に出る漁船が、二百艘以上ありしに、現今では漸く四十餘艘となり、遂に今日の如く近海鮪の美味を稱しつゝ、これを口にする能はざる事となれり。これに反して北海もの、俗に仙臺鮪と稱するものは、汽船汽車の交通日に便利となるに從ひ、近海ものゝ品不足にて需用に應じ能はざる虚に乘じ、ドシ〳〵輸入し來りて市場に現れ、今日の大勢力を占めたるなりき。併しこの北海ものが、世人の言ふ如く不味極るものにして、都人の口に適せざるならば、いかに價が廉なればとて顧るものゝあらむや。況して其價の廉ならざるに於ては、誰かこれを食するものゝ有るべき理由なし。前にも述べしごとく仙臺鮪なるものが、必ずしも不味なるにあらねばこそ、北海ものたるを知らず、また北海ものたるを知りつゝ食するもの多きに因るなれ。

仙臺鮪の名稱

仙臺鮪といへども、仙臺附近にて漁獲したるものと云ふ意にはあらず、鹽釜の生問屋(生魚を扱ふ問屋)より輸入し來るよりの名にして、其地方より來る處の鮪なりと云ふ意を、略して仙臺鮪とは言ひ始めたるなりき。當時は交通機關も備らねば、帆前船の便に藉りて品川沖まで輸入し、艀にて魚川岸へ運漕したることゝ

て、其間の不便と日數を經ること少々ならざりしなり。塩釜にて帆前船に積込み順風に帆を孕ませ、何の障碍なく品川灣まで着するには十日間の日數を要し、若し風待等の障碍ある際には、十五日かゝる時もあり、また二十日を海上に過すも珍しからぬ事なれば、此間に大抵の生魚は腐敗すべし。縱腐敗せずとも到底食用にするは危險にして、強て食すれば魚肉の香も味も變じ、ピリヽと舌を刺して古綿を噛むに均しかりしと云ふ。然もあらむ、此魚は函館附近にて漁獲したるものを、鹽釜その他の近港へ送りつけ、それが生問屋の手に落ちて土地に於て捌けざる程の荷嵩みとなり、帆前船に托して東京へ輸漕するが例にて、假令東京にて賣物にならぬまでに腐敗した處て、原料の價は殆ど無價の如きものゆゑ、船賃の損失に歸する位にて濟めば、幾干にても捌けさへすると、土地に置て肥料にするより利益ありとの考へにて送り來り、荷主は素より損失を覺悟しての冒險なりし。斯かる次第なれば、其頃の仙臺鮪なるものは、鹽釜の生問屋が荷出をするまでに、漁獲してより如何に速くも三日間は經過すべし、其上障碍なく品川灣へ着いたとしても、また十日間を要し、此處に於て河岸へ陸揚して市場にかゝるには、早くも一日半や二日は要すべし、然すれば漁獲後十四五日を經過する割合なれば、いかなる魚族と雖も腐敗するは當然なり。斯のごとき鮪なれば味ひなきは是また當然なるべし。昔日の仙臺鮪といへば實にかゝる物なりしかは、今日に至るも猶且仙臺鮪そのものゝ實質を言はずして、一概にこれを排斥する傾きありぬ。されど今は漁獲後僅々三四日間にて東京の市場に登り、而も運漕途中は氷に包まれ來る事とて、惡臭を放つもの、肉の腐敗するものなどは決してなく、東京近海にて漁獲するものと遜色なきに至り、問屋仲間にても唯胴切になりし肉のみを看ては、一寸近海物と北海物即ち俗にいふ仙臺鮪と識別に苦しむ程なりとか。その仙臺鮪が東京市場へ優勢を占め出したるは、明治十三年に三菱會社の汽船にて、宮古、釜石、石の巻、鹽釜、或は函館等へ航海する船へ積込み運漕し初めたるに出る。

而して此積荷は松前問屋と稱したる問屋へ送り來り、松前問屋より川岸の生問屋の大物師に委托して販賣し來りしなり。

松前問屋

茲て一寸松前問屋なるものを説明するも贅話にあらざるべし。抑もこの問屋の起りは、寛政年度に日本橋西河岸に住せし杉本茂十郎なる者、十組問屋の制を設けたる際、下り問屋、地廻り問屋の荷物取扱ひの區域を定め、遠州今切を以て上下の境と爲し、幕府へ請願して認可を受けしより、下り鰹節問屋はこれを濱吉組と稱へたり。この際小船町組より十名を撰定し、十組問屋へ加盟し上方筋の荷物を引受けたる者は、小津清左衛門、大橋太郎次郎、喜多村富之助、丸屋喜三郎、丸屋源三郎、丸屋治郎兵衛、伊勢屋伊兵衛、尼屋傳次郎、小松屋彦兵衛、外一人なりしが、其後に至りこの制も廢滅に歸したり。天保年間にまた一の組合營業の議起り、函館地方より輸入し來る荷物に對し、松前問屋なるものを組織し、明石屋、西宮、萬屋、伊勢屋、栖原が協同して、松前より來る荷物一切を一手に引受けむと、當時の御肴取締名主熊井理左衛門を以て、幕府へ請願したる處許可となり、爾來この五名にて松前荷物を取扱ひ居たりしも、安政四年四月に至り、幕府に於て函館會所なるものを設置し、以前より松前荷物を取扱ひ來りしもの丶外、猶五名を増して之れを會所附の問屋と定めたり。其人名は

明石屋治右衛門　西宮平左衛門　鎌倉屋庄兵衛
萬屋吉右衛門　喜多村富之助　住吉屋又兵衛
伊勢屋長兵衛　榎本屋卯兵衛　伊勢屋平馬
栖原角兵衛

以上十名にして、これを松前問屋と稱し、維新後まで繼續したり。(次號完結)

▲銀行の内幕

三　文　奴

戰後の實業界は偉大なる勢力を以て發展せんとして、今や其機運が見えつゝある。

此時に當つて、實業界の中樞たる銀行其もの丶、裏面を穿つて摘載す

るのは、敢て徒勞では有るまいと思はれる。

銀行！。名は實に奇麗である。長堀通ふれば音がする、蘆が靡がて錢が鳴る。慾は是れ、津の國の長堀長者、伽羅屋の全盛時代に傳唱せられた、所謂京童の巷話であるが。我れ等は今銀行なる名稱を聞けば、確に或るものの聯想が出來るではないか。言ふ迄も無い事。或る者とは錢である。否、信用である。銀行と聞けば何となう着實な、眞面目な、律義な資本家が經營し、從事しつゝあるが如く感ずるのである。

外面如菩薩、內心如夜叉。佛家の所謂婦人に就いての喝破は、吾人は銀行にも摘用さるゝと思ふのである。

銀行は確に女性的である。見よ。白顏美髯の當世紳士が、孜々として一枝のペンを重げに、愛嬌たツぷり執務しつゝあるも、一度び轉じてその裏面を窺はんか、實に青鬼、赤鬼も斯くや、身の毛も慄つ許りである。

世人は全く菩薩とばかり蚊も殺さぬらしい、明眸皓齒の御嬪樣顏に惚れては居ないであらふか、銀行なる名稱に惑溺して、脊を擠つた貴重の財產を預托しつゝあるではなかうふか。事實は明かに世人が皮層の美に眩惑せることを證明して居る。

往年之は大阪の事であつた、彼の七十九銀行の支拂停止以來、其の餘波を受けて五七の同業者が閉店を爲た時で。一人の車夫が難波銀行の店頭で以て、縊死しやうとした事があつたが、幸にも折よく通行人に助けられたので、その自白が如夜叉の齒牙に掛つた事を語つて居る。

彼は涙ながらに、自分は見らるゝ通りの車夫の身で、終日終夜汗を揩つて、亡父の石碑を建立せんばかりに、好きないごり一杯飲まず漸うにして貯ひ得た拾五兩。今年は三回忌に當る所から、存命の折のせめてもの罪ほろぼしにと、いよ／＼石碑を注文する爲、一昨日大阪貯蓄銀行から引出したのであつたが、聞けば難波銀行では預金者に此頃福引を與れるとの事で、石碑の注文は一日や二日後れた所で、命日に間に合はぬ事も無からう、私も一ツ預金して惠顏した福神樣に有りつきたいものと、こゝこの銀行へ預金をしたのであつたに、ところが一昨日か昨日この銀行は支拂停止をして仕舞つたといふ仕義、慾の間違であつたとは言へ、亡父へ對して申譯が無い寧そ娑婆を駈けなれた足で、十万億土へ追つ付いて、御詫は其上でと思つたのですつて。例は極端ではあるが、世人が銀行の皮層を信じて、自己を誤ること多きを證するに餘りあるではなからうか。銀行の裏面。いでや一番スッパ抜きを遣つて見やう

得意の爭奪。何營業にしろ、得意爭ひは島國的商人の常習である、其又手段が實に卑劣である、陰險である。銀行も一個の營利業で見れば、その數には漏れぬも止むを得まいか、權謀術策殆んど手を換へ品を替へて、同業者間の得意爭奪を遣つて居る。宴會主義で顧を釣らうとするかと思へば、御進物主義で餌を見せる。斯くて漸く浮氣が動くと見るや、早速利率の引を見せるのである。何銀行の預金利率は幾ら、當店はそれよりも幾ら高率に預るとか、甲銀行は貸越何千圓、よろしい、當店は壹萬圓迄とか、或は貴店の裏書さへあれば手形は制限なく割引を爲やうと

か、實に上のない巧言令色、まるで彼の賣淫婦が暗夜柳蔭に喃々遊野郎を口説き落すと同一筆法である。

銀行者より垂涎せらるゝくらゐは、得意客として實際信用確固なものであるから、其等の人は反對に銀行の信用を調査する必要があらう。迂濶に餌に誘はれて百年の計畫を一放屁に飛ばすことなかれである。

行員のコミッション。花をあざむくかれ、まーなま優しい高襟紳士は、少し融通困難な得意と見るや、好機逸す可からずと貪婪の齒牙を現すのである。併し斷つて置くのは、この手合は重に銀行の重役なることで、應接所、待合、自宅等は彼等の無辜の得意を蜘蛛網に、生殺しにする場所であつて、先づ最初は銀行に於て公々然融通を斷るのであるが、其處が巧いので、別に他の會合場所を指定して置いて、第二の會見に於てウイッテ流と出るのである、普通融通金額の一割乃至七步見當が最も行はるゝ所で、彼等の定期相場の資本は其處らから貯つてくるのである。

銀行員にして相場を遣らぬものは今日殆んど銀行員でないのである。其口實はといつたら、時勢に後れざらんが爲めである、時勢に明かならんが爲めにであると、なんと口は調法なものではないか。事務員には相場を絕對にと制裁して置きながら、御自分達は公々然と氣配狀と首ッ引き、肝腎の御捺印は盲判であるのである、預金が幾等あつたか、貸出しが幾何の殘に爲つて居るか、手元金匪が何うあらふが、彼等は一切無頓着、事務員が厄氣となつて働いて居る間に、只郵船よ大株よと氣配の高下に是れ日も足らずである。

瓜の蔓に茄子はならぬ。上を見習ふ事務員には、必ずスモール相場師がなくては濟まん。是れが獅子身中の虫であるので。畢竟世間に知れてはゐないが、あらゆる銀行の內部には、必ず一二の小相場師があつて、此奴が拐帶、消費、詐欺、と上げ句の果には、法網の御厄介になる人物である。それも其筈である。

彼等は殆んど常識が欠乏して居る。學校から出たてのほやほやが、一躍紳士のお仲間入り、生活費に自然不足を生ずるところから。勢ひ一攫千金が試みたくなる。手を燒く。又出す。遂ひなに一時の融通と誤魔化すをそもそも、開いた穴は愈々深くなる。すると最後は定のもの。毒を喰はゞ皿まで〻と爲るので、可惜有爲の一生が。寂滅爲樂の、末は寺男か其處までは知らぬ。

或ひはまた鐵上りに、見飼ひから仕立て上げられた所謂小僧上りが、數學と球算それより他には手紙も碌々書けない僻せに、高襟氣取つて遊里に蹈み込んで、終には相場師となる奴もある。誠に危險千万な事で、銀行の小僧なにかにする、世の親心が知れないのである。

吾人は忠告をするのである、世の子供を持つた親達は、決して銀行などへ子僧に遣らないで、寧ろ普通の商家の丁稚ならしむるに越した事は無いと。

半季決算。之れが實に曖昧なものなのだ。有數の大銀行ならばいざ、大概の小銀行では決算期となるや殆んど修羅場である。期限過ぎ手形を無理算段に書き換へを請ひ、割引料を手形面に書き加へて收入とする。

或は期日を以前より計畫して置いて、態と決算間際に至つて長期日の割引を拵へるとか。或は又未收利息を一時現金と見做なして入金に經理するとか、役員の拵さへ手形を遣つて、預金に振り替へて利息の收入を企てるとか。殆んど手段の限りを盡して、配當率の高からんことを願ふのてある。併し之は全く同情すべき點が無いてもない、銀行は決算報告を明瞭に公告すべく規定せられて居るのと、他の營利會社に比べては、殊に預金といふ重大なる責任を持つて居るからて、勢ひ斯の如き一時の彌縫策も起るてあらふ。

この他尙ほ銀行の暗黑面といつたらそれは〳〵摘載する事が多いのであるが、却て世間の疑惑を深からしめん恐れもあるから、一先つ擱筆するとしやうが、終りに臨んで今一つ一般の社會に是非警告したい事がある。

一犬虛を吼へて萬犬之れに和するとやら、之が銀行家の最も恐れるところて、又得意諸君にも甚だ不利益な事なのてある。とは如何してかといふに銀行なるものは決つして預金を其儘に蓄積するものてないことは、今更新しく冗說するまてもないが、往々にして銀行の大恐慌なるものを來す原因は、僅かの道聽途說に弄ばれ、預金者が雷同して取り付けることてある。是等は實に愚も亦甚しき次第てはなからふか、怖いもの見たさにお化けを覗く樣なものてある詳記するまても無いこと、世人は記臆に存して居るてあらふ、イ扁の、一時非常なる迷惑したのもそれてあつた。

要するに、預金者は自己取引の銀行の信用を充分に調査して、決して危險ならざるものと知つたならば、悠然と構へて取引に注意し、自他の得失を鑑みて輕佻な事を爲ないのが肝要てあらう。(終)

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以內葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲寫眞？

本郷 假面生

寫眞を文字通りに解釋すると、其物其儘を正直正銘に寫した樣ではあるが、實際其通りにやつたら人物專門の寫眞店などは飯が食へなくなる、そこで修整と云ふ手品を使て、低くい鼻は高く、高い額は低く、薄い眉は濃く、揃はない生際は整へる、と云ふ具合に本人とは大分違たものを作くり上げて、而して之が寫眞で御座いなどは甚だ怪しからぬ次第だ、眞を寫した寫眞迄が僞物と來ては世の中に何が眞正の物があるだらう？、

▲間拔け

芝 文明紳士

電車で腰を掛けてる人が、前方即ち乘降客の通路並びに立てる人の領分たる場所へ、自分一人が乘客だかの如くに足をずらと突き出して置いて、後から來た客に蹈まれて怒る人がある、之は甚だ恐な話で他の場所へ侵入し他の權利を侵すのは、既に自己の公德心の欠乏を表はすのみならず、蹈まれる樣に成ても足を引かないのは自分の不注意、『間拔け、盆

鍮なるを示す甚だ馬鹿氣たる仕業である、

▲智者の一失　名古屋　交際家

男女七才にして席を同じうせずと　昔支那の大變豪らい人が云つたさうで、今でも道學先生などは若い男女を戒むる金科玉條としてある、世界に男女以外の人類があるなら兎も角、席を同じうせないては第一種族が滅亡して仕舞ふ、併し古來如何に聖賢の道を奉ずる人でも七才から死ぬ迄席を分けた人もなく、男女が互に席を同じうするを欲して夫れが實際必要で且つ有益な所を見ると、此諺の發言者はいかに豪かつたかは知らぬが、所謂智者の一失で有たらう、

▲眞黒に成て働く人　深川　黒奴

世上で、一生懸命に傍目もふらず働く人を、あの人は眞黒に成つて働いてると云ふが、併し實際それに少しの違いなく其言其儘、眞黒に成て働いてる人はなか〱あるものでない、只汽船や軍艦其他の煙筒を掃除する人夫、所謂カンカン虫ばかりは確かに此言の如く眞黒に成て大に働らいて、此諺を空言に終らしめないのが有る許りだ、

▲庇髪の功　目白臺　ハイカラ

此頃庇髪を惡口する人があるが、それは惡い所許かりを見て善い所を知らぬのだ、第一帽子の代りをして塵埃を遮ぎり、女の尤も大切とする顔の皮膚の光るるを防ぎ、又夏日は烈々たる日光直射をさけて、最も厭(いや)がる色の黒くなるのも防ぐ、殊に之は少々立ち入た話しだが、此出額(おでこ)の人や生際の惡い人なぞの醜くい所をかくして與れるに至ては、其功の偉大なる蓋し百千の欠點を補うて猶餘りありだ、

玉突

飛蕪客

ハイカラの風、一度び何處かの隅から、吹き起つてより以來、天下の草木、暗雲に吹き靡き、チョン髷的の遺物、悉く吹き落されて、大弓吹矢秋の風寒く、矢場の女將、長火鉢の向ふに控ひて、猫臺にコーバコ作る、三毛猫の髯を引張り、ニヤンもないものだ、とケンモホロヽヽ、くわひさすべき鯰なきをかこち、投扇興秋の扇と捨てられて、トランプとんと路を絕ち、遇々待合に八々の音を聞けど、警八風恐ろしくて、ランプの影

さへほそめ勝なるに、茲に玉突と云ふ評判者、近來驚くべき名聲を擧げて、唯我獨尊の勢權、例ば旭日の昇るに異ならず、場末の横丁に至るまで、傾斜だ氷屋の看板のやうな、×に∴軒燈に赤く書き、一等球戯場の看板を見ざる所なきに至れり、豈それスバラシイ流行ならずや、然り而して、上はエライ官員樣より、下は町内の平民に至るまで、苟も玉を突かざれば、人にして人にあらずと、恰も藤原氏か平氏の氣で、自ら稱す之れ高尚ハイカラの遊戯なりと、朝は夙に、夜は夜半に、コツ〳〵然として、板上玉を轉ずること、宛然電車が日比谷を通るが如し、

其以前は、玉突と云ふものは、食後のおなぐさみにして、其筋に於ても、玉突專門の營業を許さず、從つて西洋料理を商ふ側、顏の白い女をして、ゲーム取りたらしめたが、漸次玉突が本業となり、其向きへの申譯に、西洋料理は看板丈けとなり、表裏ひようたんののんべんぐらりんの内に、今は料理の看板さへ、つい出すのを忘れまして、物置の中に塵を被らしむるに至れり、

斯くして其營業時間も、日出より、午後十時に限り營業仕候也が、プールても始まると、二三時頃迄起きて居りますんですもの、眠むう御坐いますよと、場末のゲーム取りはつぶやけり、

扨て玉突とは……と說き出すと、後學の爲めにこの野暮を見よと、お若い方から嘲罵されやう、何に拙者ぢやとて明治の生れ、未だ可愛さうに獨身者、そう野暮になつては居られませんと、敢て玉突術の說明に及ばず、唯一とつ不審でならぬは、丸いものを玉と云ふ、これは聞ゆるが、長いものをキユーとはそも何故、愚案ずるに、キユーは球なり、球の訓タマなり、然らば其名稱は誤り傳ひたるか、將た又西洋のタマは、細長きものなるかと、之れをハイカラの友に聞く、玉突のキユーは、球のキユーか、困窮のキユーか、サンキユーのキユーか、至急のキユーか、涕泣のキユーか、將た又急須のキユーかキユーニユーパツのキユーかと、友大笑して曰く、馬鹿な事を云ふてはないか、君の野

暮」にも驚くねと、余この野暮の一言に恐縮して又敢て問はず、

ぢやと申して、更に玉突の説明をして置かなくては、とんとお話しが初まらねば、極めて簡單に之を述べん、曰く

玉突とは、大きな臺に青いラシャを張り、之れに赤二ッ、白二ッ、都合四ッの象牙の球を置き、キューと稱する六尺棒の先きの細いやうなものにて、之れを突き飛ばし、コツコツ打つけて遊ぶものなり、又玉のおつこちぬやうに、臺にはへりあり、このへりを、コシン又はクシンと云ふ、其意義余にはフシンなり、

此處に集るお客の內、官吏あり會社員あり、軍人あり學生あり、商人あり敎員ありと雖も、月給取と學生とが其多數を占め、商人の如きは甚だ罕なり、其客だねの善惡は、直ちに玉屋の盛衰に關する事故、玉屋を初めんとするものは、先づ第一に場所を撰ぶに智ならざるべからず、何の商賣に限らず、場所の撰擇は、卽ち成功と失敗の依つて以て分るゝ所ではあるが、玉突などは、其中でも甚だしい、卽ち客の有無は兎に角、よい定連を作ると云ふことが、最も必要なる條件なれば也、

其費用と收入とに付きて、大體を記せば、臺一臺、球四個で先づ三百圓、外に貸キュー十本、キューは一本二三圓より八九圓位なれども、貸キューは大弓に於けるガン矢と同じやうなものにて、ちと上手な定連は、大抵自分の持ちキューあり、故にキューをもたぬ者には程よく持ちかけて、一本買はせるの掛け引きなかるべからず、今一臺につき、三十人の定連あるとすれば、一ヶ月平均一人につき、三圓の收入ありとしても、待ち玉へ、三三が九十圓の收入あり、其外風來の客が、少く見積つて十圓としても、百圓の收入となる、この內から、元金の利子、炭代、油代、茶代と家賃とを引くも、優に一家を養ふに足る、ちと流行る所では、家內五人暮しとして、一臺に付き月に十五圓は苦もなく延びる、二臺あれば三十圓、三臺あれば四十五圓と、トントン調子に行くか奈何か知らねど、兎に角一臺十

五圓は確かなり、但し時々修繕の爲め、金子入用有之候へども、料理屋にて皿をこわす程、頻繁なるものには無之候、

こんな物品の代價は、余輩の言を聞くよりも、製造所へ直接に問ひ合す方、遙かに便利にして且つ確實なり、

この商賣のよい事は、誠に手數のかゝらぬ事なり、敢ておカンがぬるいの小言もなく、お酌を呼べの面倒もなく、從て……あら罪な方ねえ……の虚世辭も要らず、いらつしやいと有難うとお歸りなさいと云ふ言葉さへ知つて居れば、ヲームでも出來る事にて、赤々が三點の赤白が二點、皆んな當つて五點と云ふ事だけ心得て居れば、ゲーム取りは猫にも出來る事なり、太平無事國家安康の商賣とは、この事ならずや、又一とつよい事は、比較的倒れの少き事なり、絶對的にないてはないが、料理屋などに比ぶれば、殆んど無いとも云はれ得べし、よし又多少有つたとしても、飲ましたの食はしたのと、元をかけた事にあらず、遊んで居るタマを、轉がさしたに過ぎず、もうからぬ丈けにて、損になるにはあらざるなり、

と、一と口に云つて了ひば、牡丹餅でほつぺたをたゝくやうな話なれど、これは都合よく行つた方の話にて、失敗した方の事にはあらず、斯う定連も多く出來土臺の固まる迄には、夫れ相應の骨折はあるべし、金錢は勞力の報酬なりと、一番古風な事を云つて置かうよ、扨て某文學士の文章のやうな、ブッキラボーの文句になつて御退屈樣、これからも少し、お客の樣子を書きましようと、今度は言文一致なり、忙しい事なり、

第一に算すべきは洋服、次に羽織、次に髯、又以て其客となりを知るに足らん哉だ、白髪混じりから十七八歳迄、流石に女學生は未だ見ぬけれど、何れも當世の姿よろしく、其癖惡口は仲々の皮肉、

『君一番教へてやらうか

と一人が立つ、應じて

『教へて貰ひたいなら、もんでやらうさ

と教へる人ばかりなり、
『敗けるだらうと思ふ人から突き玉へ
『キンタマが當るやうになると、兎角自慢をしたがるものさ
『金玉の當らない内は、口惜しいものさ
まるで喧嘩でもしてゐるやうなり
『いや惡い玉を下すつたな
『お氣の毒さま、紀伊の國でアト無し川
『これがですか、成程其の日暮しの、キンタマばかり取る人は異つたもんです
『成程當りましたね、不思議な玉が行く、まるでねらつたやうなタマでしたね、何んでも強く突く事ですな
『そのタマを取らうとおつしやる、盲蛇におぢずとは金言だ
『君達は一ゲームで一と晩突くつもりか
と飛んだ遠方から、鐵瓶のやうな横口を出すものあり、
『三十ゲームに願ひたいね
『ゲーム取り、宜しく飛ばすべしだ
『もうぢきゲームです、まけぬけて御光來い、序だからもんで上げます
と口がへらない、
唯に玉突に限らず、碁にせよ將棊にせよ、技術を要する勝負事は、大抵惡口と天狗とが道づれになるものだが、玉突位甚しきはなし、例ひ八字髯を貯へた、嚴然なる紳士でも、細君の前に向つた時、下女下男に對した所、將た又下役のものに對した時とは、全然變つて了つた罪のなさ、小供のやうにワア／＼喧いて、小供のやうな文句を並べる所、藝者の前でてれ／＼するとは、又趣を異にして、而かも一個の奇觀である、中には微吟と云ふと外聞がよいが、有態に云へば、鼻唄でそゝり乍ら、甚だしきは、おのろけを云ひ／＼突くのもあり、當らぬ日には、ブリ／＼ぢれ乍ら突くのもある、此突きぶり、人々各々癖があつて、首を振る、上眼で睨む、キューを振る、足を上げる、到底そんな事

迄見て居たら、おかしくつてたまつたものにあらず、夫を又遠慮もなく、惡口を云ふ、茶かす、奇想天外の形容詞を用ゆる、之れに於て笑はざるものは木像的人物なりてすよ、尻をおつ立てるから鳥さしのやうだの、突つ立つてゐるから金火箸(かなひばし)のやうだの、キユーをしごく所が蚯蚓をほるやうだの、タマが强ければ人殺しの相があるの、弱ければ弱いて虱をつぶすやうだの、誰に敎はつて來て、あんな事を云ふのかと、寧ろ感服したくなる、

然し玉突は交際の具て、特に船にても乘らうと云ふ者には、特別の必要ある由、嘗て英國艦隊歡迎の際、接待員をした朋友が、玉突を迫られたが、先生一向不案內なりし爲め、大に赤面したとあつて、夫より以來夢中になつて、今尙夢中に稽古をしてゐる、

此外ピンを立てゝ、プールと云ふものあるも、こは寧ろ賭博として論ずべきものなるを以て、玆には之れを記せざるべし

（完）

新刊批評

▲男女と天才

片山文學士譯
大日本圖書株式會社

オツトワイニンゲルの著を片山文學士の譯したものである、自分は今その所說につきては善惡の批評はせぬ、唯この書を讀んで、非常に有益な、まことに愉快で堪らなかつたといふことを諸君に白狀する、男女研究に關したものは、ちよく〳〵これまで見たことはあるが、それは皆な斷片的な、偶感的なものばかりて、此書の如き學理的、論理的のものは、これが初めてある、否、自分が讀んだ書のうちばかりでなく、男女研究に關した本でこれ位論理的に書かれたものはあるまいと思ふ。

最も痛快に感じたのは女性を以て性交の外何事をも意識しない、否女は性交そのものであるから、何事をも、性交そのものをも意識しないといふ議論である、それからして、女は反道德を爲すごとき氣の利いたものでなくて、無道德なのであると論定したのは頗る我意を得た、それから女には天才が無い事、女には論理がないこと等、所說一々首肯し得られるものがある。又女性にも男性的女性があり、男性にも女性的男性があるといふ說、これは此男女研究の最も重要な所であるが、これも萬人とも異議のない處て、罵倒されぬいた女性も、此論によつて少々息をすることが出來、鼻ばかり高くなつた男性も、省みて苦笑せざるを得ない、自分は多くの點に於て此著者に同感てある。到るところ痛快な議論に富

んで居て、思はず案を打つことがある、實に近來の大著であると思ふ、難をいへば、事がいさゝか警視廳筋の目につき易いので、文字文章が餘りに四角張り過ぎた爲め、女學生や中學生には六ヶ敷く、又興味が少いかもしれぬといふ嫌れがある、例へば生殖器を女性器關といふが如きは、まだわかり易い方である。兎に角男といはず、女といはず、苟も文字のある人は必ず一讀すべき價値がある、特に女子解放を稱へたり、男女平等を主張したりする人、男子を性交の動物のやうに思ひ、男性の尊敬すべき所以を知らぬ此頃の學識博廣の女先生や、無暗に女の肩ばかり持ちたがる女性的男子は三讀四讀すべきである。自分は此書を日本語に譯された孤村兄に多大の感謝を表する（覺生、定價六十五錢、紙質頗るよし）

▲釋迦論

高橋五郎著
文榮閣出版

『一年有半』を破し、『天人論』を破し、時代の傾向を察して幾多の著書を公けにしつゝある高橋五郎氏は、今また時代の思潮、漸時に佛教研究に奔りつゝあるを察し、『釋迦論』を著はす、一編四章三百八十頁、例の如くに四號文字を用ひたれば、內容は左程多きにあらず、最初に、釋迦と基督とは何れの方が模範者でありしかといふ事を、西洋學者中に於ける宣教師の意見と、準佛の傾きある學者との說を比較し、次に佛教經典の批評に入りて、四阿含經のみが眞實の佛教で、是の說は、有說にして空說は後來の構造なりと造作もなく斷定し去り、結論には、釋迦は從來の哲學を一層單純にし宗教化したり、されど教義上には單に一異端家として畢竟失敗したり、但だ道德家として成功せりと論斷す、要するに是の書は、基督教牧師として佛教を研究したるビール等の諸氏、及び排佛家平田篤胤氏の『出定笑語』等を通して見たる釋迦論なり、人若し基督教徒より見たる佛教の批評を知らんとせば、是の書に依りて得る所多かるべし、されど何が故に四阿含經に空の說なく、又た何が故に教義上に失敗したるかは、全編を讀むも尙ほその意を得るに苦む所にして、今少し着實に考究せられずば到底一時的キワモノ的著述の譏りを免れざるべし、（定價八十錢）

▲通俗新約物語

中村春雨著
金尾文淵堂發行

聖書を以て愛讀書の第一となし、朝夕に讀誦し、夢寐に思念して、常に思想の源泉を玆に求め、實行の基礎を玆に定めつゝある中村春雨氏が、愛慕尊崇のあまり、廣く老幼子女にも知らしめんとの目的を以て、ヒユーベツト氏の「聖書物語」によつて新約聖書中にあらはれたる物語を記述したるものは即ち本書なり。主として平淡なる說明的、記述的の文字を用ひ割合に宗教的感情を鼓吹するが如き炎々たる章句に乏しきは、些か慊らずと思はるゝ所ありと雖も、著者の目的よりいへば、寧ろ此に失ふも彼に得んとしたるなるべければ、此點に於て著者を責めんには或は酷に失するやも計られず。兎に角未だ聖書の智識に乏しきものにとりては最もよき手引草なりといふべし。插畫は泰西名畫十數葉及び彩色畫（小林千古氏の筆か）數葉を附して美はしも美はし。表裝は青色クロースに金文字入、紙箱に納めて、万づの體裁の整へる所、流石に金尾文淵堂の

出版物なりと領かる。(定價一圓)

▲密航婦　中村春雨著　金尾文淵堂發行

四年前讀賣新聞に連載せられて、少からざる好評ありしものを、集めて一册として出版せるものなり。文には所々たるみある所も少からねど、全體の物語哀れにして、そゞろに同情を表せらるゝ處流石に著者の筆なり。殊に短かけれど序文はなか／＼に巧に書かれ又第五回の文も文藻豐かなるを窺ふべし。(定價七十錢裝釘美)

▲社會主義評論　千山万水主人著　讀賣新聞社發行

讀賣紙上に連載せられて、一時評論壇上の花を咲かしたるもの、全體として讀めば興味乏しけれども、而かも尙確かに現社會を警醒すべき幾多の提案を認むべきを多とす。殊に例言の如きは簡なれども河上氏の眞摯の情ほの見えて嬉し。(定價二十五錢)

▲獨習自在日華作文軌範　中島錦一郎著　椒山雲山堂發行

日淸の關係益々密接を加へんとするの時、此書の如き最も世の需用に適したるものなるべし、著者は前第二軍兵站監部譯官にして現に實用淸語學堂講師たる人、說述頗る叮嚀なり。(定價六十錢)

▲小影　沙上寫隱著　日本寫友會發行

表裝の瀟洒たると給葉書の美麗なるとを取るべし。内容は殆と見るに足らず。要する一種の道樂的書籍としての外何等の價値なきを思ふ。(定價廿八錢)

▲簡易生活　布施知足譯　東西社發行

一時歐洲の讀書界を震動して、今尙第二のバイブルなりなど唱へらるるシヤール、ワグネ氏の Simple life を譯したるものなり。譯者の筆はなか／＼に暢達なる所あれど、自序にも書けるが如く原著に對する同情乏しき故にや、時に輕佻浮薄なる語氣見え、少しく眞摯敬虔の態度に缺けたる如く思はるゝは、此種の譯書にありて最も大なる遺憾なりといふべし。さもあらばあれ、其記する所は確かに時弊に適中して人をして反省せしむる所少からざるを以て、原著を讀み能はざる人には誠によき讀物の一なりといふを憚らざるなり。(定價三十錢)

▲妙な男(後編)　菊地幽芳著　金尾文淵堂發行

前きに本誌に於て紹介せる幽芳氏の著妙な男の後編なり、著者の筆は純文學的見地よりすれば多少の非難すべき處なきにあられど、結構布置を以てよく讀者の好奇心を釣り行く手腕は確かに凡ならずと思はる。前編を讀みたる讀者は必ず此後編をも讀まざるべからず。(定價六十錢裝釘美)

▲雲がくれ　江見水蔭著　今古堂書店發行

「二六」紙上に連載せられて一部の讀者の好評を博したるものを一册子に集めたるものなり。一日／＼の變化を求めたる爲にや全體としては些か慊らぬふしもあれど、例によつて輕妙の筆致人をして破顏せしむる所少からず。殊に表紙の瀟洒なる意匠、頗る吾人の趣味に適したるを覺ふ。(定價六十錢)

▲緣の糸　柳川春葉著　金尾文淵堂發行

此編は數年前或地方新聞に筆を執りたるものなれば到底見るに堪へずと著者自らの斷りたる如く、今日の春葉氏の作物に比しては餘程見劣りせらるゝ所あれど、アッサリとして且同情の念に富める著者の筆づかひは流石にこゝにもあらはれて、吾等は著者の謙遜したるが如き悪作にはあらざるを信ず、家庭の婦女子の讀みて面白きものなり。（定價六十錢）

▲伯爵婦人（後編）　田口掬汀著兼發行

▲比較殖民制度　竹越與三郎著　讀賣新聞社發行

の二書は次號「陽春號」に於て詳評を試むべし。

退社の辭

高山血來

小生義、此度中央公論記者の任を辭し、今後專ら修養致すことに相成り候、此段辱知諸兄及び讀者諸君に謹告致候、尚ほ小生在社中、直接間接に御配慮被下候先輩諸先生の御好意、まことに難有く之にて御禮申上候、

當分の中、本郷區元町二丁目四十一番地岡田屋方に籠居、滅多に外出致さず候、御遊に御立寄被下度候。

三十九年二月

前號要目

此廣告によ り御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

今井恒郎先生監修
日本濟美會編

家庭及教育

醫學士 臺灣醫院醫長(小兒科専門)臼杵才化 文學士 北澤定吉 文學士 菊池季吉 文學士 小林一郎 文學士 若木貞二 諸先生補助執筆

洋裝美麗 大本全一冊
●高尚函入 正價 金五圓五十錢
小包料内地三十錢(本桐箱入は實費五十錢增)
臺灣清韓五十錢
●最新刊既成 總目錄及見本御申込次第送附候

(本書の特色)

●**本書**は讀み易からんが爲めに本文を四號活字總振り假名とし猶詳細の説明を六號活字の註文となし以て熱心忠實なる讀者の便益に供せり

●**本書**は名流大家の和歌俳句洋詩(意譯)凡三百餘篇を隨處に掲記し讀者をして諷誦咏嘆以て一層深く本文の主意を領得せしめんことを努む

●**本書**の口繪家庭團欒圖は鹿子木畫伯の筆に成り木版五十三度摺彩色玩具圖は木版五十一度摺極彩色一は優雅の致を極め一は艶麗の趣を極む

●**本書**は兒童體格發育解剖遊戲玩具等に關する精巧を極めたる寫眞版又木版凡百個(外二頁大木版圖八葉)を挿入し以て參覈研究の資に供す

●**本書**の用紙は光澤强からざる特別上質舶來紙を用ひ印刷は熟練の職工を選び特別の注意を拂ひ文字鮮明を極め印刷の體裁亦頗る美麗なり

●**本書**の製本表裝は鹿子木畫伯の意匠に基き製本師の慘憺たる苦心に成り金版彩色金箔模樣八度捺體裁高尚にして裝釘亦堅牢確固なり

家庭の改善教育の進步を圖るは今日我帝國の獲得せる未曾有なる戰捷の光榮を全うする最根本最急務なる問題に非ずや抑々家庭は兒童教育上何如に重大なる關係を有するか**家庭**は如何にして**圓滿和樂**ならしめ得べきか**教育**は如何にして**善良有爲**の第二國民を養成し得べきか本書は即ち此戰后先決問題に向つて**健全穩當**なる**解答**を與へん爲に出づ 本書編を分つ五 曰總論曰身體及其育成曰精神及其養成曰德育及美育曰精神的病弊及其矯正 家庭及教育上の問題を竪説横説して餘蘊なし世の家を成さんとする男女及子女を有する父母は勿論普通教育を施す諸學校にも**家庭の寶典教育の金鑑**として必一本を備へらるべき良書なることを敢て勸告して憚らざる也

發兌元 東京市京橋區尾張町二丁目 書肆 東海堂

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

贈正四位 釋契冲撰

文學博士 木村正辭校訂

（見本）往復はがきにて申込次第送付す

豫約募集

萬葉集代匠記

萬葉集は本邦最古の歌集なり本邦の詩經なり和歌和文に志ある者の必讀の書たり而して之が註釋書たる代匠記は國學復興の碩儒僧契冲師が水戸光圀卿の懇囑によりて著されたる者にして識見の卓拔議論の壯快を以て不朽の令名を流せる者なり今萬葉學の泰斗木村博士の校訂を經て博く之を江湖に頒たんとす無慮三千四百頁の大冊之を再刊する極て難し願くは此期を逸せずして加盟せられんことを

豫約方法

●本書は菊版三千四百頁の大冊　製本を分ちて左の二種類となす

〔和本〕和紙刷高雅表装全二十二冊〔洋本〕洋紙刷總洋布製金文字入全五冊

區別	正價	豫約價	東京市外送料	臺灣清韓送料	東京市內
和裝	金拾四圓	金七圓五拾錢	金四拾錢	金六拾錢	に限り送
洋裝	金拾圓	金五圓五拾錢	金五拾錢	金七拾錢	本料不要

豫約期限三月二十日迄とし期限後は斷然正價に復す、製本出來期を四月中とし申込順により全部一括して送本す本書は製版既成なるを以て出來期限を誤ることなし

●豫約申込所 東京牛込早稻田 **早稻田大學出版部** 豫約取次所 全國各書林●

此廣告によりご注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

醫學博士 片山國嘉先生序

前高輪佛教大學講師 妻木直良先生著

文學博士 前田慧雲先生校閲及評論

靈魂論

洋裝菊判四百頁

定價金六十七錢

小包料金十錢

●新刊發賣

嗚呼殉國十萬の忠魂は其枯骨と共に滿洲の野に消滅したるか、廣瀨軍神の絶叫したるが如く、七回生を享けて皇國を擁護すべきか、實にこれ千古の疑問なりとす、本書は此疑問を解決するがために生れたり、一編四百餘頁、題を分つこと五、總論には東西兩洋に涉りて古今の學説を評論し、第一編より第四編に至りては根據を東洋哲學に置き、古來嘗て組織的に解釋せられしことなき佛教各宗に涉りて、緻密に簡明に新説明法に依り叙述せり、第五編には、著者の見解、及び大藏經中五十有餘の經典中より生死に關する佛説を引き、終りに索引を添ふ惟ふにこれ死者に對するの道を教へ、生者に安心を與ふるもの、蓋し萬人必讀の良書なり、乞ふ愛讀の榮を賜へ

發行所 東京市神田區小川町一番地 文會堂書店 同 裏神保町九番地 合資會社 冨山房

販賣所 ●東京 鷄聲堂 ●大阪 吉岡 ●京都 興教書院 顯道書院 ●名古屋 川瀨 其他各書店

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新風俗詩雑誌

五月鯉

毎月一回一部金十三錢

郵税共半年分金七十五錢

二月廿日發行 第二巻二號要目

東京市麹町區富士見町六丁目十番地

川柳久良岐社

在大學院法學士 河上肇著

新刊

社會主義評論

(第二版)

定價 金廿五錢
郵税 金四錢

社會主義の主張如何、價値如何、抑亦日本社會主義者の論議の正否如何、此書は此等の諸問題を研究して、論理井然、斷案明確なるのみならず、文章雄大奔放にして天馬空を行くの慨あり、槍玉に擧げらるゝ者は誰か!、曰明治政府の俗吏曰矢野龍溪曰安部磯雄曰堺枯川曰金井延曰田島錦治曰幸德秋水諸氏、敵も味方も皆之を讀まざるべからず

發行所 東京銀座 讀賣新聞社

賣捌所全國到處の書肆にあり

中央公論定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢

郵税共

●但海外(清國は本邦郵便局所在地を除く)は一部郵税六錢を要す

送金注意

一 郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし
一 郵券代用の場合は必ず壹割増のこと
一 誌代、廣告料とも總て前金にあらざれは御需めに應せす
一 前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一 雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年二月廿五日印刷
明治三十九年三月一日發行

發行兼編輯人　武田酉松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　(電話下谷九一九)反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場



[illegible]盃及大盃

記念御[illegible]品若くは[illegible]用[illegible]を旨とし御
商店に於て申すべく[illegible]年[illegible]用に
し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは[illegible]各
位の御[illegible]せられ[illegible]を[illegible]と[illegible]御
注文[illegible]下度候

一 七圓五十錢也
一 金拾圓九拾錢也
一 金[illegible]圓[illegible]錢也
一 金[illegible]圓五拾[illegible]錢也
一 金弐拾[illegible]圓八拾錢也

三ツ組ノ部

一 金拾六圓[illegible]也
一 金拾[illegible]圓弐拾錢也
一 金弐拾[illegible]圓八拾錢也
一 金[illegible]拾[illegible]圓也
一 金四拾圓八拾錢也
一 金五拾[illegible]圓九拾錢也

[illegible]

臺彫刻 一個 金壹圓五拾錢
一文字彫刻 一字 金拾錢
大字彫刻 一字 金七拾錢

其他何品に依らず[illegible]